
Tales of Lyrical Nanoha ～次元を超えた物語～

紅蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Lyrical Nanhua 次元を
超えた物語

【Nコード】

N9941L

【作者名】

紅蓮

【あらすじ】

『オールドラント』『テルカ・リュミレース』『エフィネア』などのテイルズの複数の世界で一つの次元が成り立っている世界、通称『ダイランティア』

英雄達によって救われた各々の世界は、新たな時代を迎えようとしていた。だが、ある者の手によって、今この『ダイランティア』全世界を巻き込む危機が訪れようとしていた。

そして、その影響は『ダイランティア』とは別の世界・魔法と科学が発展する『ミッドチルダ』に

まで及ぼうとしていた。

テイルズオブシリ

ーズと魔法少女リリカルなのはS t r i k e r sのED後を描いた
クロスオーバー 二つの世界の英雄たちと魔法少女たちの次
元を超えた絆、そして二つの世界の命運をかけた戦いが、いま幕を
開ける。

本編を読んでもらう前に…（前書き）

一度、リリなのとテイルズオブ全シリーズのクロスオーバーをやってみたいなっと思い、書いてみました。

小説は初めて書くので、誤字・脱字・駄文などがあるかもしれせん。

今回は、テイルズオブシリーズからこの2人を招いての本編の設定等の説明です。気軽に読んでみて下さい。

それではどうぞ。

本編を読んでもらう前に…

エステル「皆さん、はじめまして。『テイルズオブヴェスペリア』のエステリーゼ・シデス・ヒュラッセインと…」

ユーリ「同じく『テイルズオブヴェスペリア』のユーリ・ローウェルだ。よろしく（棒読み）」

エステル「もうユーリ。もっとやる気を出して下さい。せっかくこの小説読んでくださる読者さんに失礼ですよ。」

ユーリ「んなこと言ったって、今回は本編の設定についての説明だろ？ こういう事は普通、作者本人がやることだろうが。」

そんな事言われても俺、説明するの下手だから、君達2人にこの仕事を依頼したんじゃないか。

ユーリ「って、急に現れるな！びっくりするだろうが…」

さっきからここにいろよ！それに、そんな言い方しなくてもいいじゃないか…俺、泣いちゃうぞ？

ユーリ「好きなだけ泣いたらどうだ？泣いたって、こっちは困らないからよ♪」

うう…ひどいよ（泣）

エステル「ユーリ。これから出演させてもらうのに、作者さんに失礼ですよ。それに引き受けた仕事は、きちんとこなさないと『凛々

ブレイブヴェスベリア
の『明星』の名に傷が付いてしまいます。」

ユーリ「それだったら、エステル1人でやってくれよ。オレはパスするからな。」

そんな事言っているのかな？ちゃんと仕事してくれたら、報酬にこれをあげるのにさあ♪

《ダングレストの酒場・期間限定スイーツバイキング2時間無料券》

ユーリ「!!! エステル、早速始めるぞ!!!」

エステル「ええ！はっはい!!!」

(切り替わり早!!!)

ユーリ「ところで、この小説ってどんな話なんだ？」

エステル「この小説は、技術も文明も異なる複数の世界で1つの次元が構成される世界『ダイランティア』と多数の次元世界を管理する魔法と科学が発展した世界『ミッドチルダ』の2つの世界を舞台に迫り来る危機に立ち向かうというお話です。」

ユーリ「ってことは、オレ達が住んでいる『テルカ・リュミレース』はその『ダイランティア』の1つって事か…。」

エステル「はい。この異世界『ダイランティア』は、ファンタジアからグレイセスまでテイルズオブシリーズの世界を総称したオリジ

ナル設定だそうです。シナリオは一部オリジナル設定があるみたいですが、作者さんは各シリーズの原作通りに話を進めるそうです。」

ユーリ「そうすると、リリナの側も含めると相当な人数が出演するって事になるな。」

エステル「私、他の作品の人達と共演できて、とても嬉しいです！」

ユーリ「オレも自分の世界以外の強い奴らと戦えるってなると腕がなるな。」

エステル「ちなみに物語の時間軸ですが、テイルズ側ではそれぞれの世界で異なりますが、ゲームクリア後の数ヶ月から半年以内。リリナの側は、機動六課解散から約1年後だそうです。」

ユーリ「なるほどな。で、その迫り来る危機って、具体的にはどんなもんなんだ？」

エステル「それが…まだ私も教えてもらってないんです。」

ユーリ「エステルも知らないのか。ってことは、ここから先は読んでみてからのお楽しみってわけだな。」

エステル「そうですね。私もこのお話がどうなっていくのかとても気になります。早く読んでみたいです♪」

ユーリ「それは、この作者の腕次第だな。まっオレは、最後まで挫折せずに完結する事を祈ってるさ。」

エステル「もうユーリ。気分が台無しです。」

ユーリ「冗談だよ。とにかく、作者本人曰わく駄文で文才がないみたいだが、いい作品にしていきたいみたいだから、応援してやってくれ。」

エステル「本編で皆さんとお会いできる事を楽しみにしてますね♪」

お疲れ様！！2人とも、良かったよ。

エステル「あっありがとうございます！」

ユーリ「早速なんだが、報酬の無料券♪」

終わって早々にそれかよ。まあ約束だったしな。ホイッと

ユーリ「おっ、サンキュー♪」

（本当にユーリって、甘いものには目がないんだな…）

ユーリ「んじゃ、仕事も片づいたし、帰るとしますか。」

エステル「そうですね。あまり遅くなると、みんなに心配をかけてしまいますからね。」

そっか、今回は仕事を引き受けてくれてありがとう。それじゃあ2人とも、本編でもよろしく！！

エステル「はい！これからもお世話になります。」

ユーリ「ああ、よろしくな。」

本編を読んでもらう前に…（後書き）

いかがでした？ まだまだ未熟ですが、頑張って書いていきますので、
よろしく願います。

皆様からのアドバイス等、随時募集中

プロローグ（前書き）

プロローグです。

誤字・脱字・駄文等があるかもしれませんが、よろしく願います。

プロローグ

ここに、一冊の本がある。見るからに古く、本の表紙が今にも剥がれそうなくらいボロボロとなっている。

だが、この本に書かれている内容は、どんな学者から見ても欲しくなるほどの歴史的価値のある史実や事柄が事細かく書かれた年代物である。

あるページに1つの詩が書かれている。

それは、神により詠まれたとされる古より伝わりし詩。

《人間の歴史は戦いと共にある。

幾百の世界で、幾千の時を超えて覇を競い、幾億の命が露と消えた。

仮初めの恩恵を取るがため、犠牲者の血の海の広がり、もはや止まらぬ。

真実を見据えぬ愚者の民の歴史こそ・・・

人間が永遠に縛られ続ける罪と後悔の鎖である。》

プロローグ（後書き）

この『詩』が、今後の物語の重要な鍵になるかも？

分かっている方もいるかもしれませんが、元ネタはTOVSです。

次回は、いよいよ本編に突入です！

第1話（前書き）

やっと出来上がりました。文章書くのって大変です。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

それでは、本編をどうぞ!!

第1話

【天界】

ここは、ダイランティアの次元の狭間。人間が決して踏み入れることの出来ない場所・『天界』。

人々から神と呼ばれる住人達が暮らし、彼らによって複数の世界で支えられるダイランティアの次元の均衡を保たれている。

もちろん、ダイランティアに暮らす人達はその存在すら知らない。

この天界の中心部に浮かぶ大きな城・『天界城』。その奥にある大広間に、綺麗な金髪に橙色と黒のマントを纏う男が何か思い詰めるような表情で窓から外を眺めている。

彼の名はダオス。天界の住人達から『天界の長』と呼ばれ、この天界を統治する王のような存在である。

「ダオス、此処にいたか。」

不意に後ろから声をかけられたダオスは、ゆっくりと振り向く。そこには、肩までかかった長い金髪に白い服を着た男が立っている。

「ユグドラシルか。私に何の用だ？」

ユグドラシルと呼ばれる男。彼もまた、ダイランティアの次元の均衡を管理する天界の住人の一人で、ダオスの側近を務めている。

「ダオスよ。本当にこのダイランティアの運命を人間達に委ねるつもりなのか？」

「…言ったはずだ。あれは、私が『彼女』の意志に基づいて決めたことだ。」

ダオスの言う『彼女』とは、かつてこの天界を治めていた天界の住人の一人・女神マーテル。

彼女は、天界やダイランティアの人々を愛し、全ての人々の幸せを願っていた。ダオスも彼女に長い間仕え、彼女の事を敬愛するほど特別な存在なのだ。

だが、その『彼女』はもうこの世にはいない。

「人間を信用していない貴方から出る発言とは思えないな。貴方も知っているはずだ。あの時、我々がどれだけ人間が愚かな存在であるか思い知らされたか…」

「確かに、私は人間を信じてはいない。あの時、欲望につきぬ人間の愚かさを嫌と言うほど思い知らされた。」

「ならば…」

「だが…人間の中にも、欲望を未来への生きる希望にすら変えてしまう者たちがいる事を私は知った。故に、その者たちの存在が『彼女』の意志を…世界に真の繁栄をもたらせるかどうかを試す。もし、再び道を外すようなことがあれば、今度こそ私の手でダイランティアに真の救済を行い、人々を救う。あの時から、私はそう決意した。」

『人々を救いたい』

それは、マーテルがダオスに残した最後の言葉であり、『彼女』の意志なのだとダオスは考えている。

「そうか、残念だよ…ダオス。」

そう言うのと、大広間へ多数の兵士達が一斉に入ってきて、全員がダオスに剣を向ける。

「ユグドラシル、どういいうつもりだ!?!」

「ダオス、この際はっきり言わせてもらおうか。もうお前にはついていけない。」

「何!?!」

「人間は、私利私欲しか考えない愚かで哀れな生き物だ。貴方は、その者たちに期待しているようだが、朽ち果てない欲に溺れる人間がそう簡単に心変わりするはずがない。このまま生かしておけば、このダイランティアの均衡が乱されるだけだ。あの時のようにな…」

「私の意志は、マーテルと共にある。私に逆らうということは、『彼女』の意志に逆らう事と同じだ!」

「ふっ…『人々を救いたい』か。彼女がいなくなってもなお、あのような言葉に従うとは…お前も馬鹿だな。」

ユグドラシルのあざ笑うような発言を聞いた瞬間、ダオスの表情は一変した。

「貴様：『彼女』の事を、侮辱するなあ！！」

冷静でいたダオスの表情には、怒りで満ちている。マーテルを敬愛するダオスにとって、『彼女』の事を侮辱するような発言は絶対許さない。

「光よ！《ダオスレーザー！！》」

『うわああああ！！！！』

ユグドラシルを含む兵士達に強力な光線を放つ。見事に兵士達を命中し、辺りは土埃が舞い上がる。

「流石だな。あれだけの兵士達を一度に吹き飛ばしてしまうとは…」

だが、土埃の中から紫色に輝く羽が生えたユグドラシルが無傷で現れる。側近とはいえ、彼もダオスと同等の力を持っている。そう簡単には、やられたりはしないみたいだ。

「ユグドラシル、貴様に今一度聞く。『彼女』の意志に刃向かうか？」

ダオスの表情は、未だ彼女を侮辱された事への怒りに満ちていたが、それを抑え込みながらユグドラシルに問いかける。

「何度聞いても答えは同じだ。それに、私を止めようとしても無駄な事だ。私の計画はもう既に始まっている。」

「…どういう意味だ？」

「今頃、私の部下が大精霊ゼクンドゥスを捕らえている頃だ。そして、『次元の楔』も…」

「！」

ダオスはユグドラシルの言った事に驚愕した。なぜなら、ユグドラシルがこれからしようとしている事がすぐに予想出来るからだ。

「貴様！自分が何をしようとしているのか、理解しているか！！」

「ああ、分かっているとも。だが、これでいいのだ。新たな世界を…理想郷を創るために…」

不気味な笑み浮かべながら、ダオスに向けて言う。

「…どうやら、道を踏み外したようだな、ユグドラシル。ならば、私の手で貴様を裁く事が私の責！そして『彼女』の意志に逆らった自分の愚かさを、身をもって後悔するがいい！！」

ダオスが術を詠唱しようとしたその時、あることに気づいた。

「こっこれは！？」

「ふふっ、ようやく気づいたか。お前の先の攻撃に紛れて、禁忌の封印術を掛けさせてもらった。これでもう、お前は私には勝てない。」

ダオスの手の甲に描かれる印。それは、あらゆる魔術を発動できなくする天界で禁忌とされる強力な封印術だ。

「愚かな…この程度で私を抑えつけたと思ったら、大間違いだぞ！」

だが、そんな事はお構いなしにユグドラシルに向かって行った。術が使えないなら、体術による接近戦に持ち込むしかないと考えたからだ。

「《テトラアサルト！》」

拳と蹴りを二回ずつ繰り返す格闘系の特技で反撃を仕掛ける。だが…

「言ったはずだ。『私には勝てない』と…」

「何!?!」

ユグドラシルの正面に、見えない障壁のようなもので攻撃が防がれた。

「我を仇なす者を貫け 《ホーリーランス！》」

「ぐはっ！」

ダオスの頭上から六本の光の槍が降り注ぎ、直撃をくらう。

「くっ 《ダオスコレダー！》」

「無駄な事を。」

すかさずダオスは体制を整えようと衝撃波を起こすが、動きを読まれたのか再びユグドラシルの作り出す見えない障壁で防御される。

「《アウトバースト!》」

「ぬああ!」

「《ユグドラシルレーザー!》」

「ぐあああ!」

ユグドラシルも衝撃波を起こしダオスを吹き飛ばす。続けて強力な光線を放ち追撃する。

ついに、ダオスはその場で膝をついた。

「そっそんな馬鹿な…その力はいったい!」?

「愚かなのは、お前の方だったようだな。」

ダオスは、自分が知っているものと違う力を持つユグドラシルに驚きを隠せなかった。

すると、ダオスを中心に突然、魔法陣が展開される。

「空間転移魔法だと! 貴様、何を!」?

「ここで始末しても良いのだが、お前は今後の必要となる人材だ。だが、今は私の計画の障害にしかない。だから、私の計画が完了するまで、ダイランティアで大人しくしてもらおうぞ。」

「貴様!」!」ぐっ…」

ユグドラシルの一方的な攻撃に相当なダメージをくらったせいで、

ダオスは膝をついたまま動けなかった。

「ではよい旅を…ダオス。」

「おのれ、ユグドラシル!!」

ユグドラシルが指を鳴らすと同時に、ダオスは魔法陣から放たれる光に包まれる。光が収まると、そこにはダオスの姿はなかった。

「安心しろ。私がやろうとする事は、お前にとっても喜ばしい事だ…さて、あっちの方はどうなったか？」

そう言いながらユグドラシルは、自身の足元に空間転移魔法を発動し、何処かへ去っていった。

第1話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

というわけで勝手に始めてみました。 【テイルズオブ後書きコーナー】！！

本編の作者・紅蓮です。そして：

カノンノ「アシスタントを務めます『テイルズオブザワールド・レディアントマイソロジー2』のヒロイン、カノンノ・イアハートです♪」

の二人でお送りして参りたいと思います。

カノンノ「ところで作者さん。私、このコーナーで何やるのか、まだ詳しく聞いてないんですけど…」

そりゃそうだ。だって、何やるかまだ決めてないもん。

カノンノ「ええ！！じゃあ何で始めちゃったんですか!？」

カノンノ、それ言っちゃったら、後が続かないでしょ。

カノンノ「ハァ。幸先、不安になりますね。」

まあまあ、何とかなるって：

じゃあ、カノンノ。今回の話はとうだった？

カノンノ「ビックリしましたよ！だって、第1話からいきなりテイルズのラスボスキャラの二人が登場しちゃったんですから。」

話の構成段階で、敵キャラからは、この二人が出演決定していたからね。ちなみに、ユグドラシルに関しては、本編オリキャラ設定にしてみました。ダオスも原作とは違うけど：

カノンノ「でも、ユグドラシルはいったい何をしようとしているのかな？」

それはネタバレになるから、これ以上は言えませんよ。
というわけで、次回もよろしくお願いします。

カノンノ「私も早く本編に出たいなあ♪」

あつ、ちなみにカノンノ。君が本編に出る予定はないよ（笑）

カノンノ「え！？さっ作者さん、それってどういうことですか！って、逃げないで下さいよ！！」

第2話（前書き）

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回もテイルズ側の話になります。リリナの側の話はもう少し待ってください。

それでは、どうぞ!!

第2話

ダオスとユグドラシルがぶつかり合っていた頃

【時空の神殿】

ダイランティアの次元の狭間に浮かぶ遺跡・『時空の神殿』。
今、この神殿の最深部で激しい戦いが繰り広げられていた。

長い銀髪に青と黒のマントを纏う男が、今にも倒れそうな程に息を弾ませながら立っている。その男の目の前には、黒髪のポニーテールと左目に眼帯をつけた女性が平然たる顔つきで男を見つめる。

「き…貴様…こんな事をして…一体何が目的だ!!」

「目的? そんなものないわ。私は主の命令に従っているまで。さあ、大人しく捕まりなさい。『時空の大精霊』・ゼクンドウス。」

女性は見下すようにしてゼクンドウスに言いながら睨みつける。その鋭い眼光からこの場の空気を重苦しく感じるぐらいのプレッシャーを与える。

「我が…そう易々屈すると…思っているのか?…今ここで…我が、倒れるわけには…いかないのだ!!」

ゼクンドウスの体はもう限界に近いはず。にもかかわらず、彼は女に立ち向かおうとする。

「そう：なら仕方がないわ。」

すると、女性は懷から赤い石が入ったペンダントのような小さなケースを取り出す。

「主の望む理想郷の為。あなたの力を使わせてもらうわよ、ゼクンドウス。」

「なっ何を！？うわあああああ！！！」

取り出したケース内の石から赤い光を発すると、ゼクンドウスは悲鳴を上げながら、発した光に体が吸い込まれるようにしてケースに閉じこめられてしまった。

「これでまずは一体目。大精霊と呼ばれるぐらいだから少しは期待してたけど、大した事はなかったわね。さて：」

張り合いがなかった事を残念そうに言いながら、女性は先程までいたゼクンドウスの背後にあるものを見る。そこには、白く光輝く綺麗な柱が神殿内にそびえ立っている。

女性が柱に近づこうとした時、

「いやゝあの精霊をいとも簡単に捕まえちゃうなんて。御影ちゃん、すげえぜ！」

女性の背後から一人の男がどこからともなく現れた。

長い紅髪に軽薄そうな雰囲気漂わせるこの美青年。御影と呼ぶ女性に満面の笑みを見せながら近寄っていく。

「ゼロス：今まで何処にいたの？」

「俺様か？御影ちゃんのクールに闘う美しい姿に見惚れてただけよ」
♪

そう、この青年はかつて世界再生の旅を果たした英雄の一人である
テセアラの神子ことゼロス・ワイルダーだ。

ゼロスは、相変わらずのように誉め言葉を口にする。本当は隠れて
いたくせに…

「…まあいいわ。そんな事より、今からあれを壊すから、それぐら
いは手伝いなさいよ。」

しかし、御影はゼロスの話を完全に無視する。

「（ありやりや、完全にスルーされちゃったぜ。）もちろん♪御影
ちゃんの頼みなら、俺様喜んで手伝っちゃうよ。んで、具体的にど
うすりゃいいんだ？」

「簡単よ…全力で破壊するのみ！！」

すると、御影は数十枚もの札を懷から手に取り出し、攻撃の構えを
とる。

「（やっぱそうなりますか…）あいよ…雷雲よ 唸れ 《サンダー
ブレード！》」

「《炸力符！》」

雷の剣と炸裂する数枚の札が柱に直撃し、大きな亀裂が入る。さら
に…

「《爆呪符!》」

手に持っていた残りの数十枚の札を柱にばらまくと、一枚一枚の小さな爆発が連鎖し、やがて大きな爆発となって柱に襲いかかる。そして、柱は見事に倒れて粉々に砕けてしまった。

「任務…完了。」

「さっすが御影ちゃん。ナイスバディな上にクールビューティー！俺さま惚れ惚れしちゃうぜ♪」

「…」

またもこの男は、懲りずに誉め言葉を口にするが、御影は完全に無視。

その時…

「なんだなんだ!?!地震か!?!」

突然、神殿内が大きく揺れ始めたのだ。

「まさか、主が言っていたのはこの事か?」

「?」

「『次元の楔』を破壊したら、すぐに撤退しろつと言われてたのよ。多分これは、さっきの柱を壊したせいかも…」

「ええー!! だったら早いとこ逃げねえと、ヤバいんじゃないか!」

「？」

この現象について冷静に分析をする御影。それに対し、そんな落ち着いている場合じゃないでしょっと慌てふためくゼロス。すると、神殿の天井や周りの柱が崩れ始めてきた。

「まずいわね。ゼロス、さっさと脱出するわよ！！」

「了解、御影ちゃん♪」

二人は急いで神殿の出口に走る。だが、神殿の崩壊は予想以上に早く、出口までもう間に合いそうになかった。

「ちっ…ゼロス、私の近くに来て！このまま時空転移するわよっ！！」

「え！？御影ちゃん、そんな事も出来んの？」

「これさえあればね。」

「って、それってさっきの…」

御影は、先ほどゼクンドウスを閉じこめたケースを手取る。そして、そのケースを真上に掲げると御影を中心に時空転移魔法が展開される。

「すっすげえー！！」

「ゼロス、行くわよ！！」

「あいよ!!」

二人は、そのまま何処かへ空間転移した。その直後、神殿は跡形もなく崩壊してしまった。

同じ頃、

【???】

とある森の奥深く。周りが遺跡に囲まれた広場に、一本の立派な大樹が立っている。その大樹の前に、綺麗な長い紫の髪をし、全体は緑色に数本の黄色のラインが入った服装を纏い、片手に杖を持つ一人の女性が立っていた。

「（ゼクンドウス！ゼクンドウス！！）…一体、何が起きたというのですか？」

女性は、念話のようなものでゼクンドウスとの連絡が突然とれなく、彼の身に何かあったのではないかと心配していると、突然激しく大地が揺れ始めた。

「この感じ…まさか『次元の楔』が！！…なんという事を。早く…早く何とかしなければ…」

すると女性は、大樹に手を当てて意識を集中させる。女性の体と大樹が淡い光に包まれて光り出した。すると、揺れが徐々に収まり始めた。

「これで、ひとまずは安心です。でも：何でしょうか、この胸騒ぎは。とても不吉な予感します。」

女性は自分の胸に手を当て、不安げな表情を浮かべながら大樹を見つめる。

話は少し遡る。

【エターニア・セレスティア】

ここは、『インフェリア』と『セレスティア』の二つの世界から成る『エターニア』と呼ばれる世界。二つの世界の衝突する現象『グランドフォール』を阻止し、それぞれの世界が切り離されてから半年後の事。

『セレスティア』の北の大陸、何もない荒野を二人の青年が歩いている。

「ハアハア…なありッド、今日はこの辺で休まないか？」

袴のような全体が白い服を着て、後ろに髪を束ねている青年が、リッドと呼ぶ赤毛の短髪に獵師の格好をする青年にキャンプしようを提案する。

「なんだよキール、もうバテてんのか？さっきも休んだばかりかどうが…」

リッドは一度立ち止まり、キールと呼ぶ青年の方を振り向き、呆れながら言う。

「うつうるさいな！…だいたい僕は…アウトドア派じゃないんだ。」

「だったら、最初からしなきゃよかっただろ？」

「そっそうはいかない。これは…僕の今後の研究の為に…自分の目で調べ…回る必要があるんだ。」

「はいはい。だったら、研究ばっかやってないで少しは体を動かして…」

リッドがチラッとキールを見ると、息を切らせ苦しそうな顔をしている。

キールは、普段から勉強ばかりで引きこもりがちだったため、人よりも体力がない。だから、長距離を歩くことも彼にとって大変なのだ。

そんな様子を見たリッドは、

「…分かったよ。日も暮れそうだし、今日はここでキャンプすつか。」

「

地平線を見ると、日が沈みかけ始めていた。夜間の道を歩くのは危険と判断して、二人はここでキャンプすることとなった。

夕食作りはリッドが担当。鍋を焚き火の火にかけて煮込んでいると、少し落ち着いたキールが自分の荷物からある一冊の本を取り出す。その本は、見るからに古く、表紙は今にも剥がれそうぐらいボロボロになっていた。

「ん？キール、何読んでんだ？」

「これか？以前立ち寄った街で見つけた文献だ。最初にこれを読んだときは、僕も正直驚いたよ。『インフェリア』の王立図書館ですら載ってない『エターニア』の大昔の史実やこの世界の成り立ち、さらには大晶霊たちについて、とても興味深い事が書かれてある。これは今後の研究論文としていい資料になると思うんだ。」

「あつそ…」

この本について熱く語るキールに対し、興味なさそうに返事を返すリッド。

そもそも、何故二人は『セレスティア』にいるのか？それは、キールの晶霊学の新たな研究論文を書くためだ。

元々二つの世界は、約二千年もの間、交流を途絶えていたため、『インフェリア』には『セレスティア』に関する資料はほとんどない。そこでキールは『セレスティア』に飛ばされた後も、故郷には戻らず晶霊についての資料を集めようと考えたのだ。

「でもよお、ファラ達には内緒で出てきたからなあ。きっと帰ったら怒られるんだろうよ。」

「何だよ今さら。嫌だったら、別について来なくてもよかっただろ。僕一人でも旅が出来るし…」

「でもなあ。」

リッドはキールをジッと見ながら言う。

「なっなんだよ？」

「キールを一人で旅するなんていうのも、それもそれで危なっかしい話だからな。」

「うっ！」

確かにそうだ。学問しか頭がないキールが、前回の旅以外のアウトドア経験はほとんどない。

それに、旅には危険が付きもの。道中魔物と遭遇しても、キールの戦闘スタイルを考慮すればかなり不利だ。

ましてや体力不足な彼が一人で旅するというのは、あまり無謀な話だ。

「そっそれは…」

「まあもしもキールの身に何かあったら、俺にフアラ、みんなが心配するだろ。だから俺はついてきたんだよ。それに、前の旅はフアラに連れられて旅してたからめんどくさかったけど、旅をするのも案外悪くないからな。」

面倒な事に巻き込まれるのが嫌いなリッドだが、前回の旅の中で彼

自身を大きく変えた。幼なじみであるキールを心配して自ら進んで今回の旅についてきた、それが彼なりの配慮なのだろう。

「リッド…」

「ん？何だ？」

「…やっぱり、なんでもない。」

「何だよ。気になるじゃねえか。」

「何でもないって言ってるだろ！そんな事より、鍋の方は大丈夫なのか？」

「つて、やべえ！…アチチッ！！」

よそ見している内に鍋から水が噴き出した。慌ててリッドは鍋蓋を取ろうとしたが、案の定といったところだ。

「（ありがとう、リッド…）」

密かに呟いたキールの言葉など知る由もなく…

その後、特に話題もなく二人は黙々と夕食を食べていると、突然地面が大きく揺れ始める。

「わぁっ！また地震か！？」

「…」

突然の出来事に驚くりっどだが、キールはそれに動じることなく冷静でいた。揺れは数十秒続いた後、次第に収まった。

「ふー、どうやら収まったみたいだな。」

「全く、お前は少し騒ぎすぎなんだよ。」

「しょうがねえだろ。突然あんなデカイ揺れが来たら、誰だって驚くだろう？」

「それにしても変だ。」

「ん？何が変なんだ？」

「今日の地震もそうだが、この辺りは地震が起きる地形じゃないはずなんだが…」

「そうなのか？」

実はここに来る途中も同じような揺れを何度も経験していたのだ。この辺りは平坦な平野が続き、地震が起きるような地形ではない。にもかかわらず、これほどの揺れが起きるのはまず有り得ない。

「そう言えばこんな事、前の旅の時にもあったよな？」

「ああ。『インフェリア』と『セレスティア』が急接近した時だったな…シゼルをネレイドの呪縛から解放して『グランドフォール』も止められたが、肝心のネレイド自体は倒せていない。」

かつて、この『セレスティア』の実質的支配者・シゼルによって『グランドフォール』を引き起こそうとしていた。だがそれは、彼女の意志ではなく彼女に取り憑いた非物質世界の神・ネレイドによる策略だった。

リッド達の活躍でその呪縛から解放されたシゼルは、自らの命と引き換えに『グランドフォール』を止めた。そして、そのネレイドは精神体の存在のため、倒すことは不可能なのだ。

「…レイス。」

するとリッドは、ある仲間の名を口にした。

かつて、リッド達と一時期共に旅をした仲間・レイス。ある理由からリッド達と敵対していたが、世界を救う為にリッド達を追うように一人で行動していた。そして、リッド自身が変わるきっかけとなった人物でもある。

だが彼は、シゼルの『闇の極光術』からリッド達を庇い死んでしまった。

そんな事をリッドに思い出させてしまった事にキールはすぐに気づいた。

「すっすまない！！嫌な事を思い出させて…」

「いや、いいんだ。あん時レイスが庇ってくれなかったら、俺達み

んなやられて世界が滅んでたかもしれない。それに、レイスが俺に託してくれた『セイファートキー』のおかげで『真の極光術』を手に入れて、ネレイドからジゼルもみんなも救えたんだ。だから、あいつの死を無駄にしちゃ駄目なんだ。俺にとって大切な人がいるこの世界を…あいつが守ろうとしたこの世界を…守りたいって、俺は決めたんだ。」

キールは驚いた。普段は脳天気な彼だが、その心の中には世界を守り続けていきたいという強い意志を持っていた事に…

「そうだな。だったらあいつの為にもお前はもう少し普段からしっかりとしなないと…」

「何だよ、それ。」

キールの皮肉にリッドは少し反発したが、お互いの顔を見るや二人はすぐに笑った。

「で、明日どうすんだ？」

「そうだな…ここ最近の起きた地震も気になるからな。明日向かう『水晶霊の山』、そこにいるセルシウスに聞いてみよう。彼女なら何か知っているかもしれない。」

キールは、前回の旅で協力してくれた大晶霊の一人・セルシウスに聞く事を提案する。

世界の事をよく知り、また他の大晶霊とは違い、人間の事をも大切に思ってくれる彼女となら、話しやすいと思ったからだ。

「分かったよ。じゃあ、俺もう疲れたから先に寝るわ。」

「って待て！まだ話は終わってない！」

「俺は寝たいときに寝るだけ寝るが俺のモットーなの。それに、今そういうの考えたってしょうがないだろ？」

「そっそれは、そうだが…」

立派な志を持ってもやっぱり、リッドはリッドのままのようだ。

「そういうことだから俺は先に寝るぜ。じゃ、おやすみ。」

「あっおい！…分かった。その代わり、明日は朝一番に…」

そう言いながら、キールはリッドの方に振り向くが、すでにいびきをかきながら眠っていた。

「ハァ、まったくお前って奴は…」

キールはため息をつくと、荷物から昼間に読んでいた文献に目を通す。それからしばらくしてキールも眠りについた。

誰もが予想だにしない危機が迫っていることも知らずに…

第2話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも、作者の紅蓮です。

カノンノ「……………」

あの〜カノンノ？

カノンノ「何ですか、作者さん？…」

って、カノンノ！目が死んでるっつか怖いよ！！ほら、コーナー始まっているんだから、いつもみたいにもっとスマイル、スマイル♪

カノンノ「…いいですよ。私は本編にも出れないまま、一生地味な脇役アシスタントで終わるんですから…」

（もしかして、前回の事でまだ拗ねてたのか？でもこのままじゃ、らちがあかない。よし！）あっそ。それじゃあ、あの話は無かったことにするかなあ〜？

カノンノ「あの話？」

（おっ食いついたな。）僕は前回、君は本編の出演なしって言ったけど、君が頑張ってこのコーナーを盛り上げてくれたら、本編出演も考えてあげたのになあ〜って思ったんだけど、やる気がないんだったらしょうがなっ（ガシッ）かつカノンノ！？

カノンノ「それ、本当ですか！！私がここで頑張ったら、本編に出演させてもらえるんですか！！！」

そっそうだけど…

カノンノ「絶対ですか！！約束破ったりしませんか！？」

しない、絶対しない！約束守るから、体揺さぶらないで！！

カノンノ「わかりました。では、本編出演を…じゃなくてこのコーナーを盛り上げていきます！！」

しっ仕事熱心で結構…

それでカノンノ。今回の話はとうだった？

カノンノ「なんか前半の部分が色々凄すぎます。それにゼロスがあるの御影って人と一緒にいるのか凄く気になります。」

やっぱりそこか。第1話を読めば、御影って人がユグドラシルの部下である事は間違いない。つまり、あのゼロスも今やユグドラシルの部下ってことだ。先に言っちゃうけど、時間軸はTOS—RのED後だからね。

カノンノ「え？じゃあ、何でゼロスがあっち側の人に？まさか、また裏切りですか！？」

さあなぜだろうね。読んで行けば分かるんじゃないの？

カノンノ「随分適当なんですね…」

さっさて、そろそろ終わりの時間がやってきましたが、次回はついにリリなの組の登場です！

カノンノ「リリなの組がどんな風に関わってくるのか楽しみです！」

では、次回もよろしく！！

カノンノ「（私も本編出演の為に頑張らなくちゃ！o^v^o）」

（カノンノ、何考えてるか顔に出てるぞ。）

第3話（前書き）

今回からリリなの組が登場します。

ただファンの皆様。キャラの口調とか間違っていたら、すみません。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回は少し短いです。それでは、どうぞ！！

第3話

【ミッドチルダ・首都クラナガン】

ここは、科学と魔法が発展した世界・ミッドチルダ

この世界には『時空管理局』と呼ばれる機関が存在し、数多に存在する次元世界を管理・維持を行っている。他にも文化管理や災害の防止・救助も主な任務としている。

その中でも、特別捜査官の八神はやてが新設した古代遺物『ロストロギア』の回収や管理を扱う部隊・機動六課は、ミッドチルダ全土を震撼させた『JS事件』の解決で本局に大きく貢献した。現在は期間満了を迎え、すでに機動六課の面々は解散し、それぞれの道を歩み始めていた。

あれから一年が過ぎ…

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての親友三人組は、久々の休暇を同じ日に合わせ、今は首都クラナガンのとある喫茶店で過ごしている。

「そっか、二人とも元気そうにやっているみたいやし、うちも安心やわ。」

「うん、私もはやての元気な姿が見れて、少し安心したよ。」

「そうだね。私も、はやてちゃんやフェイトちゃんと、こうやって久しぶりに会えて、とっても嬉しいの♪フェイトちゃんは、最近大きな事件とかあって大変だったんじゃないの？」

「ううん、大丈夫だよ。『JS事件』以降本局の体制が強化されたおかげで、最近は目立った事件もなくて、平和が続いているからね。」

三人は、お互い久しぶりに会えた事を嬉しそうに話をしている。それもそのはず。戦技教官に執務官、特別捜査官と三人とも最近まで自分達の仕事が多忙だったため、お互いになかなか会うことができなかった。そしてようやく、こうしてゆっくり親友と休暇を過ごせるのだから嬉しいはずだ。

「でも、せっかくこうやって三人で集まったんやから、どこか旅行とかしたいなあ。」

「でも、私は新しく入ってきた新人達の面倒をみなきやいけないから、またしばらくは休めないかな。」

「私も明日から別の事件を担当しなくちゃいけないから、次はいつ休めるか分からないの。」

「そっか、私も…」

どうやら三人とも、次の日からまた忙しくなるみたいだ。そう考えただけで三人の周りの空気がしけて…

「ああゝあかんあかん!!せっかくの休暇やっちゅうのに、なんで仕事の話になっとるんや!」

はやては、急に重くなった周りの空気に耐えきれず、一人でツツコミを入れ始めた。

「こうなったら、今日は仕事の事なんか忘れて、三人で思いっきりパァッと楽しもうや♪」

「うん♪せっかくの休暇なんだし、みんなで楽しまなくちゃね♪」

「そしたら、まずはどこに行く?」

「そりゃ決まっとるやないか。まずは、ショッピングモールで買い物や♪」

その後、はやての提案になのはとフェイトは賛成し、三人は喫茶店をあとにする。

一方、ダイランティアでは、

【アセリア（AC. 4306）・ローンヴァレイ付近の森】

ここは、人と精霊が共存する世界・アセリア
とある森の奥深くで、ピンク髪のポニーテールの少女がなにやら気

分よく鼻歌を歌いながら、木の実などを採取している。

「♪♪♪♪♪♪あっ！ラベンダー発見！！」

彼女はアーチェ・クライン。ここローンヴァレイと呼ばれる谷に住んでいる人：いや、正確には人間とエルフの間に生まれたハーフエルフだ。

「ふう。こんなものかな？さあて、早く帰って夕食の仕度しなくちゃ。今日は最高の日になりそう♪」

かなり上機嫌のようだ。それもそのはず。今日は彼女にとって特別な日なのだ。

数日前、アーチェの下に一通の手紙が届いた。それはかつて、あるきっかけで一緒に旅をした仲間からの手紙だった。手紙の内容によると、今日はその仲間が彼女の家に来るというのだ。そのためアーチェは、仲間との再会に張り切っておもてなしの準備をしているのだ。

だが、はたして『××料理人』と呼ばれた彼女が彼らをもてなせるのであろうか？

それはともかく、アーチェは自分の箒にまたがり、採ったキノコなどが入ったカゴを箒に掛けて、自分の家へと飛んでいった。だが、その途中のこと…

「あれ？さっきまであんなに天気がよかったのに…」

ついさっきまで清々しく晴れていた空も、いつの間にか曇り空になっていて、辺りは不気味な静けさに包まれた。

「なんか、今にも雨が降りそうだな…早く帰らなくちゃ。」

そう言うときアーチェは、急いで帰ろうとしたその時だった。

「（ピキッピキッ）えっ何？今の音？」

突然、ガラスにヒビが入ったような音が響き渡り、アーチェは飛んだまま止まり、辺りを見回す。そして、後ろを振り向くと何かを見つける。

「え！？何あれ？」

アーチェが見たものは、数十メートルほど離れた先の空に大きな亀裂が入っていた。普通に考えて、何もないところに亀裂が入るなどあり得ないはずだが、実際に起きているのだ。すると、その亀裂は次第に広がっていき、今にも割れそうにあった。

「なんかヤバそう。早くここから離れた方がよさそうだね。」

ハーフエルフの勘だろうか、この不可解な現象に何か危険を察知したアーチェは、すぐにその場を離れようする。だが、その瞬間

（ガシャーン！！）

突然空が割れ、割れた空にできた大きな黒い穴がアーチェを吸い込もうとする。

「ちょ、ちょっと！！一体何なのよ！？」

だが、アーチェも自慢の箒で吸い込まれまいと、必死に抵抗する。だが…

「もう…駄目。きゃあああああ!!」

黒い穴からの凄まじい吸引力に耐えきれず、アーチェはそのまま吸い込まれてしまった。その直後、黒い穴は徐々に小さくなっていく。そして完全に塞がれると、まるで何事もなかったかのように、空は清々しく晴れ渡っているのだった。

だが地面には、アーチェのカゴとそのカゴに入っていたであろう木の実やキノコが散らばっていた。彼女は一体どこに…

その頃、

【ミッドチルダ・首都クラナガン】

ショッピングモール内で色々と見て回っているなのは達は、とある洋服店に入り、服を見ていた。

「ねえ、なのは。これとかどうかな？」

「うーん。フェイトちゃんの服って黒物が多い気がするんだよね。私はもっと明るい色の服がいいと思うよ。あっ！これとかどうかな？」

なのはが近くに掛かっていた純白のワンピースを手に取り、フェイトに見せる。

「え！でも私、白ってあんまり着たことないから、似合うかな？」

「甘いなあ〜フェイトちゃん。女の子は大胆にいかなきゃあかんよ♪」

「そうそう。はやてちゃんの言うとおりだよ♪」

「そっそうなのかな…？」

とても和やかな雰囲気で、三人とも休暇を満喫しているようだ。
だがその時、突然店が大きく揺れ始めた。

「なっなんや！？地震か！？」

「すごい揺れ、立ってられないよ…」

フェイトの言うとおり、立っているのが精一杯というぐらい激しい揺れた。

しかし、揺れはほんの数秒間だけ続いただけで、次第に弱くなっていった。

「収まったみたいだね。フェイトちゃん、はやてちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。」

「私も平気や。でも、こんな地震は私達がミッドに来てから初めてとちゃうんか？」

「うん、そうだと思う。」

突然の出来事に少し動揺している。店にいた彼女達以外の客や店員も、一体何だったのかという様子でいた。

「あれ？なんか外が騒がしいなあ。」

すると、はやては店の外がなにやら騒がしくなっていることに気づいた。

「ほんとだ。何かあったのかな？」

「二人とも、ちょっと待ってて。私が見てくるから。」

「え！フェイトちゃん！？」

フェイトは、なのははやてをそのまま置いて、店の外へ出て行った。

「なのはちゃん、どうすん？」

フェイト一人で様子を見に行ったのを心配するはやては、なのはに聞く。

「はやてちゃん、私達も行ってみよ！」

「せやな。」

そう言うと二人も、フェイトを追いかけて店を出る。外に出ると、なにやらざわついていた。何かあったのかと思っていると、二人はすぐ近くにフェイトを見つけ、最初になのはが声を掛ける

「フェイトちゃん、何かあったの？」

「ねえ、なのは。あれ…」

フェイトが指差す方を見ると、

「え？あれって？…っ！！」

「二人ともどうしたんや？」

「はやてちゃん！あれ見て！！」

「ん？…って何や！？」

はやてもなのはが見ている方角を見て、驚いた。なぜなら彼女達は
今、不思議な光景を目の当たりにしているのだ。

街の中をピンク髪のパニーテールの少女が箒にまたがって飛んでいるのだった。

第3話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも、作者の紅蓮です。

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

さて、やっとこの第三話からリリなの組が登場してきました。ファンの皆様、遅れてしまい申し訳ありません。それでカノンノ。今回の話はどうでしたか？

カノンノ「うーん。今回は少し短かったから、なんとも言えないですが…でも。」

でも？

カノンノ「そのー。今回はあまりインパクトがなかったというか…面白くなかったというか…」

……あはははは……やっぱり、そう思っちゃったか…そりゃそうだね。だって俺、そこまで文才ないからさあ…ヘタレだしさあ………

カノンノ「さっ作者さん！そんなに落ち込まないで下さいよ！今回の話でも、ちょっと意外なあとと思ったところもありましたし、決してつまらなくはありませんでしたよ！！」

いいんだよ、カノンノ。別に慰めなくても…

カノンノ「慰めじゃありませんよ。それに、『習うより慣れよ』っていうじゃないですか。このまま頑張って書き続けたら、これからきっとよくなっていくはずです。」

ううゝカノンノ、君がアシスタントでよかったよ（泣）

という事で皆さん、こんな文才もない頼りなくヘタレな作者であります。これからよろしくお願いします。

カノンノ「（さっきよりもネガティブになっちゃってるよ!!）それっ
っそれでは、皆さん。次回もお楽しみに!!」

次回もよろしくお願いします!!

第4話（前書き）

首都クラナガンに現れた謎の少女。彼女は一体何者なのか？（わかっているかと思いますが…）

誤字、脱字、駄文があるかもしれませんが…

それではどうぞ。

第4話

ミッドチルダで謎の地震が発生した直後、

【ミッドチルダ・???】

首都クラナガン郊外のとある森の上空に、突如黒い穴が出現した。
そして、

「……あああああ!! (ドサツ)」

その穴から少女が落ちてきて、お尻から地面に着地した。その直後、
穴は段々小さくなると、完全に消えてしまった。

「…痛たたた…もういったいなんだっていうのよ!!」

よく見るとその少女は、アセリアで突然出現した黒い穴に吸い込ま
れ、そのまま行方が分からなくなっていたアーチェだった。

彼女は、一体何が起きたか分からなく、少し機嫌が悪いようだ。ア
ーチェはお尻を手でさすりながら、ゆっくり立ち上がって辺りを見
渡してみる。

「あれ?…ここどこなの?」

周りの木や草、雰囲気から先程自分いた森とは違う森であることに
気づき、ますます分からなくなってきた。

「あゝもう、わっけわかんない!!……とりあえず、この近くに誰かいないか探さなくちゃ。」

アーチェは、今ここが何処なのかを知るために、まずは近くに人がいないか探すことにした。近くに転がっていた自分の箒を拾って、箒にまたがり、森の上から辺りを見渡す。すると少し離れた所に街らしきものが見える。

「あれって街かな?…まっいいや、とにかく行ってみよ。」

アーチェは、考える事もなくその街らしきものの方へと飛んでいった。

それから数分後、街の中を飛んでいたアーチェは驚いていた。

「(なっ何ここ!?!ここまで大きい街、見たことないよ!!!)」

そこは、アセリアでも見たことがないぐらいの巨大な都市。自分の知っている『魔科学』。いや、それ以上に発達した技術であろうか、見慣れない建物や乗り物が街中にあふれている。

ますます自分の状況が掴めないでいるアーチェは、一旦空中で止まって何かを考えている。

「(うゝん。ほんとに一体どうなっているの?とにかく、街の人に聞いてみよ。)」

真下を見ると、この街の人だろうか、たくさん人が行き交っている。あれだけの人から話を聞けば、ここが何処かすぐに分かると思ったアーチェは、そのままゆっくりと地面に降り立った。

「あの、すみません。ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

だが、声を掛けようとアーチェが近寄ると、なぜか避けられるように素通りされる。それは一人や二人だけではなく、周りの人たちが同じような行動をする。中には申し訳なさそうな顔をして避ける人もいる。

「（何で？何でみんな、あたしを避けるの？…これじゃあ、まともな話が聞けないよ。）」

それもそのはず。アセリアでは、アーチェのように箒に乗って飛び回るなんて光景はよくあることだ。しかし、この世界の人たちから見れば、街中に突然、魔女のような女の子が現れて自分に話しかけてくるのだから、誰だって不審に思い、警戒してしまうのだ。当然、未だここをアセリアのどこかだと思っているアーチェに分かるはずがない。

そして、周りからの冷たい態度にアーチェは、今にも泣きそうな顔をする。

その頃、不思議な少女が降り立ったと思われる広場にやって来たなのは達。すると、その少女を見つけると悲しそうな表情で一人立っていた。

「（ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん、もしかしてこの子…）」

「（うん、多分アレっちゅう可能性があるな。）」

「（そうだね。）」

三人は念話でお互いに話をする。そして、三人の頭の中である可能性が浮かんた。

すると、少女はどこかへ行こうと歩き出した。

「（私、あの子に話を聞いてくるね。）」

「（ちょっとなのはちゃん！私も！）」

「（え！ちょっと二人とも！！置いてかないでよ！！）」

なのはが少女の方へと駆け出す。二人もなのはの後を追いかけていった。

「（あたし、これからどうすればいいの…）」

アーチェは一旦は涙を堪え、ひとまずここから離れようと歩こうとする。その時、

「ねえ、そこの君！ちょっと待って！！」

「え！？」

アーチェは、思わず後ろを振り向くと、茶色に近い橙色の髪に自分と同じようなポニーテールの女性が声を掛けてきた。その女性の後を追いかけて来るかのように、金色のロングヘアと栗色のショートヘアの二人の女性が駆けてきた。

「え？あたし？」

「そうだよ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

にこやかな笑みを見せながら、女性が話しかける。

なのは達が少女に近くと、ますます不思議に思う。古風な格好をした女の子だが、よく見ると普通の人と違って少し耳が尖っている。

「君、さっきその箒で空を飛んでいたみたいだけど、それは君のデバイスなのかな？」

「でばいす？なにそれ？」

少女は首を傾げるように言う。

「（フェイトちゃん、はやてちゃん、やっぱりこの子…）」

「（うん、『次元漂流者』みたいだね。）」

どうやら、三人の予想は的中したようだ。

「そうだ！あたしも聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「ん？何かな？」

「ここってどこなの？あたしが知ってる限り、アセリアでこんな大きな街は見たことないんだけど…」

「アセリア？うーん、聞いたことないね。」

今度は、なのはが首を傾げる。

「え！だってここ、アセリアって世界じゃないの！？」

少女は、どうやらこの世界をアセリアという世界と勘違いしているようだ。

「（はやては、アセリアって世界を聞いたことある？）」

「（うーん、知らんな。フェイトちゃんは？）」

「（ごめん。私も聞いたことないよ。多分、管理局に登録されてない世界かもね。）」

「（とりあえず、私からこの子に事情を説明するね。）」

なのはが、念話でフェイトとはやてにそう言うと、再び少女に話しかける。

「ねえ君。君って言うのも嫌だと思うから、名前を覚えてもらえないかな？」

「あたしはアーチェ。アーチェ・クラインだよ。」

「アーチェさん。今から私が話す事を落ち着いて聞いてね。」

なのはがアーチェにゆっくりと説明をする。ここはミッドチルダと呼ばれる世界である事。そして、アーチェが何らかの原因でこの世界に次元漂流した事を。

「嘘：それじゃあなに！あたしは、もうアセリアに帰れないの！？
そんなのやだよ！！クレス達にもう会えないなんて：うう：」

アーチェは、自分の置かれている状況を信じられないでいる。今日、百年ぶりに仲間と会えるはずだったのに、なんで自分はこんな目に合わなきゃいけないのか：そう思うだけで、今にも泣き出してしまいいそうになっていた。なのはも、アーチェの言葉に対してどう返せばいいか困っている。
すると、なのはの後ろでその様子を見ていたフェイトがアーチェに近づく。

「大丈夫。私たち管理局は、アーチェみたいな子を保護して、元いた世界に送り届ける仕事をしているの。」

「管理局？」

「そう。この世界には、時空管理局ってあって、簡単に言うところ色んな次元世界を管理する所があるの。私たちはそこに勤めている局員だから、アーチェを保護して元いた世界に送ってあげることが出来るの。」

「ほんと！？ほんとに、あたしのいた世界に帰れるの！？」

すると今度は、はやてがアーチェに近づいて話す。

「ほんまや。私たちが責任をもってアーチェさんを元いた世界に送り届けてあげる。せやから、安心してや。」

フェイトやはやての言葉を聞くと、アーチェは顔を一旦下に向け、自分の手で堪えきれなかった涙を拭き取り、再びなのは達に顔を向ける。

「うん、わかった。この事よく知らないし、元の世界に帰れるんだったら、アンタたちについて行くよ。それで、え〜と…」

「私は八神はやてや、よろしくな。」

「私はフェイト・T・ハラオウン。フェイトって呼んでね。」

「私は高町なのは。よろしくね、アーチェさん。」

「はやてにフェイトなのはだね。うん、よろしく!!」

それから少し時間が経ち、

「はやて、ほんとにいいの?」

「そうだよ。はやてちゃん一人じゃなくても、私たちで連れて行けば…」

はやてがアーチェを保護して管理局の方へと連れて行くと言い出す。なのはとフェイトもせっかくの休暇で、はやて一人だけ仕事をさせたくないと思い、一緒について行くと言う。

「二人とも、私の事なら気にしなくてもええよ。それに、私よりも仕事が忙しいフェイトちゃんやなのはちゃんは、これからしばらく休めないんやろ？せやから、後は二人だけで楽しんでや♪」

毎日のように現場で教導するのはと毎日のように次元犯罪者を追うフェイト。今日の休暇を逃せば、次いつ休めるのか分からない。はやては、普段から激務をこなしている二人には、ゆっくり休んでもらいたいと気遣っているのだろう。

「うん、わかった。ありがとね、はやて。」

「でも、はやてちゃんも無理しないでね。」

なのはもフェイトもはやてなりの気遣いだと気づき、それ以上は何も言わなくなった。

はやては、アーチェを連れて本局に向かおうとした……その時、突然なのはに本局から緊急の通信が入る。

「はい、こちら高町なのは一等空尉です。……はい……え!?!?…分かりました。今すぐ確認します!?!」

「どうしたの、なのはちゃん？」

「緊急の通信みたいだったけど、何かあったの？」

何かあったのかと心配して聞くはやてとフェイト。

「本局からの連絡でね、『首都クラナガン上空に原因不明の次元の歪みを観測』してみたんだけど…」

「けど？」

「そこから民間人の反応があって、地上に向かって落下してきているって。それも、私たちのちょうど真上から…」

「え!?!」

「何やて!?!」

通信の内容を聞いた二人は驚いた。三人が空を見上げると、

「なのは、はやて、あれ!?!」

フェイトが何かを見つける。それは空にポツンと人影が…それも二つ。

「はやてちゃん、アーチェさんをお願い!?!」

「わかった!?!」

はやてにアーチェを任せ、フェイトに近づくなのは。

「フェイトちゃん!?!」

「うん!?!」

その頃、

【ミッドチルダ・首都クラナガン上空】

なのは達が見た二人が地上に向かって落ちていた。だがこの二人、どこかで見覚えがあるような…

「おいキール！！何とかならないのかよ！！」

「今考えてるところだ！！」

その二人とは、セレスティアにいたはずのリッドとキールだった。

第4話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも、作者の紅蓮です。

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

さて、今回なのは達がアーチェを保護したわけだけど、いかがでしたか？そもそも最初に、テイルズ側から誰をなのは達に接触させようかというのがとても迷いました。

話を構成していく中で、一番インパクトがある登場の仕方が出来るキャラといったら：箒に乗ったアーチェ、天使化するコレットかクラトスあたりかなと思って、最終的にアーチェにしてみました。

カノンノ「そうだったんですね。でも、私が今回一番気になったのは、最後にどうしてリッドとキールがあんな事に？」

そうだね。なぜ彼らが空から突然現れたのか。その経緯は次回明らかに！！

カノンノ「と言うこと、今日のお話はここまで。次回もお楽しみに！！」

皆様からのアドバイスや意見、感想を随時募集中です！！

それでは、次回もお楽しみに！！

第5話（前書き）

いつの間にか1万PV突破しました！！こんなに早く超えるなんて思ってもみなかったです。読者の皆さん、これからよろしくお願いいたします。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回は、いつもより長いです。グダグダになっていたら、申し訳ないです。

それでは、どうぞ！！

第5話

さて、なぜセレスティアにいたはずのリッドとキールがミッドチルダに、しかも遙か上空から現れたのか？それは、今から数時間前の事、

【エターニア・セレスティア（水晶霊の山・山麓）】

翌朝、リッドとキールは不可解な地震の原因を調べる為に大晶霊の一人・セルシウスが住む『水晶霊の山』を訪れていたのだが…

「くそ！！一体何なんだよ、あいつ！！」

「それは、僕が聞きたい！！」

「二人共！！今は奴から逃げる事だけを考えなさい！！」

リッドとキール、そして、長く綺麗な青髪に青白い肌の女性・セルシウスの三人は、森の中を全速力で走っていた。どうやら、何者かに追われているようだ。

しかも、激しい戦いがあったのか、三人とも体中傷だらけに加えてかなり疲れているみたいだ。相当な手練れと戦ったのだろう。

「ハアハア…もうここまで来れば…大丈夫だろう…」

リッドは後ろを振り返り、追跡者が追ってきていない事を確認し、三人は足を止める。複雑に入り組む森の茂みをうまく利用しながら、必死になって逃げていたのだから、これでひとまず安心…

「どこへ行くつもり？」

『！！！』

…ではなかった。

リッド達が逃げた先の茂みから、黒髪のポニーテールに左目は眼帯をつけた女性が現れた。どうやら、この女性がリッド達を追っていた追跡者のようだ。

「そっそんなバカな！！！」

「おいおい！一体どうなってるんだよ！？」

キールとリッドは、驚きを隠せないでいる。さっきまで後ろから追ってきたのに、まるで最初からここに来る事を知っていたかのよう逃げた先から現れた。もちろん、この山は先回りできるような構造にはなっていないはずだ。

「くっ、リッド！キール！こっちよ！！！」

セルシウスは逃げて来た道に引き返そうと二人を誘導する。

「逃がさないわ。《爆呪符！！》」

それを見た追跡者は、すかさず懷から数十枚もの札をリッド達に向

けてばらまいた。

『うわあああああ！！！！』

札の連鎖した爆発と爆風で三人を吹き飛ばした。

「どこへ逃げようと無駄よ。さあセルシウス、大人しく捕まりなさい。」

追跡者は、倒れている三人にゆっくり近づいていく。その事に気付いたセルシウスは、体をふらつかせながら立ち上がる。

「二人共、ここは私が時間を稼ぐから早く逃げなさい！！」

このままでは、私のせいで二人がやられてしまう。だったら、奴の狙いである私を囿に二人を逃がせば…

自分を犠牲に二人を守ろうと思ったセルシウスは、追跡者の前に立ちふさがる。

「すでに結果は見えてるにもかかわらず、私と渡り合おうというのか？」

「黙りなさい！！《フリーズランサー！！》」

セルシウスは、両手を体の前に突き出すと、水色の魔法陣が浮かび上がり、そこから多数の水柱を弾丸のごとく撃ち出す。

「…遅いわ！」

「何！？」

追跡者は、飛んできた氷柱をなんなくかわしながら、素早くセルシウスの懐に入り込み、トドメを刺そうとした。

「《魔神剣!!》」

「「!!」」

突然、声とともに地面を這った衝撃波が二人の間を横切る。二人はすぐにかわし、お互いに再び距離をおく。そして、衝撃波が来た方を向くと、そこにはリッドが立っていた。

「悪いだけ、あんたの相手はこの俺だ!!」

そう言うリッドは、剣を追跡者に向ける。だがリッドは、ふらつきながら立っている。明らかに無理をしているようにしか見えない。

「何をしているの、リッド! 早く逃げなさい!!」

「あいつの目的はセルシウスなんだろう? だったら、このままセルシウス一人を置いて逃げるわけにはいかないだろう! それに…俺はもう、これ以上仲間が犠牲になる所は見たくないんだ!!」

誰かが犠牲になって仲間を守る、リッドにとってそれは耐え難い事なのだ。前回の旅で起きた、レイスの時と同じ事は二度とさせない。大切な人を守りたいと…

「邪魔よ…どきなさい! 《爆呪符!!》」

「「!!」」

追跡者は再び懐から十数枚もの札をリッドとセルシウスの頭上にばらまいた。今度は、ただの爆風だけでは済まないほど近距離。反応が遅れた二人がもう駄目かと思ったが…

「《ファイアボール!!》」

どこからともなく複数の火の玉が飛んできて、空中に浮遊する札を爆発する前に燃やした。

火の玉が飛んできた方を見ると、そこにはキールが立っているのだった。

「キール！」

「おいリッド、敵を目の前に行っている時ぐらい集中しろよな!!」

「わりいな。でも、キールのおかげで助かったぜ。」

「僕は当然の事をしたただけだ。それに晶霊研究者として、僕だってこのままセルシウスを見過ごすわけにはいかないんだ。」

「つたく、キールのやつ、素直じゃないな…」

「(二人とも…)」

リッドとキールは、武器を構えて戦闘体制に入る。

「貴方達には用はないの。邪魔しないで！」

追跡者が右手を前に突き出すと同時に、足元に紫色の魔法陣が展開

される。同時にリッドとキールの周りを囲むように紫色の半球体状の檻が出現し、二人を檻の中に閉じこめた。

「なっ何だこれは!？」

当然、二人は一体何が起きたのかとわからなかった。

「リッド! キール! …これは、次元の檻!! まさかその力は!？」

「ふふっ察しがいいわ。流石は『大精霊』ね。」

「貴方、何故それを!？」

「(『大精霊』?)」

セルシウスは、追跡者の言葉を聞いて驚いた。キールも追跡者の聞き慣れない言葉に耳を傾けた。

それと同時に、セルシウスは何かに気がついたかのように話し始めた。

「…そう。だから最近、世界の次元が乱れて晶霊達の動きが慌ただしかったわけね。『大精霊』の彼との連絡が取れなかったから、何かあったのではないかと思っていたのだけれど…貴方、ゼクンドウスに何をしたの？」

「「!」」

リッドとキールは、セルシウスの言うことに驚愕した。

ゼクンドウスは、時を司る高位大晶霊。彼もまたリッド達の前回の旅に協力してくれた大晶霊の一人だが、他の大晶霊とは違い、更に

上位の大晶霊である。

「ちょっと待て、セルシウス。ゼクンドウスがどうかしたのか!？」

「:すまない、キール。私からはこれ以上の事は言えないわ。けど、私が言うゼクンドウスは貴方たちが知っているゼクンドウスとは違う。」

「それって、どういう意味だ？」

セルシウスは、キールの質問に対してあやふやに答える。僕たちの知っているゼクンドウスじゃない？キールはセルシウスの意味深な答えに疑問を感じる。

「お喋りはそこまでにしてもらえないかしら？」

すると、セルシウスとキールの話に割り込んできた。セルシウスも追跡者を睨みつける。

「なら、もう一度だけ聞いわ。ゼクンドウスを倒したのは、貴方ね？」

「:だとしたら？」

「たとえ貴方が人間であろうと、我が同胞、そして仲間を傷つけるなら許さない!!」

普段は人間を大切に想っているセルシウスだが、彼女の言葉一つ一つに怒りが込められていた。同じ大晶霊、そして大切な仲間を傷つける事は、彼女にとって許せない事なのだ。

先程まで逃げて回っていた彼女だったが、今度は追跡者に向かっていった。

「そう…でも、そろそろ終わりましたよ。」

そう言うと、追跡者はセルシウスの目の前から姿を消す。それを見たセルシウスはその場で立ち止まる。

「（消えた！？でも、一体どこに？）」

「…こよ。」

「…！」

気がつくのと、セルシウスの後ろに追跡者が立っていた。

「《生吸符！！》」

「くっ 《飛燕連脚！！》」

とっさに、セルシウスは得意の体術で追跡者に攻撃を仕掛けるが、なんなくかわされてしまった。そして気づくと、彼女の体に何かの札が貼り付けられた。剥がそうとしても剥がれない。

「無駄よ。それは貼り付けた符術士本人でないと剥がれない。」

「貴方、一体何を…なっなんだ？体が…」

「言い忘れていたけど、その札は貼られた者の体力を奪い取るもの。もっとも、立っていられるのがやっとの貴方にとってはつらいでし

ようけど…」

「くっ、この程度で事で…私が…」

だが、今のセルシウスはすでに体力が限界に近かった。そして…

「これでトドメよ。《風塵爆符！！》」

セルシウスの足元から複数の札を巻き上げ、彼女を空中に打ち上げて札の爆発で追撃する。

「うわあああああ！！」

「「セルシウス！！」」

セルシウスはそのまま、地面に体を叩きつけた。そして、地面に倒れ伏せたまま動けないでいる。

「セルシウス。貴方のその力、世界の為、ゼクンドウス同様に有効に使わさせてもらうわ。」

追跡者は懷から赤い石が入ったペンダントのようなケースを取り出す。キールはそのケースを見て…

「（あれは『クレイメルケイジ』？…だとしても、あれは『パラソル』がないと大晶霊は捕まえられないはず。一体何をするつもりだ？）」

『クレイメルケイジ』。この世界に存在する晶霊を保管するためのケースの一種であるが、大晶霊となるとその膨大な力にこのケース

が耐えられない。そこで、その補助器具『パラソル』を使えば、大晶霊でも保管する事は可能なのだが、この追跡者の持つ『クレームルケイジ』のようなケースには、それらしきものが付いていなかった。

そんな事お構いなしに、追跡者はケースを手を持ちながら、倒れ込むセルシウスに近づいていく。

「セルシウス！逃げろ！！」

「もう遅いわ。」

リッドは、セルシウスに逃げるよう叫ぶが、体力の限界を超えた彼女はもう動けない。そして、追跡者はセルシウスの前に立ち、手に持ったケースをセルシウスに向ける。

「うわああああああ！！」

「「セルシウス！！」」

ケース内の赤い石が光り出し、セルシウスは叫び声を出しながら、光に吸い込まれるようにしてケースに閉じこめられた。

「任務…完了。」

「セルシウス！！くそっこんな檻！！」

「無駄よ。その檻は決して破る事は出来ない。それに、そこから出られたとしても結果は同じだったわ。」

「貴様！！」

リッドに対して馬鹿にするような事を言いながら、追跡者はケースを懐にしまう。すると、キールが追跡者に向けて口を開く。

「待ってくれ!!」

「何かしら？」

追跡者は、鋭い眼光でキールを睨みつける。キールは恐る恐る話を続けた。

「あなたはセルシウスやゼクンドウスの事を『大晶霊』ではなく、『大精霊』と言っていた。その『大精霊』を捕まえて、一体何をしようとしているのですか？」

「…貴方達には関係ない事よ。そもそも何故貴方に言う必要があるのかしら？」

「ふざけるな!! 何をしようとしてるか知らねえけど、セルシウスを傷つけた奴は許さねえぞ!!」

リッドは、追跡者の返答に怒りを露わにする。

「どうやら自分たちの立場をまだ理解してないみたいね。」

そう言いながら追跡者は、リッド達の入った檻の前まで近づき、何かを詠唱し始めると、足元に紫色の魔法陣が浮かび上がった。

「この事が見られた以上は、このまま生かしておく訳にはいかない。このゼクンドウスの力で貴方達を次元の狭間に突き落としてあげる

わ。」

「何!？」

「でも、安心しなさい。運が良ければ、ダイランティアの別の世界に辿り着くと思うけど、運が悪ければ、貴方達は一生、狭間をさまよう事になるのだろうけど…」

「そんな事させるか!!」

キールも反撃を仕掛けようと、得意の晶霊術を唱えようとしたが、

「そっそんな、晶霊術が使えない!？」

何故だか晶霊術が発動出来ない。どうやらこの檻の中にいる間は、術が使えないようだ。

「くそっこいつ!!」

「貴方がどう足掻こうとも、止める事はできない。」

リッドも鉄格子の間から手を伸ばし、追跡者を掴もうとするが当然の事ながら、届くわけがない。

すると、今度は檻の中の地面に何かの魔法陣が描かれる。

「何だ、これは？」

「さようなら…もう二度と会うことはないわ。」

追跡者が指を鳴らすと、魔法陣は黒い渦に変わった。そして…

「「うわあああああ！！」」

二人は、黒い渦に勢いよい吸い込まれて消えてしまった。同時に二人を閉じこめていた檻も消えた。

「…ゼロス、いつまでそこに隠れているんだ？」

「ありゃ、ばれていたのか。せっかく御影ちゃんを驚かせようと思ったのに…」

御影の背後の茂みから、ゼロスが現れた。多分、彼もさっきまでの一部始終を見ていたのだろう。

「…それで、私が言った通りに『氷の楔』は破壊したのでしょうか？」

「ああ、頂上にあったあの馬鹿でかい氷の塊か？御影ちゃんの言うとおりにちゃんと粉々にしておいたぜ。」

どうやらゼロスは、御影の命令で『氷の楔』と呼ぶものを破壊していたようだ。

「そう、それならいいんですけど…」

「なあ御影ちゃん、前々から気になってた事があるんだけど。」

「何？私のスリーサイズとか、くだらない質問ならお断りよ。」

「まっさかあ。御影ちゃんの戦い方を見ているとな、俺様の仲間に
しいなって奴がいてな。そいつの戦い方によく似てるなあって思っ
て…」

「…」

すると、御影は急に黙り込んだ。表情には全く変化がみられないも
のの、何か違和感を感じる。

「さあ偶然ではないのか？私の戦い方は、我流で覚えたものだ。」

「そっか？ならいいんだけど…」

ゼロスは、御影の答えを聞いて、自分の気のせいだったのかと思う
が、どこことなく腑に落ちなかった。

「とりあえず、任務は完了した。ひとまず戻るわよ。」

「あいよ。んじゃ、戻るとしますかねえ♪」

そう言って二人は、ゼクンドウスの時空の力を使い、どこかへ去っ
ていった。

その頃、

【ミッドチルダ・首都クラナガン上空】

何も無い澄んだ空に突如黒い渦が発生した。そこからリッドとキールが出てきた。

「うっ眩しいな……って何だ今度は？空に浮いてるのか、俺？」

「何寝ぼけた事言っているんだリツド！僕達は、下に向かって落ちてるんだよ！！」

「落ちてるって……ええええええええええええ!!」

そう、黒い穴を出と思ったら、今度は空の上でただいま落下中だった。

「おいキール！！何とかならないのかよ！？」

「今考えているところだ!!」

そして現在、

「キール、まだなのか!？」

「駄目だ。どう考えても助かる方法が浮かばない。」

「諦めるなよ!このままじゃ俺達…」

その時、地上から桃色と金色、二つの光がリッド達に向かってきたのが見えた。

「何だ、あの光?こっちに向かってくる!!」

最初の二人は、地上からの魔法弾か何かの攻撃と思ったのだろう。どちらにしても助からないと思ったリッドは目をつぶり、死を覚悟するのだったが…

「(あれ?なんか急に体が浮いたぞ?)」

突然、宙に浮かぶような、いや誰かに抱えられたような不思議な感覚を感じたリッドは、ゆっくりと目を開ける。そして信じられない光景が目に見え込んだ。白いローブらしき服を纏い、橙色に近い茶髪にツインテールの女性が自分を抱えて、空に浮かんでいた。

「ねえ君、大丈夫？」

「あっああ、大丈夫だ。それよりもあんたは？」

「私は高町なのは。君は？」

「俺はリッド。リッド・ハーシエル。」

一体何が起きたのか自分でも訳が分からず、混乱していた。だが、すぐに我に帰る。

「そうだ！キールは？キールはどうなったんだ！？」

「もしかして、あの子のこと？」

なのはという女性が向いている方を見ると、白いマントを羽織り、中に黒いジャケットを着た金髪にツインテールの女性がキールを抱え込まれて、空に浮かんでいた。

「大変だよ、なのは！！この子、血を流しているよ。」

「「え！？」」

いつの間に怪我を？よく見ると、黙りこんでいるキールの鼻から血が…

だが、リッドはすぐに分かった。元々キールは、あまり女性との付き合いがないため、特にフェイトのような魅力的な女性に自分が抱っこさせているのだから、のぼせてしまうのは当たり前と言えは当たり前か？

「ハァ。大丈夫だよ。キールは、あんたを見て鼻血が出ただけだから…」

「そうなの？」

「フェイトちゃん、ひとまず二人を地上まで連れて行こう。」

そう言って、二人を抱えながらゆっくり地上へと降下していった。

「すみません。おかげで助かりました。」

「別にええよ。それよりもええのか？ ティッシュなら、まだ余ったとるけど…」

「いいえ！ もう大丈夫です！」

地上に降りると、はやてと先ほど保護したアーチェが待っていた。軽く自己紹介を済ませ、はやてはキールに鼻血を止める為に、持っていたティッシュを渡していた。

「なのは達って、箒もなしに空飛べるんだ。凄い♪」

「そうやで。ちなみに私もなのはちゃん達みたいに空を飛べるんや。」

」

「へえ、そうなんだ。」

箒以外で空を飛ぶ姿を初めて見て、少し興奮気味のアーチェ。いや、実際にはあの時を駆ける者も一応飛んでいたが：

「それで、リッド君達はどうして空の上から落ちてきたの？」

「落ちてきたというか：その、こういう話をしても信じてもらえるか：」

「構わへんよ。もしかしたら、君達の力になってあげられるかもしれないしな。」

「実は：」

キールは、信じてもらえるかはさておき、四人に事情を説明する。セレスティアという世界にいた事。覚えもない謎の人物に追われていた事。その者によってここへ飛ばされてきた事。その話の中にはセルシウスについては一切触れなかった。いや、あえて触れなかった。

「うーん、それってもしかして次元の歪みのことかな？」

「でも、キールの話を聞く限り、その人が意図的に作ったものみたいだけど、そんな事、普通出来るのかな？」

「さあ、どうなんやろうか？」

なのは達がキールの言ったことについて一つ疑問が浮かんた。何ら

かの原因で次元の乱れに巻き込まれたという事故ならまだしも、人為的にしかもたった一人の手によって作り出され、この世界にやって来たなんて事は今まで聞いたことがない。

「そうだ！なのは、ここって一体どこなんだよ？」

するとここで、リッドがなのは達の話に割り込み、質問してきた。

「えっとね。リッド君、驚くかも知れないけど、ここはミッドチルダっていう世界の首都クラナガン。リッド達がいたセレスティアっていう世界とは違う別の世界なの。」

「ミッドチルダ？別の世界？」

なのはから告げられたのは、聞いたこともない、しかもインフェリアでもセレスティアではない世界であるという事。その話を聞いても、リッドはすぐには理解できなかったようだ。

「それってまさか、さっき僕らを引きずり込まれたあの黒い穴で、この世界にたどり着いたってことか？」

「うん、そうだと思う。」

「それじゃあ、僕達はもうセレスティアに……」

もし、それが本当ならもう二度と故郷の世界であるインフェリアには帰れない。そう思うと、キールは愕然とした。

「でも安心して。私達がキール達を責任持って元の世界に送るから。」

「それは本当ですか!？」

「うん。」

『時空管理局』と呼ばれる組織の存在。自分達がそこに務めている事。そして何より次元を渡れる術を持っている事などをフェイトが二人に説明する。

「それじゃあ、僕達は元の世界に帰れるんですね。」

「でも、キール君達の世界が登録されてるか分からないから、帰るのに時間がかかると思うけど…」

「いや、帰れるとわかればそれだけで十分ですよ。」

途方に暮れていたキールだったが、インフェリアに帰れるとわかり、胸を撫で下ろした。これで…

「ちょっと待てよ!! さっきから何わけの分かんない事言ってるよ!？」

突然リッドが怒鳴ったような声を出した。リッドは、まだここが別世界である事を信じられないでいるみたいだ。

「リッド君。突然の事で混乱してるのかもしれないけど、それが事実なの。だから、信じてほしいの。」

なのはは、一旦リッドを落ち着かせようとなだめるのだが、

「冗談じゃない!! 本当にそうだとしても、俺はすぐにでも元の世

界に帰らなきゃならないんだ!!」

すると、リッドは一人どこかへ行こうとする。

「ちょっとリッド君、どこへ行くんや!？」

「俺はあんた達の世話にはならないよ。自分で帰る方法を探すさ。早くしないとセルシウスが…」

今のリッドは、セルシウスの事で頭がいっぱいだ。大切な仲間を一刻もあいつから早く助けないと…そう思うだけでも焦りを抑える事が出来なかった。なにより、彼は他人に干渉を受けるのが嫌いなのだ。

すると、その様子を見てキールは、

「リッド。ちょっとこっちに来い。」

「痛ててて!! 何だよキール、そんなに強く引っ張るなよ!!」

「二人共、どこへ行くの!？」

「大丈夫です。すぐに戻ってきますから。」

そう言うときールは、リッドをなのは達と離れた所に無理やり連れていった。

「何なんだよ、キール。」

「リッド。今お前が焦ったってしょうがないだろ？」

「何でキールはそんなに冷静でいられるんだよ!？」

「お前は、ただ無茶をしようとしているだけじゃないか!!」

「!!」

リッドは、キールが怒鳴る姿を見て驚いた。キールは、ほとんど怒る事がないので、流石に効いたようだ。

「リッド、お前の気持ちはよく分かる。だが考えてみる。僕らは知らない世界に突然来て、右も左も分かんない状態だ。そんなんで、一人で何とかなると思っているのか？」

「そっそれは…」

「それに、今の僕達が元の世界に戻ったとしても、ゼクンドウスやセルシウスすら勝てなかった奴に僕達が勝てるのか？少しは冷静になれよ。」

「…」

「今は、あの人達について行って、これからどうするべきかを考えた方が得策だと僕は思うけど？」

キールの冷静な分析と判断に、リッドも頭が冷める。

「わかったよ。キールの言うとおりにするよ。」

「お帰り、二人とも話はまとまった？」

帰ってきたリッドとキール。そして、リッドの表情に落ち着きがあった。

「ごめんな、なのは。急に怒鳴ったりして…」

「ううん、私は大丈夫だよ。何か事情があるみたいだけど、絶対に二人を元いた世界へ届けるからね。」

「はい、よろしくお願いします。」

「うん。じゃあ、改めてよろしく。リッド君、キール君♪」

こうして、リッドとキールは次元漂流者として保護された。

とその時、突然またもや本局からの緊急通信が入ってきた。今度はフェイトのようだ。

「はい、こちらフェイト・T・ハラOWN執務官…はい…分かりました。すぐに向かいます。」

「どうしたんや、フェイトちゃん？」

「管理局が先日から追っている犯罪組織が、今廃墟ビル地区内の建物に立てこもっていて、私もすぐに現場に向かわなきゃいけないかったの。」

今度は、立てこもり事件の応援要請のようだ。今すぐにも向かわなければならぬので、必然的に三人の次元漂流者の事は、なのとはやてに任せるしかない。

「わかった。三人の事は、私とはやてちゃんがやっておくからね。」

「フェイトちゃんも、気をつけてな。」

「うん、じゃあ行ってくるね。バルディッシュ！」

〈Yes, Sir!〉

そう言ってフェイトは、急いで現場に飛んでいった。

一方、

【ミッドチルダ・廃墟ビル地区】

多くの廃墟ビルが建っている中、とあるビルの一室に一人の青年が倒れていた。

「…うう…あれ?…どこだ、ここ?」

青年は目を覚まし、ゆっくりと体を起こす。

ハネっ毛が目立つ朱色の短髪にへそ出しの白い服を着たこの青年。そう、そこには『聖なる焰の光』の姿が…

第5話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも、作者の紅蓮です。

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪そして作者さん、1万PV達成おめでとうございます!!」

おっ！ありがとう、カノンノ♪

さて、今回の話はどこで区切ればいいか分からなかったから長くなってしまったけど、どうだった？

カノンノ「ここで、まさかあの御影って人が出てくるなんて思ってもみなかったですよ。セルシウスも捕まってしまいましたし…それにリッドさん達が最初に登場したとき、すでにボロボロになっていたけど、一体どんな戦いだったのか、とても気になります。」

そうだね。本当は水の神殿でのやり取りも書きたかったんだけど、流石にグダグダになると思って省きました。でも、これで分かった事は、御影は相当強いってことだな。

カノンノ「あと、ゼロスさんの質問に対するあの人の様子も気になるいます。もしかして…」

さあ…どうなんでしょうかね。そこは読者さんのご想像にお任せします。

さて、最後にちょっと出ていましたが次回、テイルズオブシリーズからあの人が登場します!!

カノンノ「読者の皆さん、次回も楽しみにしててくださいね♪」

皆様からの感想や意見を随時募集中です。それでは、次回もお楽しみに！！

第6話（前編）（前書き）

今回は、ちょっと雑な感じになってしまいました。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

それでは、どうぞ!!

第6話（前編）

【ミッドチルダ・廃墟ビル地区】

なのは達と別れて数分後、フェイトは管理局からの連絡があった現場に到着した。すでに他の局員も到着し、とある廃墟ビルを包囲していた。現場は緊迫した雰囲気漂っている中、長い橙色の髪を下ろした一人の少女がフェイトに駆け寄ってきた。

「フェイトさん!!」

「ティアナ!!」

ティアナ・ランスター。元機動六課FW陣の一人で、現在は執務官を目指してフェイトの第二補佐官を勤めている。

「ティアナも連絡を受けてここに？」

「はい。ついさっき到着したばかりですが、フェイトさんも？」

「うん。本局から緊急の応援要請があつてね。」

「そうだったんですか。でもフェイトさん、せっかくの休暇なのに大丈夫ですか？ここ最近仕事也多忙でしたし…」

ティアナは、連日のように事件の捜査に追われていたフェイトの体

調を心配する。執務官補佐として、常にフェイトの側にいたから、その多忙ぶりを誰よりも知っていた。だからこそ、貴重な休暇で仕事の疲れを癒やしてほしいと思っていたのだろう。

「うん、大丈夫。それにこういう事にはもう慣れているから。心配してくれてありがとう、ティアナ。」

それでもフェイトは、ティアナに心配いらないと言う。

「それで、状況はどうなっているの？」

「今、犯人グループが立てこもっている建物周囲を完全包囲したところ。人数は、確認しているだけでも数十人いると思われます。」

「それで、その立てこもっている犯人グループって…」

「はい。本局から聞いていると思いますが、今度フェイトさんが捜査担当するはずの次元犯罪組織『黒の翼暗殺団』ブラック・アサスメントです。」

『黒の翼暗殺団』ブラック・アサスメント。管理局が全世界で指名手配していた次元犯罪組織。主に暗殺、ロストログアやデバイスなどの違法密輸や密売も扱っている。

その組織は、先日管理局によって摘発され、組織の壊滅までに至ったが、肝心の組織のリーダー及び一部の手下達がまだ捕まっておらず、その捜査を明日フェイトに引き継がれるはずだった。だが、こんなにも事件が早く起きるとは誰も想像はしていなかった。

「それで、他に何か情報はある？」

「今のところは特に…」

「そう。なら彼らが何か事を引き起こす前に、こちらも迅速に対応しないと…」

フェイトは、これからの対策について考えてようとした。すると、一人の男性局員が慌てた様子でフェイトの元に駆け寄ってきた。

「ハラオウン執務官！！休暇中にもかかわらず、ご苦勞様です！！」

「ご苦勞様です。それで私に何か？」

「はい。実は、現在立てこもっている犯人グループが一般人の子供を人質に捕っている事が新たに分かりました。」

「え！？」

「ちょっと待って下さい！人質ってどういう事ですか？」

男性局員から出た言葉に驚くティアナとフェイト。

「ここ近辺を巡回していた局員から連絡がありました。今、あちらでその子供の母親から詳しく事情を聞いてきたところです。」

フェイトとティアナは、男性局員が向いている方を見ると、一人の女性が泣き崩れたようにして座り込んでいた。その側で女性局員が慰めている。

男性局員の話によると、街中をパトロールしていた局員が指名手配されていた『ブラック・アサスメント黒の翼暗殺団』の顔写真と一致する数人に出くわし、向こうも管理局の人間だと気付くとすぐに逃走したため、追ったそ

うだ。その途中、通りかかった親子とぶつかった手下の一人が倒れ込んだ子供を人質にとり、そのまま逃走したのだ。

「そんな…」

「…」

事態は一変し、迅速かつ慎重に行動しなければ取り返しのない事になるとフェイトは考えた。
すると、ティアナは声を荒げ気味に発した。

「ひどい！関係のない子供を人質にするなんて…」

「ティアナ：今は感情に流されちゃ駄目だよ。」

「！…すっすみません。あたし…」

ティアナは黙り込んだ。この緊迫した現場の中で感情的になつては現場での冷静な判断ができず、それが大きな事故にすらなりかねない。

「私もティアナと同じ気持ちだよ。でも今は耐えなきゃ駄目。人質の子を早く助けるためにも、私たちが冷静にしっかり対応しないからね。」

「フェイトさん…はい！！」

フェイトの言葉でティアナは気持ちを立て直し、人質の救出作戦を考え始める。

その頃、建物のとある階の一室、

『聖なる焰の光』、ルーク・フォン・ファブレ、いや正確にはそのレプリカである彼は、起きたばかりのせいか、寝ぼけながら状況を整理していた。

「確か俺：エルドランドで師匠せんせいと戦って……それから、ローレライを解放して……」

レプリカのための世界にし、預言消滅を企てたルークの師匠のヴァン・グランツとの決戦。そして、地核に捕らわれたローレライを解放した。だがあの時、俺は消滅するはずだったのに、なんで生きてるんだ？

そう考えていると、ルークは周りを見回してある事に気づく。

「そう言えばアッシュは！？それにローレライの鍵は！？」

ビッグバン現象によってルークはアッシュ、すなわちオリジナルに取り込まれたはずだった。しかし、今の自分の姿は全く変わりがなかった。もしルークとアッシュが融合してなかったとすれば、アッシュの遺体がすぐ側にあるわけだが、この部屋のどこを見渡しても見当たらない。さらに、ローレライ解放時に使った『ローレラ

イの鍵』も見当たらず、何故か腰に納めているのは以前使っていた
譜術戦争時代の六王国の遺産『フォニックソード』だ。

一体何がどうなっているのか分からなくなってきたルーク。

「うーん。考えていても仕方がないか…とりあえず、ここがどこ
なのか一旦出てみつか。」

ひとまずルークは、ここがどこなのか調べるために外への出口を探
そうとしていると、

「『黒の翼暗殺団』^{ブラック・アサスメント}!!!この建物は我々管理局が完全に包囲した！
！人質を解放し、大人しく投降せよ!!!」

「なっ何だ!?!」

突然、窓の外から大きな声が聞こえ、ルークは驚いた。何事かとル
ークは思い、部屋の窓からそっとのぞいてみると、下の方に大勢の
人が武器らしきものを持ち、外に待ち構えていた。

「（おいおいおい、一体どうなってるんだよ!?!てか、なんかヤバ
くねえか、これ!?!）」

人質?投降しろ?俺は何もやってねえぞ!?!と何がどうなっている
のかわからず困惑していると、部屋の出口らしき扉を見つける。し
かし扉が瓦礫に埋もれ、しかも変形していたため、なかなか開かな
かった。

他に出口はないかと辺りを見渡していると、部屋の隅に下へと続く
非常階段らしきものを見つける。薄暗く、瓦礫が散乱しているがこ
こからなら、下に確実に行ける。

「よし！ここから降りていけば外へ出れそうだな。…ん？なんだ？下の階から声がする。」

ルークは、耳を澄ませてみると確かに人の声がする。

「とにかく、行ってみるか。」

ルークは、薄暗い階段を音をたてないように瓦礫を分けながらゆっくりと降りていった。

その下の階では、

「ふん！全く忌々しい管理局の犬どもめ！！」

「^{ボス}首領、奴らの言うように周りを完全に囲まれてますぜ。」

「それがどうした？こっちには、切り札ってのがあるんだ。奴らもそう簡単には手を出して来るまい。」

白髪に左手には義手を付け、隻眼のある古典的な海賊のような格好をした大男が数名の手下達と話していた。

一方、その部屋の扉の前には、フェイトが待機していた。

「（ティアナ、そっちはどう？）」

「（今、部屋の前に着きました。いつでもいけます。）」

フェイトは正面、ティアナは裏口と別ルートから建物に入り、お互いに念話で連絡を取り合いながら、人質がいる部屋の別々の出入り口前までやって来た。途中、組織の手下と何回か遭遇するが、ことなく倒して捕まえていった。

「（そしたら、私の合図でいくよ。）」

二人の作戦はこうだ。ティアナの幻術魔法を利用し、敵を攪乱させている間に人質を保護、『黒の翼暗殺団』ブラック・アサスメントを捕まえるというものだ。そして、フェイトが合図を掛けようとした時、

「おりやああああ！！」

「！！」

背後から近づいてくる一人の手下に気が付かず、フェイトに襲いか

かって来た。が…

「はああああ!!」

「何! うわあああ!!」

間一髪で攻撃を免れて、フェイトは反撃を仕掛けて吹き飛ばす。だが、最悪な事に人質がいる部屋に向けて吹き飛ばしてしまった。

「(しまった!!)」

時すでに遅し。吹き飛ばされた手下は扉を思いっ切りぶち破り、部屋へと入っていった。

「なっ何事だ!？」

中にいた隻眼の大男とその手下は、吹き飛んできた手下を見た後、フェイトの方を見る。

「何だ、てめえは!？」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です。『黒の翼暗殺団』ブラック・アサスメントリーダー・バルホスとその一味。あなた達には、殺人及び違法密売など十数件もの罪状があります。武装を解除し、投降しなさい!」

「(フェイトさん!)」

「(ごめん、ティアナ。私が彼らの気を引きつけるから、隙を見てあなたは幻術魔法で…)」

思わぬ失敗をするものの、念話ですぐに体制を整え直そうとしたが、

「思ったよりも来やがったな。だが、残念だったな。これ以上ワシの邪魔はさせんぞ!!」

すると、バルホスの後ろから一人の手下が女の子の首にナイフを突きつけてながら出てくる。女の子は鳴きながら、弱々しい声で助けを求める。

「…ママ、たすけて…」

「やめて! その子は関係ないでしょ!!」

「計画の為に手段は選ばない。これが『黒の翼暗殺団』ブラック・アサスメントのやり方なのさ。それとさっきからそこに隠れてる奴、出てきやがれ!!」

「!!」

バルホスは、もう一つの出入り口に向かって言う。すると、ゆっくり扉を開けて入ってきたのはティアナだった。

「何でわかったの?」

「ワシの長年の勘よ。こんな危険な状況でいくらなんでも単身一人で行動するって方がおかしいからよお。」

バルホスに動きが読まれ、迂闊に手が出せなくなってしまった。

「まあいいさ。こっちも交渉しに行く手間が省けたからな。」

「交渉？」

「そうだ。このガキを解放する代わりに、今まで逮捕したワシのしもべ共を解放しな！」

バルホスの要求は、今まで摘発して捕まった手下達の解放だ。もちろんそんな要求に対しティアナは、

「そんな事できるわけないでしょ!!」

「ほお？なら、このガキの命がどうなってもいいっていうのか？」

「くっ!!」

要求に従わなければ、あの子の命がない。だが、悪党に屈する事は絶対あってはならない。

「さあ、どうするんだ？執務官さんよ？」

「…私は…」

その時だった。

「《魔神拳!!》」

「ぐわあ！」

「がはあ！」

『!!!!』

突然、地を這った衝撃波が人質の側にいた二人を吹き飛ばした。

「なっ何だ!？」

「(フェイトさん、今のって…)」

「(私にもわからない。)」

全員が衝撃波が来た方を見る。そこには、ハネっ毛の明るい朱色の短髪にへそ出しの白い服を着た青年が、人質の女の子を抱きかかえて立っていた。

「君、大丈夫か？」

「ぐすっ…うん、たすけてくれて…ありがと、おにいちゃん。」

女の子は震えながらお礼を言うと、青年は落ち着かせようと慰める。

「よしよし、もう大丈夫だからな。とりあえずここは危ないから、そこに隠れてな。」

女の子は頷き、青年は女の子を下ろして瓦礫の陰に隠れさせた。そして、青年は表情を変え、バルホスの方を向く。

「おいあんた、関係のない子供を人質に捕るなんて卑怯じゃねえか!!」

「何だ小僧!?! 一体何者だ?」

「ルーク・フォン・ファブレ。今からあんたがぶっ飛ばされる奴の名前だ!!」

「（ルーク…）」

「どこから入ってきたかは知らねえが、ワシに刃向かったことを後悔しな、小僧!! やっちまえ!!」

バルホスは残っていた二人の手下をルークに向かわせた。

「待って!!」

「待ちなさい!!」

フェイトとティアナが止めに入ろうとするが、

「小娘共はワシが相手だ!!」

「（くっ…）」

「（早く助けないとあの人が…）」

二人はバルホスに行く手を阻まれた。早くしないと、あの一般人が…

「《牙連崩襲顎!!》」

「「ぐわあああ!!」」

『!!!!』

突然の声に三人が振り向くと、ルークと言う青年に向かっていった手下二人が倒れていた。どうやら、彼が倒したようだ。だが、この青年から魔力を感じられない。つまり、魔法が使えないにも関わらず、デバイスを持つ手下二人をなぎ倒したのだから、三人が驚くのも無理はない。

「案外、大した事ないな。」

「くっ、おのれ！」

「形勢逆転ね。」

「もう諦めなさい、バルホス。」

「ふん！所詮、最後に頼れるのは己の力のみだったか。」

すると、バルホスは大剣型のデバイスを取り出し、大きく振り回す。三人は攻撃を回避すると、バルホスから距離を置く。

「お前達、武器をとれ！！ワシが直々に相手してやるわい！！」

「おもしれえ、やってやろうじゃないか！！」

すると、ルークは再び腰から剣を抜き取り、構える。

「ちょっとアンタ、待ちなさい！！ここはあたし達が戦うから、アンタはその子連れて早く逃げなさい！」

「冗談じゃねえ！！あんな卑怯な奴をぶっ飛ばさなきゃ俺の気が済まねえよ！！」

ティアナはルークに逃げるように言うが、反対に人質に捕ったバルホスをぶっ飛ばすと言って断る。

てかこんな時に喧嘩している場合じゃないでしょ。

「ふっ、ワシをぶっ飛ばすだど？面白い事を言うな、小僧！！」

「ティアナ、ルーク、来るよ！！」

フェイトがそう言うのと、バルディツシュを構え、ティアナもクロスミラージュを構える。

「もう…援護するから無茶だけはしないでよね！」

「ああ、わかった。」

「『豪炎のバルホス』と呼ばれたワシの力と、ワシの作り上げた『ブラック・アサメント黒の翼暗殺団』の力、とくと味わうがいい！！」

こうして、ルークも戦闘に加わり三人でバルホスに立ち向かう事となった。

第6話（前編）（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

大輝^{ソロモス}星竜「《我が心、泰然自若なり…至大至高の拳を受けよ！奥義すなわち、天衣無縫なり！！》」

アスベル「守れなかった。」

《GAME OVER》

まったく負けた。くそ、なんで倒せられないんだよ！！

カノンノ「ちょっと、作者さん！！もう本番始まってますよ。」

え！？あつやべえ！！えっと、皆さんどうも。作者の紅蓮です。

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪それで、作者さんは何をしてたんですか？」

ん？暇つぶしTOGやった。オーゾンケイジの裏ボスがなかなか倒せなくて、現在三連敗中です。

カノンノ「作者さん、ちゃんと仕事してくださいよ。」

いや、だって暑いじゃないか。夏だし、やる気が…こりゃあ、夏バ

テだな。

カノンノ「確かにそうですね。こういう時は涼しい所でこのコーナ―をやりたいですね。」

うん、同感。まあそんな事はさておき、今回からティアナが初登場し、フェイトとティアナがルークと出会うところまでの話だったけど、どうだった？

カノンノ「フェイトさん達がピンチだったところにルークが現れたところがカッコ良かったです♪」

なるほど。ところでカノンノ、今回登場したバルホスって敵だけど、何か引つかからなかった？

カノンノ「もちろんですよ。TOVに登場するギルド『紅の絆傭兵^{ブラッドアライ}団^{アレス}』の首領・剛嵐のバルボスをイメージしたんですよ？」

おっ大正解！！本作で流石に全員は出せないから、その似たキャラを出せばいいかなって思ってたわけ。

カノンノ「そうだったんですね。ちなみに、他にもそういったキャラも今後出てくるんですか？」

さあ？思いつきで始めたことだから、わからんよ。

カノンノ「作者さんって、本当に適当なんですね。」

さて、次回はオリジナル敵キャラのバルホス戦です。戦闘描写がうまく描けるか心配ですが、頑張ります。

カノンノ「読者の皆さん。次回もお楽しみに♪」

感想や意見は、随時募集中です。それでは、また!!

第6話（後編）（前書き）

少し遅くなりました。申し訳ありません。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回はイベント戦です。戦闘描写がうまく描けているか分かりませんが、よろしく願います。

それでは、どうぞ!!

第6話（後編）

フェイト、ティアナ、そして突然現れたルークの三人は、次元犯罪組織の首領^{ボス}バルホスと戦うことに：

【ミッドチルダ・廃墟ビル地区】

「しもべ共！！」

バルホスが大きな声を上げると、部屋の出入り口から建物内に残っていた手下達が集まってきた。

「加減するな！行け、しもべ共！！」

『へい！！！！』

「（人数的にこっちが不利だけど、これぐらいなら私とティアナでなんとか…）」

バルホスを含め計七人と不利になったが、歴戦の実力を持つフェイトとティアナであれば、それほど問題ではない。

問題はルークの方だ。バルホスの手下を倒したといえ、仮にも一般人。しかも、相手は凶悪な犯罪組織だ。フェイトは、ルークをこの

戦いに巻き込みたくない。ある程度に敵を倒したらすぐに逃げても
らおうと思っている。

「そりゃいい。こっちも加減せずに済むからな！」

そんな事お構いなしにルークは一人でバルホスの所へ走っていった。

「『黒の翼暗殺団』をナメんなやよ!!」
ブラック・アサスメント

すると、サーベルを持った手下の一人がルークに斬りかかってきた
が、ルークはすかさずフォニックソードで防ぎ、互いに剣を交える。
だが、それもすぐに終わった。

「は!は!でりゃ!《双牙斬!》」

「何!ぐはあああ!!」

ルークは、袈裟斬りからジャンプして斬り上げ、相手を飛ばした。

「これでも食らいな!!」

「!!」

その直後、別の手下がルークに向けて魔法弾を撃ってきた。ルーク
はすぐに反応するが、着地直後で体が反応しきれなかった。このま
ま、あの魔法弾に当たるしかないのか?

「《クロスファイア・シュート!!》」

「!!」

「うわああああ!!」

すると、別の方向から複数の魔法弾がルークに向けられた魔法弾を相殺し、さらに残った魔法弾が手下に命中し、吹き飛ばした。ルークはその場で振り向くと、クロスミラージュを構えたティアナの姿があった。

「まったく、自分勝手に動かないでよね! 援護するこっちの身にもなりなさいよ!」

「今のは、あんたが? …わりい、助かった。」

ティアナは、後先考えないルークの行動に注意する。もちろんそれは一般人である彼を怪我させるわけにはいかないからだ。その為にもよく考えてから行動してもらわなきゃいけないのだが…

「くたばりな! 小僧!!」

「「!!」」

ルークがよそ見していると、バルホスはルークに向かって大剣を振り下ろしてきた。それに気がついたルークはすぐに避けた。

「あつぶねえ…」

「ちょっとアンタ、大丈夫?」

「ああ、なんとかな。」

バルホスの一振りで床に深く跡が…今一瞬でも反応が遅れていたら、怪我だけでは済まなかっただろう。

「いい反応だ。それに剣技もなかなかだ。ワシの腕も疼くねえ…うちの組織にも欲しいところだ。」

「そりゃどうも。」

「だが、その無鉄砲な行動はいけねえな。組織の調和を乱しやがる。惜しいなあ…。」

そう言うと、バルホスは再び大剣を構え、二人にプレッシャーを与える。

「（この人、ちょっと厄介ね。どうすれば…）」

この時、ティアナは察した。バルホスと一対一で戦って勝てるかどうかを。フェイトは今バルホスの手下達を相手にしている。ましてや、一般人の彼を戦わせるわけには…

「さあかかってきやがれ、ガキ共…！」

「いいぜ。あんたの相手は俺一人で十分だ…！」

「…！」

ここで突然、ルークはバルホスを一人で相手するというとんでもない事を言い出した。

「アンタ、何言っているのよ…！相手は凶悪犯罪組織のリーダーな

のよ。一般人のアンタでどうにかできる問題じゃ…」

「凶悪ねえ…それだったら、嫌というほど相手にしてきたよ。これぐらい大したことないぜ。」

「ふん、さっきから聞いてりゃ生意気な事ばかり口にしゃがって。ワシに刃向かった事を後悔しやがれ!! 小僧!!」

「だったらそのセリフ、そっくりそのまま返してやるよ!!」

そう言うと、ルークはバルホスに立ち向かっていった。

「ちょっと! 勝手に…」

「首領^{ボス}の邪魔はさせねえぞ!!」

ティアナは勝手に動くルークを止めに入ろうとするが、先程ルークが飛ばした手下に行く手を阻まれる。

「(くっ! こんな時に…早くしないとアイツが…)」

だが、このあとフェイトもティアナも予想だになかった結末になる事をまだ知らない。

立ち向かっていったルークは、今バルホスと剣を交えている。力強く振るうバルホスの大剣をルークはフォニックスソードを両手で持ち、耐えていた。

「ふん、生意気な口を叩いた割にやるじゃねえか！」

「あんたも、図体デカイ割によく動くよな！」

「そうやって余裕でいられるのも今のうちだ！それでも食らいな！」

すると、バルホスは体を大きく回転させる。そのまま回転斬りでルークに襲いかかってきた。

「ぐっ！！」

ルークはフォニックスソードで防御するも、あまりの回転の勢いで弾かれる。このままでは危ないと思ったルークは、後ろにバックステップを踏む。

「だったら、これでどうだ！！」

その場でジャンプして、

「《崩襲脚！！》」

回転するバルホスの中心にめがけて一気に急降下をし、足蹴りを放つ。

「ぐはああああ!!」

ルークの蹴りは、見事にバルホスの命中すると、回転を止めてその場で膝をついた。

「くっこのワシが、こんな小僧ごときに膝をつくなぞ…」

「どうした? もう終わりか?」

「ふっ、ただの小僧だと思って油断しとっただけだ。もう容赦はせんぞ! 覚悟しやがれ!!」

再びバルホスは立ち上がり、ルークと剣を交える。

一方、

「《プラズマランサー!!》」

『ぎゃあああああ!!!!』

「《クロスファイア・シュート!!》」

「「ぐはああ!!」」

フェイトとティアナの二人は、ちょうどバルホスの手下を全員倒したところのようだ。

「フェイトさん、大丈夫ですか!？」

「うん、なんとか…それより彼は?」

「そうだ! アイツを早く…」

そう思い、ティアナは振りかえると急に動きが止まった。

「どうしたの、ティアナ?」

「フェイトさん、あれ…」

フェイトはティアナの向いている方を見ると、そこに信じられないような光景を目の当たりにする。なんと、ルークはバルホスと渡り合っていたのだ。しかもよく見ると、若干ルークの方がバルホスを押していた。

「あの犯罪組織のリーダーと渡り合っているなんて…」

「アイツ、一体何者なの?」

ルークの実力を目の当たりにした二人は、ただ驚くしかなかった。
神託の盾騎士団に六神将、そして師匠との最終決戦。数々の強者達との戦いをくぐり抜けた彼だからこそ、今の实力があるのだ。

「今こそ、ワシの力を見せてくれるわ!!」

そう言うと、バルホスは自分の持つ大剣に魔力を注ぎ込むと、大剣が炎に包まれる。

「でりゃああああ!!」

「うわあ!!」

バルホスは大剣を振り下ろすと、一直線に火柱を上げながらルークに襲いかかるが、間一髪でよけた。

「どうだ?これぞ『豪炎のバルホス』と呼ばれたワシの力だ!」

続けてバルホスは、炎に包まれた大剣をルークに向けて振りかざす。ルークも反撃しようとするが、あまりの炎の熱さに近寄れず、ただ避けるしかなかった。

「どうした小僧?もう終わりか!?」

「へっ!まだまだこれからだぜ!!……(けど、これはマジでヤバいな。くそっ!音素フオニムさえあれば……)」

彼のいた世界・オールドランドには音素と呼ばれる物質が存在し、譜術などに用いるのに不可欠なもの。ルークも音素を用いて様々な属性の技を使えるのだが、ここで目覚めてから音素が全く感じられない。それはそうだ。だってここはオールドランドでないのだから存在するはずがない。

「お遊びはそこまでだ。ワシの炎で灰となりやがれ、小僧!!」

バルホスは、炎に包まれながら再び回転斬りでルークに襲いかかってきた。今度は、さっきのようなただの蹴りでは逆に返り討ちに合うだけだ。

「（くっどうしたら…ん？何だ？）」

絶体絶命のルーク。と、ここでルークはある事に気づく。さきほどバルホスが仕掛けてきた火柱の火の粉が浮遊している。しかもどことなく自分の知る音素の力に似ていた。

「（もしかして……一か八かやってみるか。）」

ルークは何かをひらめいたようだ。だが、その時すでにバルホスはすぐそこまで迫っていた。

「危ない!!」

流石にもう駄目だと判断したフェイトは、急いでルークを助けに行こうとした、その時だった。突然ルークの体が光り出し、そして…

「《吹き飛びな！紅蓮襲撃!!》」

「何だと!!ぐわあああああ!!」

「「!!」」

ジャンプした後、今度は炎を纏ったキックでそのまま急降下し、さらに着地時に炎を巻き上げてバルホスを吹き飛ばした。

「やっぱりな…音素とは違うけど、使える。」

なんとルークは、バルホスの攻撃で空中に漂う火の粉、つまり微量の魔力を音素と同じように自分の中に取り込み、炎属性攻撃へと変化させたのだ。

「ばっ馬鹿、ワシの炎が破られただと…」

すると、倒れていたバルホスはゆっくりと立ち上がる。あの攻撃を受けてまだ立っているとは、なんとタフな奴だ。

「まだ立っていてられるのかよ。いい加減あきらめな。」

「どこまでも忌々しいガキめ。まだ勝負についてはおらんぞ!!」

「いいえ。もう勝負はついています。」

「何!!」

突然バルホスの体の周りに黄色のリングが掛かり、身動きが取れなくなった。そう、フェイトがバインドを掛けたのだ。

「おのれ!こんなもの!!」

往生際の悪い事に、バルホスは強引に掛けられたバインドを外そうとがく。

「ルーク、もう一度力を貸してくれる?」

「ああ、いいぜ!!」

フェイトとルークは互いの武器を構える。そして…

「（こんな小僧なんかには負けるなぞ…あり得ん、あり得んぞ!!）」

「《サンダースマッシャー!!》」

「《受けろ雷撃! 襲爪雷斬!!》」

「ぐわあああああ!!」

二人で最後の一撃を与え、バルホスにトドメを刺した。

それからの事、

「娘を助けていただき、本当にありがとうございます! 何とお礼を言ったらいいのか…」

「礼なんて…俺はただ、助けなきゃって思っただけだから。」

ルークは、人質に捕られてた子供の母親から感謝の言葉をもらって

いた。解放されてすぐ、子供がルークに助けられたのを聞き、直接お礼を言いたいという事で会っている。

「おにちゃん、たすけてくれてありがとう!!」

「どういたしまして。今度からは気をつけるんだぞ。」

「うん♪」

それからすぐ、親子は局員に連れられてどこかと去っていった。と、そこへフェイトとティアナがルークの元へやって来た。

「逮捕のご協力、ありがとうございます。ルークのおかげで、犯罪組織を完全壊滅できたよ。」

「お礼なんていいよ、俺はただ関係もない子供を人質に捕るあいつが許せなかったただけだから…それに敬語で話さなくていいよ。」

「そんなに謙遜しなくてもいいよ。本当にルークには感謝しているんだから。」

「そっそうか?／／／」

フェイトに褒められてルークは少し照れていた。今まで褒められることが少なかったので、あまり慣れていないのだろう。

「だからってアンタ、いくら何でも無鉄砲すぎなのよ。見ていたこっちの方がハラハラしたわよ。」

逆に、今度はティアナがルークを叱り始めた。いくら強いからとい

って何も考えずに敵に突っ込むのは危ない。実際にルークが危なかったところが何回もあった。

「ごつごめん。何か夢中になっていたからさあ。」

「まあいいわ。アンタのおかげで何事もなかったし、今度からはあんな無茶な事するんじゃないわよ。」

「はっはい…」

女の子に怒られるとは、ルークも災難だ。

「そう言えば、あんた達の名前、まだ聞いてなかったな。」

「そうだったね。私はフェイト・T・ハラオウン。執務官をしているの。」

「あたしは、ティアナ・ランスター。フェイトさんの補佐官よ。」

「フェイトにティアナだな。俺はルーク・フォン・ファブレ、よろしくな。」

「ところで、ルークは何であんな所にいたの？」

「それが俺もよくわからないんだ。目が覚めたらあそこにいて…そう言えば、ここはどこなんだ？」

ここで、ルークは一番に聞きたかった事をフェイトに聞こうとする。その時、

「ルーク？ルークなのか！？」

『？？？』

突然、ルークの後ろから彼の名を叫ばれた。三人は声がした方を向くと、短い金髪に爽やかそうな感じの青年が立っていた。その青年の姿を見た瞬間、ルークは驚いた。そして、ある名を口に出す。

「ガイ！！」

そう、かつてファブレ家の召使いであり、ルークとともに旅をした大切な仲間の一人、ガイ・セシルだ。

「ルーク…本当にお前なんだよな？」

「ああ、そうだぜ…ガイ、心配かけてごめんな。」

「何言ってるんだよ。俺はお前が生きて帰って来るって信じていたぜ。」

「ガイ…」

必ず生きて帰ってくる。それはエルドランドでルークと仲間達が交わした約束。ガイはルークが生きて帰ってくる事を信じていた。

「それに、ここにお前が帰ってくる事を一番願ってた奴がいるしな。」

「え？」

そう言うと、ガイが後ろを振り向き、ルークもつられてガイの見える方角を見る。そこには、黒を基調とした服に長い栗色に近い茶髪に前髪で左目を覆った一人の女性が立っている。

「…ルーク？」

「ティア！！」

それは、かつてルークと何度も衝突しあうも、互いに様々な困難を乗り越え、共に実の兄である師匠を倒した大切な仲間の一人、ティア・グランツだ

「ルーク！！」

「ティア？…！！／／／」

ティアはルークの下へと駆け出し、突然抱きついたのだ。

「ちよっティア！！／／／」

「良かった…生きててくれて…もう二度と会えないんじゃないかって。」

ティアの目からは涙が流れていた。彼女はルークの事を誰よりも心配していたのだ。

必ず生きて帰ってきたら、今度はレプリカとしてではなく、自身の人生を歩んでもらいたいと、ルークがいなくなってから彼女はずっとそう思っていた。

「ティア：わりい、心配させて：ただいま。」

「お帰りなさい、ルーク。」

ルークもティアに抱きかえそうとするのだが：

「あのお取り込み中すみませんが：」

「ん？何だ：うわああああ！！こつ来ないでくれええ！」

「え！？」

二人の事を側で見ていたガイにティアナが近寄って話しかけると、突然ガイが変な声を上げながら勢いよく飛び退いた。ティアナは、一体何が起きたのか理解できなかった。ルーク達も突然の事に驚く。

「すつすまない。突然驚かせて：」

「いっいえ。こちらこそ、後ろから急に声をかけて驚かせてしまつて：」

だが、いくら驚いたからといってそこまでリアクションしなくてもよいのだが、ガイにはある欠点がある。

「ガイ：お前まだ治ってなかったのかよ。女性恐怖症。」

ガイは過去のトラウマのせいで極度の女性恐怖症であるのだ。女性自体は好きなのだが、近寄ってくる女性がいると恐怖が先立って体が反応してしまう。

「しつ仕方がないだろ！俺だって治そうと努力しているんだからさ！…それでお二人さん。いつまでそうしてるつもりだ？」

「「…！！／／／」」

さつきから距離が近いルークとティア。突然の再会でそれまで心の中で想っていた感情が一気に爆発して冷静さを失っていたが、ガイに言われた一言で二人は我に返り、顔を赤らめて慌てて離れる。

「まあいつか。それで、あんた達は？」

「申し遅れました。あたしはティアナ・ランスター。」

「フェイト・T・ハラオウンです。それで、あなた達は？」

「ああ、申し遅れてすまない。俺はガイ・セシル、よろしくな。」

「私はティア・グランツ、よろしく。ところでここは一体どこなの？私の知っている限り、ここまで大きな街は見たことないのだけだ…」

「そうだ！俺もその事が聞きたかったんだ。ここってどこなんだ？」

「え？ここはミッドチルダの首都クラナガンという街ですが…」

「ミッドチルダ？クラナガン？」

「聞いたことないな。いや、そもそもここは『惑星オールドラント』じゃないのか？」

「『オールドラント』?」

互いに初めて聞く言葉に首を傾げる。その会話を聞いていたフェイトは、頭の中である事がよぎる。まさかとは思うが…

「もしかしたらあなた達、『次元漂流者』なのかもしれないね。」

「『次元漂流者』?」

「そう。とりあえず、ルーク、ティアさん、ガイさん。私の話をよく聞いてください。」

フェイトは、この世界についての説明をし始める。しかし今日はなんと不思議な一日なのだろう。街中で魔女が現れ、空から人が降ってきて、さらにはたった一人の一般人によって犯罪組織を壊滅された。それも全員が別世界から来た人達だと言うことには驚きだ。

「そんな…」

「おいおい。そんな事ってあるのか?」

フェイトがこの世界についての説明を聞いて、三人ともここが惑星オールドラントでない事に愕然とした。だが、確かに周りの風景を見る限り、自分達が知っている譜業や音機関とは明らかに使われている技術が違うのが一目でわかる。そう言われると信じざるを得ない。

「だとしたら、俺達はもう元の世界に帰れないのか?」

「それなら大丈夫。私たち管理局はあなた達のような人を元の世界

に送る仕事もしているの。」

「管理局？なんだ、それは？」

ガイが管理局という言葉についてフェイトに質問して説明する。

「へえ、そんな機関があるのか。」

「私達の世界では、考えられないわね。」

フェイトの時空管理局の説明を聞き、ルークとティアは少し興味を持った様子だ。

「じゃあ、その時空管理局ってところに行けば、オールドラントに帰る事ができるんだな。」

「うん、だからあなた達を責任持って元の世界に送り届けます。その前にあなた達の世界が登録されているか確認する必要があるから、一度本局に来てもらえるかな？」

「ああ、もちろんだ。」

「ええ。それに、この世界に詳しい人がいてくれると、こちらも安心ね。」

「俺も異論ないぜ。」

三人は、元の世界に帰るためにフェイトと共に管理局に行く事を同意する。

「ではフェイトさん。後の処理はあたしの方でしておきます。」

「ありがとう、ティアナ。後はお願ひね。」

「はい、それでは失礼します。」

そう言って、ティアナは事件の処理を済ませるため、その場をあとにする。

「それじゃあ、ルーク、ガイさん、ティアさん。元の世界に帰るまでの間、よろしくね。」

「ああ、よろしくな。それに、俺の事は呼び捨てで呼んでもいいぜ。」

「ええ、よろしく。私も呼び捨てで構わないわ。」

「よろしくな、フェイト。」

こうして、フェイトは三人の次元漂流者を連れて、本局へと向かったのだった。

第6話（後編）（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも、作者の紅蓮です。

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

さて、今回はそっくり敵キャラの次元犯罪組織の首領であるバルホス戦と新たにティアとガイが漂流したという話だけど、どうだった？

カノンノ「とても面白かったと思いますよ。特に、ルークがピンチだった時の切り抜ける所とかが意外で良かったです。」

ありがとう、カノンノ♪正直に言うと、戦闘描写がうまく描けているのかどうか不安だったんだ。ちょっと今回はルーク寄りの戦闘になったけど、今度はバランスがとれた戦闘になるようにしたいな。

カノンノ「それと後半部分ですけど、ここでガイさんにティアさんが出てくるとは思いませんでした。ルークさんとティアさんの再会場面で私、涙が出てきそうでした。」

そうだな。ティアとガイの登場するタイミングとしては、これが一番良かったかなって思った。あんまり一気に登場しても面白くないからさ。

そして、女性恐怖症が治ってないガイは、今後どうなるのかな？俺としてはそれを書くのが楽しみな♪

カノンノ「女性率高いシリーズとのクロスですから、これから大変

そうですね。ガイさん！頑張ってください！！」

さて、そろそろ時間がやって参ります。ここでカノンノ、君へ一つお祝いが…

カノンノ「え？何ですか？」

まだ早いかもしれないけど、待ちに待った『テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 (TOW RM3)』の製作決定おめでとう！！

カノンノ「え！あっありがとうございます。でも、あれのヒロインって私じゃないはずですけど…」

そんな事は気にしない♪気にしない♪

カノンノ「普通、気にするところだと思うんですけど…」

では皆さん、次回もお楽しみに！！

カノンノ「え！？えっと、皆様からの感想や意見を随時募集中ですので、よろしくお願いしますね。それでは！！」

【テイルズオブ後書きコーナー】特別編（前書き）

タイトルに書いてあるとおり、今回は特別編です。気軽に楽しみください。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

それでは、どうぞ！！

【テイルズオブ後書きコーナー】特別編

さあ、始まりました！【テイルズオブ後書きコーナー】特別編！！
作者・紅蓮です。

カノンノ「作者さんのアシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

そして今回、特別アシスタントには…

なのは「『魔法少女リリカルなのは』の高町なのはです♪」

の三人で、後書きページから飛び出して、本編ページにてお送りして参ります！！

カノンノ「はじめまして、なのはさん。今日はよろしく願いします。」

なのは「こちらこそ、よろしくね。カノンノちゃん♪」

カノンノ「はい♪ところで作者さん、何で今日は特別編をやるうと思っただんですか？」

カノンノ君、よくぞ聞いてくれました！本日8月5日といえば、『テイルズオブファンタジア・なりきりダンジョンX』の発売日なのだ！それを記念して、作中の登場キャラをゲストとして招いて、色々話を聞いていきたいと思います。

カノンノ「じゃあ、このコーナー始まって以来のゲストってことですな！！」

そういうこと。ではさっそくお呼びいたしましょう!! 『テイルズ オブファンタジア・なりきりダンジョンX』より、妖精エトス!!

エトス「はっはじめまして、みなさん。ぼくの名前はエトス。きょう今日は、よろしくお願いします。」

エトス、緊張しすぎ。もっとう、肩の力を抜いてさあ：

エトス「そんな事言われても、ボクこういうところに出るの初めてだから、どうしても緊張しちゃうんだヨ。」

なのは「大丈夫だよ。誰だって最初は緊張しちゃうものだから。それに私達がちゃんとフォローしてあげるから安心して。」

エトス「うっうん、ありがとう。え〜と…」

なのは「私は高町なのは。今日はよろしくね、エトスちゃん♪」

エトス「うん。よろしくね、なのは♪」

カノンノ「それにしても、二人とも声が似すぎててどっちがどっちなのか分からなくなりそうですね。」

そりゃそうだ。『中の人』がね：

カノンノ「？」

いや、なんでもないよ。

さて、今日はエトスから『なりきりダンジョンX』についてどんな作品なのか聞いていこうか。

カノンノ「物語の主人公は、確か双子のディオくんとメルちゃんでしたよね？」

エトス「そうだヨ。仲間を探して世界をさまよってたぼくを助けてくれたノルンから二人を預かるように言われて、ぼくが親代わりになって二人を育てたの。」

なのは「エトスちゃん一人で？大変じゃなかった？」

エトス「そんな事ないヨ。ぼく、今までずっと孤独だったの。仲間に会えなくてずっとずっと寂しくてとても嫌だったの。でも、二人を育てながら過ごしていくうちに、その孤独な心も癒やされていったんだ。」

でも、エトスって超過保護で外の世界は危険だ、なんて言って二人を家から出させなかったみたいだね。

エトス「そっそれは、二人にもしもの事があつたらぼくがノルンに
会わせる顔がなくなっちゃうもん。だから二人を守るためにぼくが
言い聞かせたの。」

カノンノ「そうなんだ。それで？」

エトス「それから13年過ぎたある日、アルベルトっていうノルン
の遣いがやって来て、ディオオとメルが『なりきり士』だって突然告
げられるの。」

なのは「『なりきり士』？」

『なりきり士』とは、ある服を着るとその服の職業の人間になりき
れる人の事です。

エトス「それで、『なりきり士』の能力を使って困っている人達を
救うように言われて、それがきっかけで、ディオ達が旅をすること
になるの。もちろん、ぼくも二人について行ったよ。だって、ディ
オとメルはぼくの可愛い双子だもん。ぼくも一緒にでなきゃ♪」

ほんと、エトスって過保護だな。

なのは「なんだかフェイトちゃんに似ているね。」

カノンノ「えーと、そう言えばディオ達は旅の中でいろんな人達に
出会ったよだね？」

エトス「そうなの。ディオとメルが助けたクルールっていう不思議
な生き物や時空戦士って呼ばれているクレスさん達と一緒に旅もす
るんだ。」

なるほどね。あと、本作には新キャラにロンドリーネっていう女性
が加わるんだよね？

エトス「うん。ロディはディオ達の旅の途中で出会って、色々どぼ
く達に力を貸してくれるの。それに、ロディは過去から未来に渡れ
る不思議な力を持っていて、その力でダオスを探して旅をしていた
の。」

カノンノ「え！！ダオスって確かクレスさん達が倒したはずの魔王
でしたよね！？」

なのは「魔王…」

いや、なのはさん。別にカノンノはあなたの事を言ったわけでは…

なのは「作者さん、それってどういう意味なのかな？」

いいえ…なんでもありませんよ。アハハハハ…ハァ。（危ない
危ない）え〜とつまり、今回もまたダオスがなにかしら絡んでくる
ということだな。

エトス「それに、ダオスはディオとメルを狙っているの。何で
二人を狙っているのかぼくにはさっぱりだよ。」

カノンノ「ディオちゃんとメルちゃん、ロディさんとダオス。この人
達に繋がるものって一体何なんだろう？」

それこそ、本作をプレイしてみてからのお楽しみじゃないの？

さて、話にも登場した『なりきり士』ですが、今回は特別にその衣装を少しだけお借りして参りました。

カノンノ「うわぁ〜こんなに色々な衣装があるんですね。」

剣士にナースにガンナーなど本作では80種類以上のなりきりコスチュームがあるんだとさ。ちなみに、着ても大丈夫ですよ。

なのは「作者さん、これってどうかな？」

お！『騎士』の衣装ですか。凛々しくてカッコいいですよ♪

なのは「ふふっありがとうございます、作者さん♪」

カノンノ「作者さん。私のはどうですか？」

なるほど、『魔女っ子』の衣装か。可愛くて似合っていると思うよ。

カノンノ「あっありがとうございます！／＼／＼」

さて俺も一つ着てみるか。お！これってまさか…

エトス「あの、どうしたんですか？」

ふっふっふっ、三人とも俺のこの姿はどうかかな？

なのは「それって『剣士』の衣装ですか？」

エトス「それって確か、ディオが着ていた『なりきり士』の衣装だね。」

カノンノ「あ！その衣装ってアスベルさんの衣装じゃないですか！
！」

正解！本作には「T O G」のアスベルのスペシャルコスチュームがあるんだ。一度主人公の衣装を着てみたかったんだよね。そうだし、せっかくだから、この衣装で一戦交えてみませんか？

なのは「じゃあ、私が相手してもいいですか？」

いいですよ。アスベルの力、見せてあげます！！

なのは「じゃあ、いきますよ！」

おう！！…って、ちょっとなのはさん！！いつの間に変身してるんですか！？

なのは「え？だって、私の本職はこっちだから。」

いやいや、『なりきり士』の衣装で戦わなきゃ意味ないでしょうが…

なのは「ごめんなさい。でも、もう遅いの♪」

えっ？カートリッジ七発。まさか…

なのは「《デイバインバスター！！！！》」

ウソでしょー！！ぎゃあああああああ！！！！！！！！

プレイヤー・紅蓮

HP…4500↓0

戦闘結果《WIN…高町なのは》

MAX HIT…20

EXP…1000

TIME…00'05"03

GALD…2500

GRADE…+50.00

なのは「これが私の全力全開！！」

カノン・エトス「（作者さん、あなたの事は一生忘れません…）」

「」

かつ勝手に殺すな、ガクッ…

カノンノ「さて、そろそろお別れの時間ですが、エトスさん今日はありがとうございました。」

エトス「こちらこそ、今日はみんなにいっぱい色んな話ができばくも楽しかったヨ。」

なのは「エトスちゃん、また遊びに来てね♪」

エトス「うん！それじゃあ二人とも、またどこかで会おうネ♪」

カノンノ「皆さんもこの夏、『テイルズオブファンタジア なりきりダンジョンX』で『なりきり士』となってディオくん達と冒険してみてはいかがですか？以上、【テイルズオブ後書きコーナー】特別編をお送りしました。」

なのは「読者の皆様からの感想、意見を随時募集中です♪」

カノンノ「それでは、次回もお楽しみに♪」

【テイルズオブ後書きコーナー】特別編（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】おまけ

……

カノンノ「作者さん、大丈夫ですか？」

カノンノ、包帯でぐるぐる巻きにされたこの姿を見て大丈夫のように見えるのか？

カノンノ「ですよね……」

ハァ、何で俺がこんな目に遭わなくちゃならないんだよ。

カノンノ「日頃の行いが悪かったとか？」

おい！！俺はいつだって真面目にやってるよ！！

カノンノ「でも時々、作者さんって適当になる時がありますよ。」

うう、それは……

カノンノ「これを機に、今度からはちゃんとしっかり取り組んで下さい。わかりましたか？」

はっはい。（あれ？いつの間にか怒られてる。てか、アシスタントに怒られる俺って情けない……）

カノンノ「それじゃあ作者さん。後の事はやっておきますから、ゆっくり休んで下さいね♪」

あっああ、頼んだ。それとカノンノ、次回のこのコーナーに他作品からのゲストが来るから。

カノンノ「え！？そうなんですか？」

ああ。だから迎える準備だけはしておいて。

カノンノ「わかりました！！私、張り切って頑張りますね！！」

というわけで読者の皆さん。次回もお楽しみに…痛たたっ！！

（※今回紹介した『テイルズオブファンタジア なりきりダンジョンX』は、公式サイトの情報をもとに書き上げたものです。一部本編と異なる場合があるかも知れませんが、ご了承下さい。）

第7話（前書き）

更新が遅れてしまいました。お待たせしてすみません。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回はつまらない話かも：
それでは、どうぞ！！

第7話

【ミッドチルダ・時空管理局本局】

次元管理局本局。多数の次元世界を行き来し、広域でのパトロールを担当する次元航行部隊の本拠地である。

今、フェイトと保護されたルーク達は彼らの世界『オールドラント』が登録されているか確認するため、本局を来ている。

都市クラスの施設を内包する巨大な艦になっている本局。この技術力を目の当たりにするルークとティアは啞然としているが、

「凄い！こんな機械見たことないぞ！！」

「…ねえルーク、ガイは急にどうしちゃったの？」

「ああ…ガイのいつもの癖だからあんま気にしないで。」

この音機関マニアのガイだけは、童心に返ったかのように施設内の設備や機械を見て興奮していた。彼の姿に流石のフェイトも驚いてしまった。

すると、四人が歩く廊下の先から、

「あっ、フェイトちゃん！」

「なのは！」

事件の応援要請直後に別れたのはがやって来た。

「フェイトちゃん、事件の方は大丈夫だったの？」

「うん、大丈夫。人質に怪我がなくて無事に解決できたよ。」

事件の事を心配していたのはだったが、フェイトの口から何事もなく事件解決したことを聞き、胸を撫で下ろす。

「良かった：ところでフェイトちゃん、この人達は？」

なのはがフェイトが連れているルーク達について尋ねる。

「この人達は、事件現場付近で保護した次元漂流者なんだ。」

「え！？この人達も！」

「うん。今からこの人達の世界が本局に登録されているか確認しに行くところなの。」

「そうだったんだ：」

フェイトの言葉を聞き、なのはは驚いた。過去に何度か次元漂流者を保護した経験はあるが、たった一日で六人も次元漂流者を保護したのはこれが初めてだからだ。

「なあフェイト、この方は？」

「彼女は高町なのは。私の親友だよ。」

「初めまして♪フェイトちゃんの親友の高町なのはです。よろしくね♪」

「よっよろしく…／＼／」

なのはの素敵な笑顔にルークは顔を赤らめる。その笑顔を見た男性なら誰しも惚れてしまうほど素敵なものだ。と、その様子を横から見ていたティアが…

「なに女の子の前で鼻の下を伸ばしているのかしら？」

「なっなんだよ、ティア。別にそんなんじゃない？」

「そうね。あんな笑顔見せられたら、見とれちゃうものね。」

「ちょっと待てよ、さっきから何が言いたいんだよ？」

「別に…何でもないわ…」

「？」

突然つかかかってきたティアの様子に、ルークは何がなんだかわからず、二人の間にビミョーな空気が漂う。

「おいおい、二人さん。ケンカなら一段落着いてからにしないか？」

「「！！」」

すると、ガイがケンカを止めに入る。蚊帳の外に置かれたなのはと

フェイトはただ立ち尽す姿を見て、気恥ずかしくなったのか二人はすぐに目をそらした。

「えっと…」

「あはは…すまない、見苦しいところ見せてしまって。俺はガイ・セシル、よろしく。」

「私はティア・グランツ。」

「俺はルーク・フォン・ファブレ。よろしくな。」

とりあえず三人は、なのはに自己紹介を済ませる。

「そういえば、はやてや他の次元漂流者達はどこにいるの？」

「今、向こうのラウンジで待ってもらっているよ。これからはやてちゃんやアーチェさん達に結果を伝えに行くところなの。」

「それなら、私がルーク達の世界を調べている間ルーク達をはやてのところに連れてってもらえるかな？はやてにもルーク達の事を先に話しておきたいから。」

フェイトは、はやてのところに戻るなのはにルーク達も連れて行き、待ってもらうように頼む。もちろん、なのはは承諾する。

「うん、わかった。」

「ありがとね。それじゃあ、また後でね。」

そう言うと、フェイトは一人歩き出す。

一方、なのはの帰りを待っているはやてとアーチェ達は、

「…でね、あたしに付いたあだ名が『××料理人』なんだよ。ひどいと思わない!？」

「それはひどいな!! そのあだ名をつけた奴ちゅうのは、失礼だと思わへんかったのか？」

「でしょ? だから、あたし毎日料理の腕を磨いてるの。それで、いつかあのバカを見返してやるんだ!」

「その意気や! 私、アーチェの事を応援しとるで♪」

「ありがと、はやて♪」

何やら女同士で盛り上がっていた。その一方で二人の会話に全く興味を示さないかのようにリッドは椅子に座りながらぐっすりと眠り、キールは持っていた古い書物を真剣に読んでいた。

そこへアーチェ達の世界を調べに行っていたなのはが帰ってきた。

「はやてちゃん、お待たせ！」

「あっ！おかえり、なのは！」

「おかえり…って、なのはちゃん。後ろにおる人達は誰や？」

はやては、なのはが連れてきたルーク達の事をなのはに聞く。

「ええと、実はね…」

なのはは、帰ってくるまでの間にあった事を簡単にはやて達に説明する。ルーク達とはやては互いに自己紹介し、事情を説明する。

「そっか、事情はわかった。でも安心してや。必ずルーク達も元の世界に送り届けるからな。」

「ええ、よろしく願います。」

「それでなのはちゃん、どうやったか？」

「それがね…」

なのはは調べた結果をありのままに話す。アーチエの住む世界・アセリアもリッドとキールがいた世界・セレスティアも管理局に登録されていなかったそうだ。

「そんな…」

「…」

その場にいたアーチエやキール（リッドは寝かせたまま）はシヨックを隠せなかった。

「なあティア、俺達の方は大丈夫かな？」

「…」

ルークがティアに話しかけるも、まるで避けるようしてルークに背を向ける。

「まあ、とりあえずフェイトが帰って来るのを待とうぜ。」

「あっああ…そうだな。」

それから十数分後、

「なのは！はやて！お待たせ！！」

ルーク達の世界を調べに行ったフェイトが戻って来た。

「あっ！おかえりなさい、フェイトちゃん。それでルーク君達の世界は見つかった？」

「ううん。どこを調べても管理局にはルーク達の世界は登録されていなかった。」

ルーク達の世界も管理局には登録されていない世界だったようだ。

「なあフェイト、俺達の世界が見つかるのってどれくらいかかりそうなんだ？」

「登録されていない世界となれば、見つけるのにどれくらい時間がかかるかもわからない。それに最悪の場合……」

「最悪の場合？」

全員が息を凝らす。

「……もう戻る事が出来ないかもしれない。」

その言葉を聞いた瞬間、辺りは静寂に包まれた。

アーチェ達の元の世界へと帰れるという期待から絶望へと変わり、落胆してしまった。そんな様子なのは達もどう言葉を返せばいいか分からなくなった。

だが、その静寂はルークの一言によって破られた。

「でも、こうなっちまったらしょうがないよな。次元漂流なんて誰にも予想つかなかった事だろうし……」

「……だよな。それにまだあたし達が元の世界に帰れないって決まったわけじゃないでしょ？」

「そうね。次元を行き来する程の技術があるのなら、私達の世界もきっと見つかるはずだわ。」

「それに、僕はこの世界に興味がある。この世界の事を知るためなら、多少帰るまで時間がかかっても構わないさ。」

「だな。不謹慎な言い方かもしれないが、こんな経験はそうそうないもんだからな。俺も世界に興味がある。」

さっきまでの落胆さとは一変し、アーチェ達は前向きに事を考えた。次元漂流など誰にだって予想できない事故だ。ならば、過ぎてしまった事を嘆いたりしてもしようがない。どれほどの時間がかかろうと、元の世界に帰れる可能性を信じ、時空管理局を頼るしかないと…

「……せやな。まだ帰れないって決まったわけやないし、まだ諦めるには早いな。時間はどれくらいかかるかわからへんけど、私達が絶対にみんなを元の世界に送り届たる。」

希望を捨てない彼らに対して、なのは、フェイト、そしてはやての三人は彼らの期待に応えられるよう最善を尽くす事を決意する。必ず全員元の世界に帰れるように…

「それじゃあ、みんな。それぞれが元の世界に帰れるまでの間、よろしくね。」

「「ああ!!」」

「うん! よろしくね!」

「こちらこそ、よろしく。」

「ええ！」

こうしてアーチェ達は、それぞれが元の世界に帰るまでの間、この世界で暮らす事となった。

「ふわああ〜よく寝たあ……あれ？なんか人が増えたか？」

そして、一人置いてかれてしまったリッドであった。

時を同じくして、

【ミッドチルダ・陸士108部隊隊舎】

ここは、時空管理局の一部隊・陸士108部隊の隊舎。かつての機動六課と深く交流があり、協力関係にあった部隊でもある。

今、この隊舎の廊下を制服姿の二人の少女が歩いている。一人は紫色のロングヘアに青のリボンを身につけた少女、ギンガ・ナカジマ。もう一人は長い銀髪に右目に黒の眼帯をつけた外見上は幼い子供にしか見えない小柄な少女、チンク・ナカジマだ。

「ありがとね、チンク。今日も私の仕事手伝ってもらって。」

「いえ。今日も特にやることがなかったからな。」

JS事件からおよそ一年。主犯であるジェイル・スカリエッティの手によって作り出された戦闘機人集団『ナンバーズ』の更生組は、海上隔離施設で更生プログラムによる再教育を終え、それぞれ皆新たな道を歩んでいた。

108部隊の部隊長でギンガの父親でもあるゲンヤ・ナカジマが保護責任者としてチンクと三人の妹を引き取り、ナカジマ家に来てから二カ月ほど経とうとしていた。最初の頃、新しい生活に妹達は戸惑いを感じていたらしいが、少しずつ慣れ始めてきているそうだ。最近では『N2R』というユニットを結成して活動しているもの、これといった仕事もなく、現在は部隊の仕事の手伝いや自主トレをしている。

「そろそろ父上や他の妹達も戻ってくる頃だな。」

「そうね。早く帰ってみんなの夕食の支度しなくちゃ。」

時刻は六時過ぎ。父親と他の妹達も仕事や自主トレから帰ってくる頃なので、二人は夕食の準備の為に家に帰ろうしていた。その時、チンクが廊下の窓から外に何かを見つける。

「ん？あれは？」

「どうしたの？」

「今、外で何か光ったような…」

「え?……何も見えないわよ。」

ギンガも窓から外を見るが、それらしきものは見当たらなかった。

「……私の見間違えかもしれないな。」

外は日が沈みかけ、橙色に空は染まっている。たぶん夕日の光が窓ガラスにでも反射して目に入ったのだろうとチンクはそう思っていた時だった。

「(チンク姉!ギンガ!)」

突然、誰かがギンガとチンクに念話で通信してきたのだ。

「(ノーヴェか?どうした、そんなに慌てて?)」

その人物は元『ナンバーズ』の一人であり、チンクと共にナカジマ家に引き取られたノーヴェ・ナカジマからだった。

「(事情は後で説明するから、すぐに外の訓練場に来てくんねえか?)」

「(訓練場?)」

「(…分かった。すぐに向かう。)」

そう言うと、お互いに念話を切る。どうやら外の訓練場で何かあったようだ。

「ノーヴェは慌てていたみたいだが…」

「とにかく行ってみましょ！」

二人は急いでノーヴェがいる訓練場に向かった。

ギンガとチンクが訓練場に着くと、赤い髪に少年的な容姿の少女が待っていた。

「チンク姉！ギンガ！」

「ノーヴェ！一体何があったの？」

「それが…とにかくこっちにきてくれ！」

詳しい事は話さず、とりあえず二人はノーヴェの後をついて行く。

「コイツなんだけどな…」

ノーヴェの視線の先を見た二人は驚いた。

そこには、一人の少年が眠っているように横たわっていた。黒髪に真っ黒のマントと服を纏い、服の前には水色の線で十字架が描かれ、両袖にも線が入っている。腰には長い曲刀に短剣を納め、この人が

剣士である事がすぐにわかる。何より一番気になるのは、動物の頭蓋骨のような不思議な仮面を被り、顔を隠している事だった。

「ノーヴェ、この人は？」

「あたしにもわからねえ。気がついたら、コイツがここに……」

ノーヴェの話によると、今日はこの訓練場で彼女一人で自主トレをしていた。日も沈みかけてきたので、そろそろ切り上げようと訓練場をあとにしようとしたとき、突然ノーヴェの背後から青白い光が発したのだ。それに気がついて振り返るが、あまりに明るくて直視できず、何が起きているのか全く分からなかった。光は数秒後で収まり、気がつくとその少年が倒れていたという。

「そうだったのね。」

「それで、どうしたらいいか分からなかったから、チンク姉とギンガを呼んだわけ。」

「なるほど、状況は分かった。それで姉上、この者はどうしますか？」

「そうね。このまま放っておくわけにもいかないから、ひとまず隊舎の方に運びましょ。後、彼からも色々事情を聞かなきゃいけないしね。」

「分かった。ノーヴェもそれでいいな？」

「チンク姉がそう言うなら、あたしは構わないけど。」

三人の意見が一致したところで、ギンガは気絶している仮面少年を背中にかかえ、チンクは少年が腰に掛けている二本の剣を鞘ごと持って、隊舎の方へと運ぶのであった。

へ……………んっ？ここは一体？

第7話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも！作者の紅蓮です！！

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

そして、今回は他作品からゲスト！！

『魔法少女リリカルなのは Rainbow Flower』虹の花、此処に♪より、主人公の御剣翡翠！！

翡翠「どうも、御剣翡翠だ。今日はよろしくな。」

カノンノ「はい。こちらこそ、今日は宜しくお願いします。」

さて、翡翠。君の資料を読ませてもらったけど、こりやまた随分な修羅場をくぐり抜けてきたもんだな。

翡翠「まあな。ネクロノミコンの封印に姉貴との戦い、因縁のオーマとの決戦。どれも楽なものじゃなかったし、何度も死にかけたさ。でも、ギルドや六課のみんなと一緒に戦ってくれたからこそ、ここまで来れたんだと思う。あいつらがいなかったら、こうはならなかっただろうな。」

カノンノ「なんか、翡翠さんって凄いですね。」

？「すげえも何も、こいつに勝てる奴なんて、そうそういないからな。」

カノンノ「!?!」

翡翠「お！ユーリ兄い、久しぶりだな。」

ユーリ「よっ久しぶりだな、翡翠。それに作者もカノンノな。」

カノンノ「ユーリさん！どうしてここに!?!」

ああ、俺が呼んでおいた。翡翠とは知り合いみたいだからな。

翡翠「後、俺に剣術を覚えてくれたのもユーリ兄いだからな。」

ユーリ「まっそう言うことだ。」

では、ユーリも加わったところで今回の話について聞いてみようか。

ユーリ「これでしばらくは、ミッドでの生活が決定ってわけだな。
だいたいは予想してたけどな。」

そりゃあそうだ。でなきゃ、この先の話が成り立たなくなっちゃう
からな。

翡翠「ところで、ナンバーズの更正組の出所時期ってこんなに早か
ったか？」

実は俺もよく知らない。StrikersからサウンドステージX
の間のどこかってのは分かってるんだが…

翡翠「じゃあなぜ出演させた？」

それが、明らかに登場するテイルズ側のキャラが多いんだ。リリナの側からもより多くのキャラを出すとなると、どうしても出さざるを得ないんだ。

ユーリ「それで原作から一年後に出所っていう設定にしたのか。そんな事したら、原作を愛する読者からなんて言われるか分かんねえぞ？」

大丈夫。もう覚悟は出来てるから…それと、実際の出所時期を知っている人がいましたら、教えて下さい！！

翡翠「あと、最後に登場した奴ってあいつだよな？」

うん、翡翠が想像している人物だと思うよ。

翡翠「やっぱり？」

さて、いよいよお別れの時間がやって参りました。

カノンノ「翡翠さん、ユーリさん。今日はどうもありがとうございました。」

翡翠「こちらこそ。」

ユーリ「俺やエステル達が早く本編に出られるように頼むぜ。」

うん、努力します。次回は、やっと序盤の話が終わります。

カノンノ「本編に関する感想や意見、随時募集してます。」

それでは、

作・カ・翡・ユ 「 「 「次回もお楽しみに！！！！！」
「
「
「

第8話（前編）（前書き）

大変長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません。
うまく話がまとめられなくて悩んでいました。結局、前半と後半に分ける事になってしまいました：

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

それでは、どうぞ！！

第8話（前編）

P M 7 .. 2 8

【ミッドチルダ・高町家】

高層ビル群が建ち並ぶ首都クラナガンの中心部から少し離れた市街地。外はすっかり暗くなり、ほとんどの住宅には明かりが灯され、家族の賑わいの声が聞こえてくる。そんな中、なのはは自分の家に帰って来た。

「ただいま！」

「ママ！おかえりー！」

「ただいま、ヴィヴィオ。ちゃんといい子にしてた？」

「うん♪」

なのはが家に入ると、ハニーブロンドの髪に赤と緑のオッドアイをした愛娘・ヴィヴィオが飛びつき、なのはの帰宅を喜ぶ。

なのははヴィヴィオの頭を撫でてあげると、ヴィヴィオも嬉しそうに笑顔を見せる。

「お帰り、なのは。」

すると、今度はハニーブラウンの長い髪を後ろに結わいでいる眼鏡をかけた青年が、ヴィヴィオに続いてなのはを出迎える。

「あっユーノ君、ただいま。」

なのはの昔からの親友であるユーノ・スクライアだ。

「今日はごめんね。ユーノ君もせっかくの休日だったのにヴィヴィオの面倒を見てもらっちゃって……」

「僕は平気だよ。なのはの方が現場の仕事が忙しそうで最近休んでなかったんだから、たまには一日ゆっくり休まないと。」

実は、今日の休暇は多忙な日々を送るなのはを心配して、ユーノ自ら提案したもの。自分の事を心配してくれるユーノの気持ちを素直に受け取って、休暇をとることを決めるのだ。

ユーノがなのはの家にいるのも、一日ゆっくりしてもらおうと思ってヴィヴィオの面倒を見ていたからだ。

「それで、みんなとの久しぶりの休暇はどうだった？」

「えっと、それなんだけどね……」

「？」

ユーノの質問に、なのはが答えようとする、

「……………ねえママ、この人だれ？」

なのはに抱きついているヴィヴィオが、その後ろにいるピンク髪の

ポニーテールの少女の事を聞く。

「あたし？あたしはアーチェ・クラインだよ。よろしく☆」

「？」

「えーと、なのは。この子は？」

「うん、実はね…」

アーチェと名乗る少女を二人は不思議そうな目で見る。
とりあえず、今日あった日の事をユーノに簡単に説明した。

「そうだったんだ…」

「ところであんたは？」

「あつごめん、まだ自己紹介してなかったね。僕はユーノ・スクライア。無限書庫の司書長を務めているんだ。」

「高町ヴィヴィオです。」

ヴィヴィオは、アーチェにお辞儀をする。

「え！なのはって子供いたの！？」

「うん、ちょっと事情があって私が引き取った子なんだけど、今は私の可愛い娘なの♪」

「ふーん。じゃあ、ユーノがヴィヴィオのパパなわけ？」

「「え！！」」

いきなりアーチェからのとんでも発言に二人は驚いてしまう。

「そっそれは…／／／」

「ちっ違うよ！ユーノ君は私の小さい頃からのお友達で、今日はヴィヴィオの面倒を見てもらってただけなの、ねっユーノ君！？」

「えっ！？うっうん。（僕はヴィヴィオのパパでも良かったんだけど…）」

ヴィヴィオはある事情で引き取った養子であり、なのはとフェイトが母親になっている事を説明し、アーチェに誤解を解く。もつとも、ユーノはなのはからのあの言葉が重くのし掛かったようだ。

「な〜んだ、つまんないの。」

「そっそれで、どうしてアーチェさんと？」

「それがね…」

そう、なぜなのはとアーチェが一緒にいるのか。それは今から約二時間前に遡る。

【ミッドチルダ・時空管理局本局】

登録されていない世界だとわかり、しばらく保護する事が決まったのだが：

「ねえ二人共、これからアーチェ達が元の世界に帰るまでの間、どこで暮らしてもらう？」

フェイトの言うようにアーチェ達を保護している間、寝泊まりする場所が必要となった。

「うーん。どうしたらええかな？」

「六課にいた時は、隊舎の空き部屋を使ってもらっていたけど…」

「なるべく私達の目が行き届くところの方がいいよね？」

色々考えていると、ここではやてからある提案が：

「ほんなら、なのはちゃんと私の家に分けて泊めるってのはどうやろか？」

「「「「え！！！！！！！」」」」

なんと、彼らを彼女達の自宅に泊めてはどうかというものだ。

「うん。それならアーチェさん達も安心だね。」

「私もそれが一番だと思う。」

二人もはやての案に迷うことなく、むしろ快く賛同する。

「で、でも…」

「有り難い事ではあるけど、かえってあなた達に迷惑がかかるのでは？」

保護してもらい、泊まる場所がないとはいえ、いつ帰れるかもわからない状況で彼女達の家に泊めてもらうのは、逆に迷惑をかけるのではないかとキールが指摘する。

「遠慮せんでもええって。困った時はお互い様や♪」

「それに、この世界の文字や法律もみんなと違うはずだから、帰るまでの間のアーチェさん達の生活をみていく必要があると思うの。」

「そりゃあ、そうかもしれないけど…」

「あなた達を保護した以上、私達が責任もって元の世界に送り届ける義務があるの。だから、気を使わなくても大丈夫だよ。」

「……行く宛もないみたいだし、ここは一つお言葉に甘えさせてもらった方がいいんじゃないか？」

「ガイ…！」

「フェイト達がああ言っているんだ。彼女達なりの俺達への配慮なんだろうし、せっかくの御好意を断るのも失礼だからな。」

自分達の不安を取り除く為のなのは達なりの配慮だとガイが考える。

「そうね。知らない世界で私達だけで暮らしていくもの厳しいでしょうし、なのはさん達の言うように一緒にいた方が安心すると思うわ。」

「ティア……そうかもな。俺もはやての案に賛成するよ。」

「じゃあ、あたしも！」

「俺はどっちでもいいんだけどな。」

「ってリッド、お前起きていたのか！」

「オイオイ、さっきからずっと起きてるって。」

「まったく…」

「それで、キールはどうするの？」

「皆さんが大丈夫と言うなら、僕も賛同します。」

「ほんなら決まりやな。」

みんなとの意見が一致し、これからどのように分けるか話し合っ

いると、

「あら？ フェイト？」

「？」

不意に自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、振り向く。

「母さん！！」

「あ！ リンディさん！！」

フェイトに続いて全員が振り向くと、管理局の制服姿でエメラルドの髪に見た目は若々しい女性がやってきた。

「あら、なのはちゃんにはやてちゃんまでどうしたの？ 今日とは三人とも休暇だって聞いてたけど…それに後ろにいる人達は？」

「えーと、リンディさん。実は…」

なのはが事情を説明している間、ティアがある疑問をはやてに聞いた。

「あの、はやてさん。あの方は？」

「あの人は、リンディ・ハラOWN総務統括官。簡単に言えば、なのはちゃんとフェイトちゃんの上司みたいなもんかな？」

そのこと聞くと、今度はガイがある事に気づく。

「ちょっと待った。ハラオウンって事は、もしかして……」

「そや。リンディさんはフェイトちゃんの母親や。」

[illegible]

衝撃的な事に思わずルーク達の声が響き渡る。

「いやややや、どう見ても母親って年には見えないぞ!!」

「そっそうだな。フェイトの姉っていうならまだわかるが…」

「（一体どんな若作りしていたら、ああなるんだ？）」

「（羨ましい：）」

フェイトの年齢を考えても母親という年齢を感じさせないほど若く見える。その事にルーク達はただ驚くしかなかった。

「ふふっ、お世辞でも言ってもらえて嬉しいわ♪リンディ・ハラオウンです。皆さん、宜しくね。」

「あはは、それはアーチェさん達が驚くも無理はないね。」

「ほんとほんと！もうびっくりしちゃったよ！」

なのは達は、玄関からリビングに移動し、色々と話をしていた。

「それで、その後はどうしたの？」

「それでね……」

なのはの話をまとめるとこうだ。

リンディに事情を説明すると、『それなら私の家も泊めてあげられるわよ』と言い出した。

さすがになのは達もリンディにまで迷惑をかけられないと遠慮するも、高町家、正確にはフェイトと一緒に暮らしているがゆえに大人数で暮らす八神家だけでは、六人の次元漂流者達を泊めるのは厳しいのではないかと指摘される。

最終的には、上司命令などといって強引にハラOWN家に泊まるはめになってしまった。

結果、高町家にアーチェ、ハラOWN家にルーク、ティアとガイ、八神家にリッドとキールでそれぞれ泊まる事になった。

「じゃあ、フェイトはリンディさんの所に？」

「うん。ルークくん達の面倒をみなきやいけないから、しばらくは実家で過ごすって言ってたよ。」

「そっか。じゃあ、しばらくはアーチェさんとヴィヴィオと三人で暮らすんだね。」

「ママ。今日フェイトママ、お家にかえってこないの？」

「うん、色々事情があってしばらくは帰って来られないの。だから、しばらく我慢してね。」

「う、うん………」

さっきまで元気だったヴィヴィオは、フェイトしばらく帰ってこない事を聞き、急に元気がなくなってしまった。
そんなヴィヴィオを見ていたアーチェは、

「ねえねえ！だったら、あたしがヴィヴィオの相手してあげるよ！」

「「え!!」」

「それだったら、ヴィヴィオが寂しくなる事ないでしょ？ママってのは無理だけど、お姉ちゃんってのはどうかな？」

「…おねえちゃん？」

ヴィヴィオはアーチェに顔を向けながら、小声で言ってみる。

「そうだよ。このアーチェお姉ちゃんにドーンと任せなさい♪」

「アーチェおねえちゃん……うん♪アーチェおねえちゃん!!」

「そうそう☆なんだか、あたしに妹ができたみたい。」

「えへへ…♪」

姉ができた事にヴィヴィオは喜び、アーチェに抱きつく。

「良いの、アーチェさん？」

「平気平気☆これから住まわせてもらうんだから、あたしも何かしなくちゃ。」

しばらく一緒に暮らすのだから、何か自分ができることをしたいとアーチェは言う。

（グウ~~~~）

すると、アーチェとヴィヴィオのお腹からいい音が聞こえてきた。リビングの時計ではもう八時近くなのだから無理もない。

「アッアハハハハ：／／／」

「ママ、ヴィヴィオもおなかすいた！」

「はいはい。すぐできるもの作るから、二人とも待っててね。」

「「は〜い!!」」

まるで姉妹のように仲良く返事をする。

「それじゃあ、僕はこの辺で失礼させてもらおうかな。」

「ユーノ君、もう帰っちゃうの？」

「うん、明日は溜まっていた資料の整理をしなくちゃいけないから、

朝から早いんだ。」

「そうなんだ。今日はほんとに色々ありがとね。」

「ユーノさん。今日は、あそんでくれてありがとうございます！」

「はい、どういたしまして。それじゃあね。」

三人に見送られながら高町家を後にする。

その帰り道の事。

「（まだ友達のままか。ハァ、僕はどうしたらいいんだろ…）」

出会って十一年。未だ恋の進展がないこの青年に春が訪れるのはいつのことやら…

P
M 8 .. 3 8

一方、フェイトの方はというと、

【ミッドチルダ・ハラオウン家】

「ご馳走さま。しかし、リンディさんの料理うまかったな。」

「ああ、こういう家庭的な料理は前回の旅以来だからな。」

「ふふっ♪そう言ってもらえると、今度から作りがいがあるわ。」

ルーク達にフェイトとリンディ、さらに留守番していたフェイトの使い魔のアルフ六人で遅めの夕食を食べ終わったところだった。ルークとガイは、リンディの作った料理に絶賛する。

「ティアもリンディさんの料理うまかったよな？」

「…」

「ティア？」

「え!?!…そっそうね。とても美味しかったわ。」

ルークの呼びかけに気づかず、ぼうっとしているティア。先ほどから何かを見ているようだが…

「（あのアルフって子、可愛いわ。あの耳って本物なのかしら？後で触らせてくれるかな／＼／＼）」

「（何かさっきから見られているような気がするんだけど…）」

ティアの視線は、フェイトの膝に座っているアルフに向けられている。

言うまでもないが、ティアは大の可愛いもの好きで、ひそかにアル

フを狙っているみたい。

「ところで、ガイやティアはどういう経緯でこの世界に来たの？」

「うーん。話すと長くなるんだが……」

ガイの話をもとめるとこうだ。

ローレライ解放から約七ヶ月が経ち、マルクト帝国の帝都グランコクマにある貴族院に、ガイもといガイラルディア・ガラン・ガルディオス伯爵の私室があり、いつものように仕事を片付けていると、一人の来客がやって来た。それがティアだ。突然の思わぬ来客に驚いたが、折角来てもらったので応対し二人で色々談笑していると、今度は一人のマルクト兵がやって来た。

用件は、この国の王であるピオニー陛下がまたもや仕事を放棄してどこかへと逃走したとの事だ。やれやれと思いつながら、ティアにはここで待ってもらおうように言うが、彼女も一緒に行くと言い出したので、二人でピオニー陛下を連れ戻しに行く。

といっても、どうせ例の大佐のところに行って匿ってもらっているのだらうと思いつながら廊下を歩いていた。その時、突如落とし穴が現れ、気づいた時には一步踏み出してそのまま二人落ちてしまった。気が付くと、二人は廃墟した建物があちこちに建っている知らない場所にいた。二人は事態を収拾するため、とりあえず辺りを歩いていると向こうの方で人集りができていたので、気になった二人が行ってみるとそこにルークとフェイトがいた。そして今に至る。

「そうだったの。それにしてもガイ君が貴族の人だったなんてちょっと驚いたわ。」

「貴族っていつでもまだなりたてですから。それにここにいる間は

気を遣う必要はありませんよ。」

貴族であってもこれからは対等に接して欲しいとフェイトとリンディに頼み、彼女も遠慮なくそうさせてもらうことにした。

P M 9 .. 4 3

夕食後、各々自由に過ごしている。

フェイトはルーク達が帰れるまでここで暮らすため、自宅の荷物をまとめてくると言って一旦帰った。

ガイとリンディは、二階の空き部屋で寝るための準備していた。ちなみにルークとガイがこの部屋を使い、ティアはフェイトの部屋を使う事になった。

ルークはというと、二階のベランダに出て一人外を眺めている。

「ほんとに別世界に来ちゃったんだな…」

ここから見えるクラナガンの都市夜景にルークは目を奪われていた。夜空を見上げてオールドラントほど星は見えず、改めて別世界に來た事を実感する。

「ルーク、ここにいたのね。」

そこへティアがやって来た。だがいつもの服装ではなく、フェイトから借りたパジャマを着ていた。

ティアは、リンディに勧められて先にお風呂に入ってきたからだ。

「ティア、もう風呂から上がってたのか？」

「ええ、あなたも先に入ってきたら？ ガイやリンディさんも準備でしばらく入らないと思うから。」

「あっああ、わかった。」

そう言って家の中に戻ろうとしたティア。すると、

「あっあのさ、ティア！」

ルークが突然声を出してティアを引き止める。

「何かしら？」

「その…今ティアって悩み事があるんじゃないのか？」

「え！？急にどうしたの？」

「ガイからさっき聞いたんだ。ティアの様子が変わったって…」

数十分前、ガイがある事をルークに話していた。

突然ガイの元を訪れたティア。その理由を聞くも、彼女は何も言おうとしなかった。ただ彼女の表情から何かを悩んでいるのは確かだった。

「もしそうなら、俺やガイが力になるよ。だから、その…」

何か悩んでいるのなら俺たちが力になる。だから一人で抱え込まないで、ということを経ルークはうまく言葉で言えないが、なんとかティアに伝えようとする。

「……ありがとう、ルーク。でも、もう大丈夫だから。」

「けど…」

「あなたがローレイを解放してから、ユリアシティであなたの帰りをずっと待つ事にしたの。けど一日一日が過ぎていくと、ほんとはもう帰って来ないんじゃないかって心のどこかで時々思ってしまうの。あなたが必ず帰って来るって約束してくれたのに…」

「ティア…」

エルドランドで二人が交わした約束。必ず生きて帰ってくる、それを信じて彼女はこの七ヶ月間待ち続けた。

だが時が経つにつれ、ルークはもう帰って来ないのではとその思いが日に日に増し、自信がなくなりそうになったという。

「じゃあ、ガイの所に行ったのは…」

「ええ、悩んだり迷うようなことがあったらいつでも相談に乗るって言ってくれてたのだけど、結局言えなかったわ。ほんと、ダメね私…」

ルークはこんな弱々しい彼女の姿を見るのは初めてだ。

「でも、こうやってまたティアやガイに会うことができたんだ。世界は違うけどな…」

「ルーク…」

「もしティアが悩んだり迷ったりしたら、俺も一緒に考えてるよ。」

「何よそれ。」

その直後、お互いの顔を見ると二人は笑い、ようやくティアも元気になった。

「もう俺は消えたりしない。だから、もう一人で抱え込まないって約束してくれ。」

「ええ、約束するわ。」

「あとさ、さっきは悪かった。」

「え？」

「いや、だから管理局であつた事だよ。」

ルークは管理局で起きた事をずっと気にしていた。

「別にあなたが謝る事ないわ。」

「でも…」

「私が勝手に怒っただけ。むしろ私の方が謝らないといけない。だから気にしなくても大丈夫よ。」

「そっか…なら、いいんだ。それじゃ、俺も風呂に入ってくるよ。」

そう言ってルークは、ティアをその場に残して一階に降りていった。

「（言えないわよね。私がなのはさん達に嫉妬したなんて……でも、ほんとに帰って来てくれてありがとう…）」

胸の内に秘めるルークへの想いをしまい込む。そして、夜はふけるのであった。

第8話（前編）（後書き）

『第9話（後編）』は今月末に更新する予定です。
なお、今回分の【テイルズオブ後書きコーナー】は後編にてまとめ
てやらさせていただきます。

感想や意見、随時募集中です。
それでは、次回もお楽しみに！！

第8話（後編）（前書き）

今までの中で一番長くなってしまいました。もっとコンパクトに収めたかったです。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

やっと序盤編も終了です。また、今回の後書きコーナーに他作品からのゲスト登場及び大事なお知らせがあります。

それでは、後編をどうぞ!!

第8話（後編）

P M 7…32

【ミッドチルダ・八神家】

なのはが帰宅していた頃、はやてはリッドとキールを連れて自宅に到着した。二人はしばらく八神家で暮らすことになったからだ。

「ただいま！」

はやてが玄関に入ると、

「あ、はやてちゃん！お帰りなさいです〜！」

「ただいま、リイン。」

玄関から出迎えたのは、はやてのユニゾンデバイスであるリイン・フォース？（ツヴァイ）だ。

「なのはさんとフェイトさんとの休暇は楽しかったですか？」

「もちろんや♪久しぶりに二人とゆっくり過ごせたから、お陰で今日は羽根を伸ばせたで。」

「それは良かったですう♪……あれ？後ろにいるお二人はどちら様

ですか？」

リイン？は、はやての後ろにいるリッドとキールに気付いて尋ねる。

「なあはやて、このちっこいのは何だ？」

「うーん。ただの人形ではなさそうだが…」

リッドとキールも、浮遊する小さな人を珍しそうに見ている。彼らからすれば、そんな人間はまずいないのだからそう思われても仕方がない。

「ぶー！…リインはお人形さんじゃないです！！リインははやてちゃんのユニゾンデバイスですう！！」

「うーん…よくわかんねえけど、とりあえずよろしくな。俺はリッド・ハーシエル。」

「僕はキール。キール・ツアイベルだ。」

「ハイです♪私はリインフォース？です。」

「それでな、二人はしばらくうちに泊まることになったから、リインも仲良くしてな。」

「はい！？はやてちゃん、今何て言ったですう！？」

突然、リイン？がはやての言った事に何故か驚き、もう一度聞き直す。

「おいバッテンチビ！何変な事言ってるんだよ！」

「だいたい、はやてに男ができたんなら、あたし達が知らないはずがない……」

と、三つ編みをした赤髪の子供が言い終えようとしたら、全員がはやての後ろにいるリッド達の存在に気付いた。そして一同の頭の中に浮かんだのは：

主はやて×後ろにいる青年×リン？の証言Ⅱ彼氏！！

『ええええええええええ！！！！！』

見事なまでに全員が絶叫という名の大合唱を奏でた。

「マツマジかよ!!」

「とうとうはやてちゃんに嫁入りのチャンスが来たのね。それも二人なんて…」

「シャマル、気が早すぎではないか？　しかし、まさか本当に主に男が…我は未だに信じられぬ…」

各々このような感想を言うが、完全に誤解してますよ。

「嘘だろ…そんなわけねえだろ！！なあはやて、嘘だって言ってくれよ！！！」

一人だけ取り乱していた。

「ちょっと待って下さい！僕達は決してそういうのでは…はやてさんも何か言って下さい！」

「なんやキール君、私みたいな女性を目の前にして照れんでもええのに♪」

「ちよっ！／＼／＼変な事言わないで下さい！！皆さんが真に受けるじゃないですか！！！」

キールは、必死で誤解を解こうとするもこの状態をいいことに、狸が悪ノリしたおかげでますます話がややこしくなった。
するとリッドが、

「なあキール。さっきから嫌な殺気を感じるんだが…」

そう、二人に対してどこからか殺気が向けられていた。

それは、さっきから黙っている凛々しい風貌のポニーテールの女性からだ。しかも彼女の後ろにはただならぬオーラが：

「……たとえ主が選んだ男だとしても、主の守護騎士として主に相応しいかどうか私が見定めよう！！貴様ら、表に出ろ！！！」

いつの間にか剣型のアームドデバイス『レヴァンティン』を起動させ、手に持っていた。

「シグナム、あたしも手伝うよ！こんな奴らにはやてを渡してたまるか！！」

こちらもハンマー型アームドデバイス『グラーフアイゼン』を起動させ、二人に向ける。

「だから、俺たちは違…」

「問答無用！」

「覚悟しやがれ！！」

もはやリッドの話すら聞こうとしない二人。てか、誰でもいいから二人の暴走を止めて！！

「みんなさっきから何言うてんねん？『次元漂流者』を保護したから、しばらくうちに泊まるだけやって。」

『え？？？？？』

「つまり、元の世界が見つかるまでしばらく二人を泊めてあげるっ

てことね。」

「はい…そういうことです。」

「なんだよ…結局はリインの勘違いかよ。」

「ごっごめんなさいです!!」

全員にリッド達の事情を説明し、リイン?の早とちりということで誤解を解いた。

「あっあたしは、はじめっからそうだって思ってたよ。」

いやいや、さっきまで取り乱した挙げ句暴走してたじゃないですか。

「うるせえー!!／／／」

「どうしたのだ、ヴィータ？」

「何でもねえよ…／／／」

「主、申し訳ありません。早とちりとはいえ、私は冷静さを失っていた。主の守護騎士として失格です。」

「シグナムもそんな深く考えなくてええよ。私の説明が足らんかったからみんなが誤解してしもうたんや。それにな、みんながここまですの事を考えてくれていたなんて、うちは嬉しいんや。」

「主…」

「……／＼／」

はやては、隣に座っているヴィータの頭を撫でながら二人に言う。

「あの～お話中のところすみませんが…」

「せやったな。しばらくの間ここで暮らす事になったリッド・ハーシェル君とキール・ツァイベル君や。」

はやてから紹介され、二人は軽く礼をする。

「リッド君にキール君ね。私はシャル。よろしくね。」

「こっこちらこそ、よろしく願いいたします…／＼／」

シャルの見た笑顔にキールは顔を赤らめる。

「あたしはヴィータ。はやてに何かしたら許さねえからな。」

「別に何もしねえよ…」

誤解は解けたものの

、ヴィータは念を入れて忠告する。

「我の名はザフィーラ。『ヴォルケンリッターの盾の守護獣』だ。」

「うわっ!!びっくりした。この犬しゃべれるのか!?!」

「違う!我は犬ではない!守護獣だ!!」

「いや、どうみても犬にしか見えないが…」

「でも、ザフィーラは私の大事な家族の一員や。見た目は犬やけどな。」

「（グサッ！）あつ主まで我を…」

気高き守護獣である自分が犬呼ばわりされ、隅で泣くのであった。

「私は『ヴォルケンリッターの将』のシグナムだ。先ほどは無礼をはたらかせてしまい申し訳ない。」

「いいえ、お氣になさらずに…」

「あたしはアギト。『烈火の剣精』のアギトだ。」

「お前もリインみたいに小さいけど、親戚かなんか？」

「まさか！あたしはあのバツテンチビとは違うよ。」

「あー！！アギトちゃん！それってどういう意味ですか！？」

「いつも怖いことがあったら、泣きながらはやてや姉御に助け求めてるじゃん！」

「ぷう！！私は泣き虫じゃないですう！！」

小さい者同士で喧嘩し始めるが、これは最近の八神家の日常風景らしい。結局リイン？は、助けを求めて、はやてが二人の喧嘩を止めさせる形となった。

八神家全員の自己紹介が一通り終わると、リッドから腹の音が鳴りだした。それに続いて、ヴィータからも確かに音が鳴り出し、はやてとシャル以外は二人を見て呆れる。

「それじゃあ、急いで準備したるから待っててな♪」

「あっ私も手伝うですう♪」

「じゃあ、あたしも。」

そう言って、はやてとリイン？とアギトの三人はキッチンの方に行った。

ヴィータは、はやての料理はギガうめえなどと話し、リッドも楽しみに待つことにした。

「ところでハーシェル。腰の納めている剣だが、お前は剣士なのか？」

すると、シグナムはリッドの剣を見るや目つきが変わった。

「いや、俺はただの猟師だ。でも、旅してた時は剣士もやってけどな…」

「そうか、なら私とぜひ模擬戦を…」

剣士であると聞いただけで、シグナムはリッドに闘いを申し込む。流星はバトルマニア。その場にいたヴィータもやれやれという表情をしていた。

「悪いけど、そういったもんは俺はやらないぞ。」

「何! !」

リッドはシグナムからの模擬戦の申し入れをキツパリと断る。

「俺は狩りをするために剣技を覚えただけ。ただ闘うだけのために剣を振るいたくないし、必要のない事はしたくないんだ。それに…」

一瞬だけリッドは黙り込んだ後、腰に納めている剣『ラストフェンサー』を抜き取る。

「戦う為にこの剣を使うなら、俺の大切な奴を守る為だけって決めたんだ。だから、悪いけどあんたと闘わない。」

そう言いながら、リッドは『ラストフェンサー』を見つめる。のんびりしてそうなりッドもこの時の顔だけは真剣そのものだった。

その姿を見たシグナムは感じ取った。多くの闘いと苦難を乗り越えた強者の気配。そして彼の言う大切な人を守りたいという思いにはとても重く、揺るぎない決意である事だと…

「そうか、それは残念だ。もしハーシエルの気が向いたら、私がいっつでも相手になろう。」

それでもシグナムはリッドと闘ってみたい。そして彼のその揺るぎない決意を自分の目で確かめたい。シグナムの心のどこかで何かが久々に燃え上がってきたようだ。

リッド達の話で盛り上がった夕食後、これから二人が寝泊まりする空き部屋で早速リッドは寝ていた。

「Z Z Z…Z Z Z…」

「全く、寝るのだけは早いんだから…」

「ほんまやな。あれだけ食べれば眠くなるやろう。」

リッドの食欲はヴィータ以上にあり、他の人よりも食べたのだ。

「それにしても、何から何まで準備してもらってすみません。」

「氣い遣わなくてええよ。私もこれぐらいの事しか出来へんけど…」

「いいえ。これだけの事をしてもらっただけでも感謝してます。ほんとにありがとうございます。」

「どういたして。キール君も、もう寝るんか？」

「いえ、少しやっておきたい事があるので…」

「そっか。ほんなら私はもう部屋に戻るけど、あんな無理せえへんで、今日はゆっくり休んでや。ほんなら、お休み。」

はやてがそう言って部屋を出た。

それからキールは、机の電気スタンドの明かりだけ灯し、机に向かって今まで集めた文献に目を通す。すると…

「(何だ、この詩は?)」

ある本の1ページに目が止まる。その本は、昨日の旅の道中で休んでいた時に読んだ古い文献。文章は彼らの故郷インフェリアの古代語とされる『メルニクス語』で書かれてるが、この言語を公用語としているかつての仲間から教えてもらっていたため、解読はそれほど難しくはなかった。

その詩の内容は、

《人間の歴史は戦いと共にある。

幾百の世界で、幾千の時を超えて覇を競い、幾億の命が露と消えた。

仮初めの恩恵を取るがため、犠牲者の血の海の広がり、もはや止まらぬ。

真実を見据えぬ愚者の民の歴史こそ…

人間が永遠に縛られ続ける罪と後悔の鎖》

この詩が一体何を意味するのか全く分からなかったため、ひとまず後回しにして読み進もうと思ったが、流石に疲れたかキールは作業を切り上げ、はやてが用意してくれた布団に潜り、そのまま眠るのだった。

あれから、どれだけの時間が経ったのだろうか？本来なら僕は、この世にいてはならない存在。何もない暗闇の中を何も考えず何も感じず、ひたすら時間が過ぎるただそれだけが繰り返される……これが『死』。だが、時々今でもあの時の光景だけは思い出す。全てが終わったあの時を…

「いよいよ…か。」

「#####：おまえは、どこへ帰るんだ…？」

「わからない…元々、#####なる男はどの場所、どの時代にも存在しない。時空間の彼方をさまようか、#####として消滅するか…。」

「そんな…それでいいのか、#####！！」

わかっていたことさ。僕がこの世界に生き返った時点でこうなる日がいつか訪れることなんて…だが…

「#####として生きると決めたときから覚悟していたことだ。

それに……おまえたちと出会えた。一度死んだ男が手にするには大
きすぎる幸せだ。それが手に入ったんだ。もう悔いはない。」

「#####！」

ふっ、なんて情けない顔をしてるんだ。最期を見送る時ぐらい、し
っかりしてもらいたいものだ。

「僕が助けるつもりだったが、実際は逆だったかもしれないな……あ
りがとう、カイル、ロニ……さらばだ……」

「#####！！！」

その直後、僕は光に包まれて消えた。いや、消滅したと言うべきか
？ いずれにせよ、僕はもうこの世界に未練はない。このまま英雄の
裏切り者として消えるのもいいだろう。だが、もし……

【ミッドチルダ・陸士108部隊隊舎】

「！……ここは……？」

ギンガ達に運ばれた仮面の少年が目を覚ました。気がつく、自分はベットのの上に仰向けで寝かされ、見覚えもない白い天井を見上げていた。

「お！目が覚めたみたいっスよ！」

「うん、良かった…」

すると知らない二人の少女が顔をのぞかせてる。

一人は茶色の長髪を薄黄色のリボンで結わえていて、大人しそうな感じの少女。一人は赤い髪を後ろにまとめた口調からして軽そうな少年的な雰囲気少女だ。

「誰だ、お前たちは…くっ！！」

「まだ動いちゃダメだよ。ひどく怪我しているみたいだから…」

茶髪の少女の言うとおり、彼の体のあちこちに怪我を負い、腕には包帯が捲かれている。

無理もない。聖女との因縁、そして神との最終決戦。壮絶な闘いのダメージの蓄積が今あらわれてもおかしくないからだ。

「ここは、時空管理局の陸士108部隊の隊舎にある仮眠室。外の訓練場であなただが倒れていたのをチンク姉達が運んで来たの。私はディエチ・ナカジマ。よろしくね。」

「ウェンディ・ナカジマっス！よろしくっス！」

「時空…管理局？」

少年は聞き慣れない言葉に戸惑う。

「しかし、チンク姉達が運んで来たはビックリしたっスよ。その変な仮面付けてるなんて、よっぽど変わった趣味持ってるんっスね。」

初対面にも関わらず、この赤毛の少女はいきなり失礼な事を言い出した。

「……悪いか？何を付けようが僕の勝手だ。」

「んや？何ムキになっちゃってるんっスか？」

「…」

赤毛の少女にからかわられ、仮面の少年は不機嫌な表情になった。

「ちょっとウエンディ、初対面の人に失礼だよ。」

「はゝい。」

「ごめんなさい、妹があなたに失礼な事言ってしまった。」

「……別に構わないさ。それよりお前。」

「ん？あたしッスか？」

仮面の少年はウエンディの方を向いて話し出した。

「ただの興味本位で人の事を詮索するのはやめておくんだな。その方が自分の身のためだ。」

「ちょっと、それどういう意味っスか？」

「そのままの意味で言ったつもりだが。それとも、言った意味すら理解できないのか？」

「むっ！なんだかムカつく奴ッスね。」

仮面の少年の言葉にウエンディは腹を立てた。そんなことをしていると…

「二人とも、彼は様子はどうかしら？」

そこへ、ギンガが少年の様子を見にやってきた。

「ギンガ、ちょうどよかった。ちょっと前に目を覚ましたばかりだよ。」

「ほんと！良かったわ。」

少年が目を覚ました事を喜ぶ。どうやら彼女は、仮面の少年の事を心から心配していたようだ。

「お前は？」

「私はギンガ・ナカジマ。ここ陸士108部隊で捜査官をしています。」

「ギンガか。すまないが、聞きたい事が…」

「ちょっと待ってね。色々聞きたい事があると思うけど、その前に

これをあなたにお返しします。」

「……………これは!!」

ギンガは手に持っているものを少年に見せた。

それは少年が腰に納めていた二本の剣だ。そのうちの一本の長剣を見て少年は驚く。なぜなら…

へお久しぶりです、坊ちゃん。よく眠れましたか?」

「シャル!? どうしてお前が…!!」

それは、かつての愛刀にしてかけがえのない相棒であるソーディアン・シャルティエだ。

しかし、彼はあるきっかけで歴史改変を阻止する途中、18年前の空中都市ダイクロフトにある巨大レンズ『神の眼』を破壊する際に、他のソーディアン達と共に消滅したはず。にもかかわらず、なぜ彼がここにいるのか?

「……そうか。無事に歴史が元通りになったのか…」

へええ、そのようですね。」

疑問はすぐに解決した。シャルティエが消滅したのは、あくまでも歴史改変の時の話。歴史が修正され、本来の時の流れに戻ったのだから、シャルティエが自分の手元も何ら不思議ではないと考えた。

「シャルティエさんから色々お話を聞きました。それで…」

すると、少年はギンガの言葉に耳を疑う。

「おい待て！今シャルと話しただと！！」

「はい、そうですけど…」

「そんなはずがない！ソーディアン・マスターでもないお前が、なぜシャルと話せるんだ！？」

そう、ソーディアンはソーディアン・マスターすなわち持ち主しか話す事が出来ないはずだ。

なのになぜマスターでもない奴がシャルと話せるのかと、少年は驚きのあまり少々荒々しい声でギンガへと問う。

「坊ちゃん、落ち着いて下さい。その事については僕の方から説明させていただきます。」

シャルティエは少年を一旦落ち着かせる。

彼の説明によると、この世界には『念話』と呼ばれる通信手段があり、魔法を扱える者なら誰でも使う事ができる。どうやらその『念話』と波長が似ているため、シャルティエの声が聞こえてしまうというのだ。

「納得していただけましたか？」

「にわかに信じられないが…」

理屈は理解したが、少年は少し納得してないようだ。

「へそでしようね。僕も最初、坊ちゃん以外の人に聞こえるなんて正直思ってもみなかったですから。」

「私も最初はあなたのインテリジェントデバイスだと思ってました。」

「インテリジェントデバイス？なんだそれは？」

仮面の少年は初めて聞く言葉に聞き返した。

「この世界で魔導師と呼ばれる者が使う武器の一つらしいです。武器そのものに意志を持っていて、使用者の魔法、つまり僕達の世界で言う晶術の発動を補佐したりするそうです。」

「まるでソーディアンのようなだな。だが、なぜシャルが知っているんだ？」

「坊ちゃんが寝ている間、このギンガさんから色々話を聞きました。そして、坊ちゃんが今どのような状況に置かれているかご説明します。」

シャルティエは話を続ける。

自分達の知る世界『セインガルド』とは違う世界『ミッドチルダ』、様々な次元世界を管理する『時空管理局』と呼ばれる組織の存在などを掻い摘んで説明するが、話を聞く限りではどれも『セインガルド』の技術とは比べ物にならない。

「そうか。僕たちは別の世界に来てしまったのか。」

「おや？坊ちゃんは驚かないのですか？」

「今は、そういった実感が無いからな。」

別世界に来たという実感があまりわからないと仮面の少年は言う。部屋の中なのだから無理もない。

「それで、本来ならあなたを次元漂流者として本局の方へと保護するのですが、シャルティエさんからの提案で民間協力者として、ここで働いてみませんか？」

「!？」

なんと、ギンガは民間協力者として陸士108部隊で働いてみないかと持ちかける。しかも、それはシャルティエからの提案だと言うのだ。

「シャル、ということだ？」

へ管理局に保護されてしまうと、元の世界に送り届けてくれるそうです。ですが、坊ちゃんはず断るはずだとギンガさんに言っただけです。その理由は、坊ちゃんがよく知ってますよね？

「…」

少年は黙ってしまった。なぜなら、シャルティエの言う理由に心当たりがあるからだ。

英雄の裏切り者として一度死んだ自分。そんな自分にもう戻る場所はない。ましてや、この世にいてはならない存在。たとえ戻ったとしても、それが未来への歴史改変になりかねない。

「事情はよくわかりませんが、シャルティエさんがどうにかならないのかと私達にお願いしてました。」

「シャルが？」

「マスターの身を案じて物事を考えるのもソーディアンの務めですから。✓」

「そんな話は初耳だぞ。」

「ええ、坊ちゃんだけですよ。✓」

「ふん。お前は相変わらずのお節介者だな。」

「坊ちゃんの方こそ…」

少年は仮面の隙間から、くすつと微笑の表情を浮かべる。

「人の世話になるのはあまり気が進まないが、他に選択肢はない。ギンガ、すまないがしばらくここに置いてはくれないだろうか？」

「坊ちゃんの剣の腕は確かです。きっとこの部隊で役立てられると思いますよ。✓」

「シャル、余計な口出しをするな！」

「ふふっ、それじゃあこれからよろしくね。ええと…そういえば、まだあなたの名前を聞いてなかったわね。」

「僕の…名前……」

ギンガからの問いに少々戸惑った様子だが、仮面の少年は言った。

かつての自分は英雄達を裏切った剣士。だが今は…

「僕は……ジューダスだ。」

こうしてジューダスは、シャルティエの提案通りに怪我の治療も含めしばらくこの陸士108部隊で世話になる事となった。

不思議な出会いを果たした七人の次元漂流者と魔法少女達。

この先、ミッドチルダも巻き込む危機が訪れようとは、まだ誰も知らない。

その頃、

【??.?】

どこまでも暗闇が続く巨大な空間。

あちらこちらにたくさんの柱が等間隔に建っているだけで、辺りは不気味に静まり返っていた。すると二つの足跡だけが響き渡る。その足跡の主は、御影とゼロス。二人はただ黙ってどこかへと歩いている。

「随分遅かったじゃないですか？御影。」

すると、御影とゼロスが向かう先に何者かが二人を待っていたかのように、一本の柱に寄りかかっている。

体全体を黒いマントで覆い、薄暗くなおかつフードを被っているため顔は見えない。小柄で背が低く、外見のみでは10代前半の少年といった男であることだけしかわからない。右手には赤色の線で何かの模様が表紙に描かれた黒い魔導書のような本を開いている。フードの少年は、御影にゆっくりと近寄る。

「セルシウスの捕獲と『氷の楔』の破壊にしては少々時間がかかり過ぎではありませんか？」

「おい待てよ。俺様たちがどれだけ苦勞してあの『大精霊』とかつての捕まえてるか、あんた知ってるのかよ？」

「ゼロス、僕は御影と話してるんだ。君は黙っててくれないか？」

「なんだあ？俺様を差し置いて御影ちゃんと話そうなんて、そりゃあ頂けないなあ。」

「あんたみたいな馬鹿と話すほど時間を無駄にしたくない。ただそれだけの事ですよ。」

「…んだと!!」

「ゼロス、止めなさい。」

一歩出ようとしたゼロスを御影は引き止めた。フードの少年の挑発に乗ろうとしたゼロスを御影が間に入って止めたのだ。

「さすが御影。自分の立場をよくわかってるじゃないですか。」

そう言いながら、フードの少年は御影とすれ違おうする。

「ただ上から見ていてだけで何もしないような奴に構う必要なんてないわ。」

御影がふと言った瞬間、フードの少年が御影の真横で足を止める。

「私は主に対し心から忠義を尽くし、主が望む理想郷の創造を果たすために動いている。それに比べ、主の部下にも関わらず、何もせずここにいるだけの貴様から言われる筋合いもない。」

「口を慎め。誰に向かってそんな口を利いてると思ってるんだ？」

フードの少年からただならぬ殺気とプレッシャーが御影に向けられ、一瞬にして周りの空気が一気に凍りついた。

「あんたはユグドラシル様の事を崇拝しているようだが、ユグドラシル様が見込んでいるのはあんたの持つ符術だけ、貴様はただの動く駒なんだよ。そんな程度で、たかが人間如きが口答えしててんじゃねえぞ。」

「……………そんな事は、初めから分かっているわ。」

御影は、フードの少年の間近にいるにもかかわらず、顔色一つ変えずに答える。

「ふん…わかってるんなら、さっさとユグドラシル様の所に報告しに行ってこいよ。」

「言われなくてもそのつもりだ。行くぞ、ゼロス。」

「おっおう…」

二人のやりとりをヒヤヒヤしながら見ていたゼロス。フードの少年の横を小走りで通り過ぎ、御影の後について行くのだった。

「人間が……生意気な事を言いやがって………」

そう言ってフードの少年は、御影達とは反対の方へと歩き、限りなく広がる暗闇へと姿を消した。

第8話（後編）（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

どうも！作者の紅蓮です！！

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです♪」

いやあこのコーナーも1ヶ月ぶりですね。その間にいろんな事があったけど、カノンノ。『テイルズオブザワールド レディアント マイソロジー3』参戦おめでとう！！

カノンノ「はい！ありがとうございます。一時はどうなるかと思いましたが、またみんなと戦えて嬉しいです♪」

まっこの本編に出れるかどうかは別だけどな。

カノンノ「そんな事ありません。ちゃんとコーナーを盛り上げて、出演枠を獲得してみせますよ！」

お！？じゃあ、その意気込みで今後も頑張ってちょうだい！！それでは、本日のゲストを紹介しましょう。『魔法少女リリカルなのはStrikers』天を撃ち抜く烈風♪よりヒスイ・ハーツ！！

ヒスイ「おう、よろしくな！」

カノンノ「あれ？ヒスイさんって『テイルズオブハーツ』のパーティーメンバーの1人ですよね？」

ヒスイ「そうなんだが、色々訳あってあっちでフェイト達と一緒にいるんだ。」

それにしても資料を見る限り、ヒスイも苦勞してるなあ。

ヒスイ「まあな。試験の為に毎日勉強するわ、なのはからのキツい教導を受けるわ。」

おまけにO☆H A☆N A☆S H Iまで喰らったんだろ？

ヒスイ「言うな（汗）」

カノンノ「（トラウマなんですわね。）」

でも、いいじゃないか。美人に囲まれて生活してんだからさあ。

ヒスイ「ま、まあそこは否定しねえがよ…／＼／＼」

（ニヤツ）

???「《碎心脚!!》」

ヒスイ「痛っ!!…誰だ!?!いきなり蹴りやがって…って、コハク!?!」

コハク「久し振りだね、お兄ちゃん♪」

ヒスイ「ちょっと待て。何でコハクがここにいるんだよ?..」

何でって、俺が呼んでおいたからだよ。

コハク「お兄ちゃんがなかなか帰って来ないから、私から作者さんに頼んで会いに来たんだよ。でも、何だかあっちで楽しくやってるみたいだから、心配して損しちゃった。」

ヒスイ「なあコハク。何か勘違いしてねえか？俺は別に楽しくなくて…」

コハク「（ギロツ）」

ヒスイ「お兄ちゃんが悪かった、すまん。」

カノンノ「なんだが、ヒスイさんが可哀想になってきました。」

まあそういう星の下に生まれ来たということでは…

ヒスイ「全然よくねえ！！」

改めましてお二人さん。『テイルズオブザワールド レディアント
マイソロジー3』兄妹そろって参戦おめでとう！！

ヒスイ「おう、サンキュー！！」

コハク「うん、ありがとう♪」

カノンノ「そういえば、ハーツの主人公のシングさんってまだ確定していないんですよね。」

そのうち出てくるんじゃないの？一応主人公だし。

ヒスイ「ところでよ、こっちの本編に俺達はいつ出られるんだ？」

やっぱ気になる？

ヒスイ「ああ。」

ほんとに？

コハク「もちろん♪」

ふーん。

ヒスイ「おい作者、教える気ねえだろ？」

あははは、冗談だよ。今回は特別に、今後のテイルズ側の登場キャラを少くしだけお見せしよう。

「あー！！今こども扱いしたでしょ！？」

《テイルズオブリバーズ》

マオ

「ウツシツシツシル〜カ〜くん、ちょ〜と来てくれない？」

《テイルズオブイノセンス》
イリア・アニーミ

「お前の実力はその程度か？ 戦士としての誇りを見せてみる！！」

《テイルズオブシンフォニア》
クラトス・アウリオン

「ちょっとアンタ、真面目にやる気あんの？」

《テイルズオブヴェスペリア》
リタ・モルディオ

「フフ〜ン♪なら、お姉さんが手取り足取り教えてあげようかしら？」

《テイルズオブファンタジア》
ロンドリーネ・E・エツフェンベルク

「俺は、まだまだ甘いかもしれない。けど、もっと強くなってみんなを守りたい。」

《テイルズオブグレイセス》
アスベル・ラント

という感じ。

コハク「それで、私達ハーツ組はどうなっているの？」

そうそう、ハーツ組の出演予定メンバーはこれ。

ヒスイ「どれどれ、（チラッ）お！マジかよ、4人って！？」

あーあー！！それ以上はネタバレになるから！！

ヒスイ「ああ、すまねえ。にしても、俺達が出るのが楽しみだな♪」

言い忘れてたけど、ハーツ組が登場するのはだいぶ先だから。

ヒスイ「どれぐらいだ？」

さあ〜ね。あと20話ぐらい先かな？

ヒスイ「つて、ずいぶん先じゃねえか！！」

その間、あっちの小説で頑張ってくれ。

と言うわけで、今日はここまで。

ヒスイ「おい作者！まだ話は終わってねえぞ！！」

コハク「《鳳凰天駆！！》」

ヒスイ「ぐはあ!!」

はい、次回もお楽しみに!! ご感想やご意見、お待ちしております。

カノンノ「あの作者さん。コハクさんに何かしたんですか？」

ん? 別に何も。高級味噌をあげたぐらい。

カノンノ「それって餌付けじゃないですか!!」

人聞きが悪いねえ。単なるおすそ分けだって。

カノンノ「はあ。」

【お知らせ】

いつも本編を読んでいただき、ありがとうございます。

現在、私生活が忙しい為に執筆が思うようにできない状態にあります。楽しみにして下さる読者様方には誠に申し訳ありませんが、しばらく休載させて頂きます。これからの本編の展開を楽しみにしていらっしゃるかもしれませんが、ご了承いただけると幸いです。

現時点での再開の目処は立っていませんが、なるべく早く再開できるように努力いたします。それまで楽しみに待って頂けると嬉しいです。

これからも本編をよろしくお願いいたします。

予告編（前書き）

読者の皆さん、お久しぶりです。作者の紅蓮です。

まだ活動再開ではありませんが、気軽に読んでみてください。また、見ないうちにPV5万アクセス突破いたしました！読者の皆様、ありがとうございます！

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

今回は、本編の予告編なので短いです。

それでは、どうぞ！！

BGM: Radiant Battle (TOW RM2より)

予告編

一つの世界はとても小さい。だが、一つでない事を知る者にとって、世界はとても広い。そして、決して交じり合うことはない。

異なる世界に異なる時が刻まれ、それぞれの時間を生きる。

だが、その理が破られ、次元を超え、彼らは奇跡の出会いを果たす
……

それが……

T a l e s o f L y r i c a l N a n o h a
〈次元を超えた物語〉

テイルズオブシリーズと魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s
のクロスオーバー小説

そして、その先で出会う者は……

「誰かの役に立ちたい、助けてあげたい、そういう気持ちはみんな
同じだよ。」

《魔法少女リリカルなのは》
高町なのは

「俺は、まだまだ甘いかもしれない。けど、もっと強くなってみんな
を守りたい。」

《テイルズオブグレイセス》
アスベル・ラント

「私やなのは達がいる。だから、一人で悩みを抱え込まないで。」

《魔法少女リリカルなのは》
フェイト・T・ハラオウン

「お前の実力はその程度か？戦士としての誇りを見せてしろ！！」

《テイルズオブシンフォニア》

クラトス・アウリオン

「はやてに何かしたら、あたしが承知しねえからな！」

《魔法少女リリカルなのは A's》

ヴィータ

「私の一番の幸せは、カイルと一緒にいる事…かな？」

《テイルズオブデスティニー2》

リアラ

「もう…援護するから、無茶だけはしないでよね！」

《魔法少女リリカルなのは Strikers》

ティアナ・ランスタール

「たとえどんな罪を背負っても、自分が選んだ道に後悔してねえよ。」

《テイルズオブヴェスペリア》

ユーリ・ローウェル

新たに綴られる物語は、各シリーズのキャラ、総勢100人以上が
登場!!

「はっ!はっ!《幻狼斬!》《喰らえ!牙王撃!》」

「《プラズマランサー!…ファイヤー!!》」

「《氷結は終焉、せめて刹那にて碎けよ!…インブレイスエンド!
!》」

「連結刃!はああああ!!《飛竜一閃!!》」

「はっ!くっ!はあっ!《閃空裂破!》《魔神閃空破!》」

「《来たれ爆炎、焼き尽くせ!バーストライク!!》」

「《クロスファイア…シュート!!》」

「《アクセルシューター!》さらにいくよ!《ストレイトバスター
!!》」

「《仇なす者よ、聖なる刻印を刻め!…エクレームラルム!…!》」

キャラクターの戦闘スタイルは、各シリーズのシステムを採用した原作重視。

「はっ!そこだ!《旋狼牙!》《四葬天幻!》、見切った!《衝皇震!》《雷斬衝!》」

「《腹あ括れよ!天狼滅牙!…!》」

「《貫く閃光!…翔破!裂光閃!…!》」

「レイジングハート!〈Load cartridge!〉……いくよ!《エクセリオンバスター!…!》」

さらに…

「《遊びは……終わりだ!》」

「《いくよ、ストラダー!》」

「《絶氷の剣…その身に刻め!…!》」

「《響け、終焉の笛!》」

「《痛えじゃすまねえぞゴラァァ!!!》」

「《轟天爆碎!!!》」

「《とっておき出しちゃうよ!!!》」

各キャラに最大術技『秘奥義』を実装。

原作ものはもちろん、クロスオーバーならではの合技、合体秘奥義も!?

「《これが私の全力全開!!!スターライトブレイカァァァ!!!》」

「《終わらせてやる!!!全てを切り裂く!!!獣破!轟衝斬!!!》」

舞台は、異なる複数の世界から成る次元世界『ダイランティア』、魔法と科学が発達する世界『ミッドチルダ』

平和の訪れた二つの世界に忍び寄る、新たなる脅威

「貴方たちは何も知らない。世界がどれだけ醜い存在になったかを……」

「なあんだ。言ってた割には、たったその程度ですか？人間！」

「さあ、愚者の民どもよ！永きに渡る貴様らの罪、今こそ我が手で裁こうではないか！！」

運命に導かれたようにして出会い、絆を結ぶ。

「ダチとつるむってのに、いちいち理由なんて必要あんのか？」

「こうやってみんなと出会えたんも、何かの縁やったんやろうなあ。」

そして、それぞれの思いを胸に共闘し合う。

「この剣は俺の大切な奴を守るために振るうって決めたんだ。」

「私は、もう妹たちに自分と同じ過ちをさせない。」

出会うはずもなかった、異なる二つの世界を救った英雄たちと魔法少女たちの物語

それぞれの世界の命運を賭けた戦いが今、幕をあける！！

予告編（後書き）

マイソロ3のPVを見て、本編のPVみたいなもの書きたいなあと
思い、思いつき書いてみただけなのですが、いかがでしたか？

前書きにも書いてあるように、まだ完全な活動再開ではありません。
今現在、ほんの少しだけ余裕が出来たのですが、今後さらに忙しく
なってしまうため、再開時期につきましては全く目処が経っており
ません。本編を楽しみにしていらっしゃる方もいるかもしれませんが、
ご了承ください幸いです。

こちらもなるべく早く再開出来るように努力いたします。それまで、
楽しみに待っていただけると嬉しいですよ。

しばらくの間、休載となってしまいますが、これから本作をよろ
しくお願いいたします。

第9話（前書き）

帰ってきたよおゝ俺！！

失礼しました。改めて読者の皆様、お久しぶりです。もうすぐ再開できそうなので、新年最初の投稿させていただきます。

相変わらず文才がないのですが、楽しんで頂けると幸いです。

誤字、脱字、駄文があるかもしれません。

それでは、初めての方もいつも読んで下さるの方も本編をお楽しみにください！！

第9話

【ミッドチルダ・高町家】

一夜明け、朝日がカーテンの隙間から漏れるほどの清々しい朝を迎えた高町家。なのはは、すでに起きていてキッチンで皆の朝食の支度をしていた。

「ママア、おはよう。」

「ふわあゝ。おはよう、なのは。」

そこへ、パジャマ姿のヴィヴィオとアーチェがリビングに入ってきた。起きたばかりか、二人とも寝ぐせで髪が少し乱れ、眠たそうに目を擦っている。そんな二人の姿を見て、なのはは思わず微笑む。

「ふふっ♪おはよう、ヴィヴィオ、アーチェさん。もう少しで朝ご飯できるから、二人とも着替えて来てね。」

「「はあゝい」」

なのはに言われるがまま、二人は着替えに部屋へと戻っていった。数分後、アーチェはいつもの服装、ヴィヴィオはSt. ヒルデ魔法学院の制服を着てリビングに戻ってくると、テーブルにはできたての朝食が並び、三人が席につく。

『いただきます!!!』

今日の朝食は、焼きたてのトーストに目玉焼き、ポタージュスープ、サラダといったシンプルな洋食で、アーチェとヴィヴィオは美味しく食べる。

「アーチェおねえちゃん、そのイチゴジャムとって。」

「いいよ…はい、どうぞ。」

「ありがとう♪（ニコッ）」

まるで仲のいい姉妹のような二人。こうして見ると、幸せ家族の朝の団欒という感じだ。

「ねえねえなのは。帰るまでの間さ、あたし何してたらいいかな？」

すると、アーチェは両手に持ったトーストを食べるのを一旦止めて、なのはに尋ねる。なのはは、考えるように少し間をあけてから答えた。

「そうだね……じゃあ、私と一緒に本局に来てもらえるかな？ヴィヴィオも学校があるし、アーチェさん1人で家に置いておくわけにもいかないから…」

「オッケー！わかった。じゃあさあ、あたしに何か手伝える事とかないかな？」

「え!？」

「ほら、管理局って魔法が使える人がいっぱいいるでしょ？ こう見えてもあたし、魔術には結構自信があるんだ。これから色々お世話になると思うからさ、手伝える事があったらあたしに何でも言っ
てよ♪」

アーチェは、しばらく高町家に居候することになる代わり、自分もその恩返しに何か手伝いたいというのだ。

まだなのはやヴィヴィオは知らないが、アーチェはハーフエルフにして一流の魔法使い。多く魔導師が所属する時空管理局で、自分の魔法を役立てたいというのが彼女の思いなのだろう。

勿論、アーチェの突然の発言に少々戸惑ったのはだが：

「でも、管理局の仕事は危険が伴う事がたくさんあるの。アーチェさんが魔法を使えるからって言っても、危ないことさせるわけにはいかないの。」

「へーきへーき♪あたしの仲間といた時なんて、危ない事しよっちゆうあったもん。」

「えっ？ それってどういう事？」

「うーん、話すと長くなっちゃうんだけど、とにかくそういうのはもう慣れてるって事。だからお願い！」

懇願するように頭を下げた頼んでみるアーチェ。

「ありがとね。アーチェさんのその気持ちだけで私は十分だよ。でも、やっぱり危ない事はさせられないの、ごめんね。」

「もう、なのはのケチ…」

やはり危ない事はさせたくないという気持ちが強く、アーチェの気持ちに感謝しつつ断った。

「ごちそうさま！」

そうこうするうちに、ヴィヴィオは一人食べ終わってしまった。

「アーチェさんも早く食べてね。もう少ししたら、私達も出かけるからね。」

「うん、わかった！」

アーチェが一番遅れていたため、急いで朝食を済ませる。

【ミッドチルダ・時空管理局本局 演習場】

時刻は正午をまわった。晴れ渡る空の下、今この演習場である次元航行部隊の訓練が行われていたところだ。

「整列！…高町教導官！！」

『ご指導ありがとうございました!!』

整列する隊員達。彼らの前には、バリアジャケットを着たなのがいる。ただ普段とは違い、凛々しい教導官の姿がそこにあった。

「はい。みんな、お疲れ様。明日は実践経験を積む意味で模擬戦を行うから、各自作戦や戦略をしっかりと立ててきて下さい。」

『はい!!』

全員、引き締まった返事をするが、かなりお疲れなのが表情からわかる。

彼女の教育方針は、基礎と模擬戦で徹底的キツチリ打ちのめし、多くの事を学んで欲しいというやり方をとっている。だが、それも過去の経験から自分と同じようにさせないという思いがあるから、厳しいながらも確実に教え子達が強くなっていくようにしたい。かつてのフォワードの子達と同じように…

話は戻って、訓練が終わると、少し急ぎ足でなのはが演習場の様子が見れるモニター室に入っていた。

「アーチェさん、お待たせ。」

「あっなのは!お疲れ。」

そこには、アーチェが座って待っていた。彼女からなのはの仕事する姿を見たいという事で、訓練中はここにいてもらったのだ。しかし、自分から言っておきながら口の周りには眠っていた痕跡が…

「ごめんね、やっぱり退屈だったかな?」

「そっそんな事ないって！あんな大人数をなのは1人で教えてるなんて凄いよ。あたしだったら絶対に出来ないよ。」

寝ていた事を誤魔化すようにして、なのはの凄さをアーチェは称える。

それもそうだ。管理局内にとどまらず、ミッドチルダでも『エース・オブ・エース』と呼ばれるほど、彼女の右に出る者はないトップクラスの魔導師だ。そのため、彼女に憧れる人も数多い。勿論、アーチェはそんな事を知るはずもない。

「ありがとう。それよりもお腹すいたでしょ？これからご飯食べに行こ。」

「ヤッター！あたしもうお腹ペコペコだったんだよね。」

ご飯と二文字を聞いただけで、急に元気になったアーチェ。二人は部屋を出て、食堂に向かう。

「なのは！早く早く！」

アーチェは、一人でどんどん先に進んでいく。ちなみに、この世界にいる間、箒での移動はあまりにも目立つので、極力歩くようになる。はから言われているため、彼女は大切な箒を持ちながら歩いている。とても珍しい光景だ。

「もうアーチェさん。そんなに急がなくても…」

「（ドカッ）キャッ！！」

「アーチェさん！」

なのはが言ってるそばから、アーチェは廊下の突き当たりで誰かとぶつかって二人とも転んだ。

「イタタツ…あつごめんなさい！大丈夫ですか!？」

「平気平気、あたしの方こそごめん。」

アーチェはぶつかった青髪の少女の顔を見ながら謝る。

「アーチェさん、大丈夫…あつ！スバル!？」

「なのはさん!？」

そう、アーチェのぶつかった相手とは、元機動六課FW陣の一人、スバル・ナカジマ。なのはの事を一番に尊敬し、彼女のように誰かを守りたいという想いから、現在は災害対策・人命救助の最前線に立つ『特別救助隊』に所属している。

「何？なのはの知り合いなの？」

「うん、前の部隊にいた時の私の教え子だよ。それにしても久しぶりだね、スバル。元気にしてた？」

「はい！なのはさんも元気そうで何よりです。」

相変わらず元気いっぱいのスバルの姿を見て、なのはは少し安心してみたいだ。

「ところでなのはさん。この子は？」

「えっと、実はね…」

何も知らないスバルに、昨日起きた出来事を簡単に説明する。

「そうだったんですか。アーチェさん達の世界が見つかるといいですね。」

「ありがとうございます。え」と…」

「あたしはスバル。スバル・ナカジマ。」

「スバルだね。あたしはアーチェ・クライン。よろしく！」

「ねえスバル。これからアーチェさんとご飯食べに行くけど、一緒にどう？」

「えっ！？ いいんですか？」

「うん。せっかくこうして会えたし、みんなでご飯食べた方がきつと楽しいと思うの。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせて…」

そうスバルが言い掛けようとした時、突然スバルに緊急の通信がかかってきた。

「はい、こちらスバル・ナカジマ。」

へナカジマ一等陸士！今どちらにおられるのですか！？<

それは、彼女の所属する『特別救助隊』からのものだ。何やら慌てている様子だが…

「えっ？今、本局に報告書を提出しに行ったところだけど…」

へたった今、本局から市内のホテルで大規模な火災が発生したとの連絡が入ってきました！」

『！！！』

へ現在、逃げ遅れた民間人を別の部隊が救助していますが、作業が難航との事でうちの方に出動要請がありました。現場位置をお送りしますので、ナカジマ一等陸士も急いで現場に向かって下さい！」

「わかった。今すぐ向かいます！……ここからなら、あたしの方が近いみたい。」

モニターに移り出された地図を確認すると、現場から近い事が分かった。

「すみません、なのはさん。お誘いはまた今度…」

「待ってスバル！私も一緒に行くよ。」

「えっ！？でも…」

「ここからだ現場に近いし、応援が到着するまでに時間がかかると思うの。それに、聞いて見ないふりをするなんて、できないの。」

「：分かりました、なのはさん。よろしく願いします！でも、ア
ーチェさんが…」

「じゃあ、あたしも一緒に行くよ。それなら安心でしょ？」

「決まりだね、スバル！」

「はい！」

「ああっ！ちょっと待ってよ！！」

三人は、急いで火災現場へと向かった。

【ミッドチルダ・市街地】

上空を桃色と空色、二本の光の線を描くようにして飛ぶのはとス
バル。

「なのはさん！」

白いハチマキをなびかせながら、先天魔法『ウイングロード』をロ
ーラーブーツ型のインテリジェントデバイス『マツハキャリバー』
で走るスバル。彼女が見つめる先に、火災現場のホテルが見えてき

た。
すでに上の階が黒い煙に包まれているのがここからでもはっきりと分かる。

「スバル、急ごう！」

「はい！！！」

二人は速度を上げ、現場へと急ぐ。

「もう！2人共、速すぎ！！！」

当然ながら、箒で飛ぶアーチェが2人に追いつくわけもなく…
到着すると、火災の規模は一目瞭然。四十階ほどのホテルの最上部から黒煙がどんどん吹き出て、中で燃える炎が時おり見える。スバルが現状を知るべく、救助する部隊の一人に話かけた。

「時空管理局『特別救助隊』のスバル・ナカジマ一等陸士です。本局からの要請で応援に駆けつけました。現在の状況を教えてもらえませんか？」

「ご苦労様です！現在、ホテル内にいた民間人のほとんどは避難、救助しましたが、まだ最上階に何人か取り残されているようです。救助に向かった隊員2人も先程連絡が途絶えたばかりで、これ以上長引かせては危険な状態です。」

もはや一刻の猶予も許されない状態にあった。連絡が取れなくなつた隊員の安否も心配だ。

「スバル、ここは私と二人で救助に向かおう。もう待っている時間

もないよ。」

「分かりました！なのはさん。」

応援部隊もまだ到着していないが、待っている時間もない。なのはとスバルの二人だけで救助に向かうことを決めた。

「やっと追いついたよ。疲れちゃった。」

ちょうど遅れてアーチェも到着した。

「アーチェさん。今から私とスバルで中の人達を救助しに行くから、ここで待ってて。」

到着したばかりのアーチェに、なのはが待っているように伝える。

「待って！あたしも行くよ！」

なんと、アーチェも一緒に行くと言い出したのだ。

「駄目だよ！アーチェさんには危険だよ。」

「でも…！」

「私たちの事なら心配しなくてもちゃんと戻ってくるよ。だから、ここで待っていて。行くよ、スバル！」

「はいっ！！」

「あっ！？ちょっとお！！」

アーチェを置いて、二人は救助に向かった。すると最上部の窓から小さな爆発が起き、外へ火花をちらつかせた。周りの人たちも心配そうに見ている。それを見たアーチェは、自分の箒『スターブルーム』の柄をギュッと握る。

その頃、救助に向かうのはとスバルは…

「うぁりゃあぁあぁあ！！」

瓦礫で塞がれた廊下をスバルの右手に装備した籠手型のアームドデバイス『リボルバーナックル』で粉碎しつつ先を急ぐと、二人は狭い廊下から広間へと出る。隊員たちの通信が途絶えたのがこのフロアだというが、辺りは瓦礫に埋もれ、火があちらこちらに残っている。

「ひどい…」

「さっきよりも煙の勢いが増している。早く見つけないと…」

「…誰か…誰かいるんですか!？」

すると、フロアの奥から人の声が聞こえてきた。

「なのはさん。今の…」

「うん。行ってみよ！」

二人は声のした方に行くと、そこには逃げ遅れたと思われる民間人五人と隊員二人を見つける。

「あなた達は？」

「時空管理局『特別救助隊』の者です。本局からの要請で助けにきました。」

「取り残された民間人はこれで全員ですか？」

なのはが二人の隊員に聞く。

「はっはい、ここに来る前にすべてのフロアは確認しました。」

「ですが、途中で天井から落ちてきた瓦礫で道が塞がれて、その時に自分の足をやられて、身動きがとれなくなってしまっ…」

見ると、一人の隊員の足が負傷して、とても歩けるような状態ではなかった。

「とりあえずこの場所は危険です。早くここを出しましょう。あたしが手を貸します。」

「…すすみません。」

スバルが怪我をした隊員の肩を持ってあげようとした時、突然、上の天井が崩れ落ちてきた。

「スバル！！」

「！！」

とっさの事で反応しきれず、瓦礫が二人に直撃する…と思ったその時、

「《ストーム！！》」

突如として横殴りの強い風が発生し、落ちてきた瓦礫を吹き飛ばす。その場にいた人達は、何が起きたのかすぐには分からなかった。

「ふう〜危ない危ない。2人とも大丈夫！？」

「「アーチェさん！？」」

そこに現れたのは、箒に跨って飛ぶアーチェの姿だった。

「やっぱり来てよかったよ。あたしの勘は冴えてるね☆」

「アーチェさん、どうして来たの！待っててって言ったはずだよ！？」

「そっそんな事言われたって、2人が心配で、いてもたってもいられなかったの。だから！！」

怒りだしたなのはに、アーチェも負けずと反論する。

「あっあの、とにかくここから脱出するのを先にしましょ。」

そう、ここでケンカしている場合ではない。早くここから脱出しなければ…

「それが駄目だよ。あたしが来る時に、瓦礫で道が塞がれちゃった。」

「「!」」

どうやら、アーチェもなのは達と同じ経路でここまで来たようだが、途中でまた瓦礫で道が塞がれてしまったというのだ。これで来た道を引き返すのは、かなり困難となってしまった。さらに悪い事に次々と天井が崩れ、瓦礫とともに上の階の火がこのフロアにも燃え広がってきた。

「ボクたち、もう助からないの？ そんなのいやだよ!」

「せっかく助かるって希望が見えたっていうのに…」

「私達、もう…」

話を聞いた民間人の子供が泣き出してしまい、他の人達も落胆してしまう。すると、なのはが…

「大丈夫だよ。みんなを絶対に助けるよ。」

泣いている男の子に近づいて、励ましたのだ。

「ホント…ホントに、みんな助かるの？」

「うん、約束する。だから、最後まで諦めないで。」

「うん…わかった…」

こんな状態でも、なのは笑顔を見せる。男の子は弱気ながらも涙を手で拭い、泣くのを止める。塞ぎ込んだ他の人達も様子を見て、少しだけ希望が持ち始める。

と、ここでアーチェが何かを閃いた。

「ねえねえ、思ったんだけどさあ。この火事でこんな事になってるんだったら、ここの火を全部消しちゃえいいじゃん？」

なんとも当たり前すぎる事を言い出すが、確かにそれが一番いいではある。だが、これほど規模が大きい火災の火をそう簡単に消せるはずもない。

「それはそうだけど…」

「あたしにいい考えがあるの。あたしにまかせてもらえない？」

そうアーチェが言うものの、民間人の人達は不安そうな顔をする。

「アーチェさん、本当に大丈夫なの？」

「絶対に成功させてみせるよ。だから、あたしを信じて！」

真剣な眼差しでなのはを見る。それは、本気の目をしている。

「分かった。私、アーチェさんを信じてみるよ。」

「じゃあ、あたしも！」

「ボクも！」

なのは、スバルと民間人の子供もアーチェの言うことを信じる。他の人達も彼女を信じる事にする。

「アーチェさん、これでいい？」

アーチェの指示で、できる限り広間の隅に全員を寄せた。その時、すでに火が燃え広がっていた。

「バツチリ☆んじゃ、いっくよ！！！」

アーチェが目を閉じて意識を集中させると、彼女の体が青いオーラのようなものに包まれる。

「《いっけえーっ！飛んでけえー！！：メイルストローム！！：》」

そう言うと、突然大きな水柱が吹き出て、それを中心に水が渦を巻く。瞬く間に火が消されていき、なのは達のいるフロアが水浸しになった。

「まだまだこんなもんじゃないよ！！：《いっけえー！飛んでけえー！！：アイストルネード！！：》」

今度は冷気を纏った竜巻を発生させ、吹き抜けた壁や天井に冷気を

送り込む。すると、所々で激しく燃える炎が送られた冷気で次々に消火していき、やがて全ての炎を鎮火させた。

「イエーイ!!」

「すすすごい!アーチェさん、凄いよ!!」

アーチェの魔法の凄さにみな咄然とする。スバルだけが、目をキラキラさせてながら興奮気味に言う。

「へへえ〜ん!あたしにかかれば、こんな事…へっヘックション!!」

「さっ寒いよお…」

確かにアーチェの魔法のおかげで助かったが、《アイストルネード》のやり過ぎで、水浸しから極寒へと変わってしまった。なのはとスバル以外の人達はブルブルと体を震えてさせる。

「あっあははは…ちょっとやり過ぎちゃったかも…ううっ寒!」

「とっとりあえず、みんな風邪ひかせたら大変だから、ここを出よう。」

そう言って、全員を連れて脱出した。

今回の火災は、最上階にある展望レストランからのもので、ガス漏れによる引火が原因とのこと。負傷者は出たものの、幸い死者は出なかった。もう少し手遅れになっていたら…

いまだ周辺の混乱の続く中、片隅で一人毛布にくるまるアーチェの姿があった。そこへ、なのはがやって来た。

「はい、アーチェさん。」

「なのは…ありがとう。」

買ってきたばかりの温かいココアの缶をアーチェに渡す。それを二、三口だけ飲んでなのはの方に顔を向ける。

「スバルは？」

「今、『特別救助隊』の人達と話をしているところ。しばらく時間がかかると思うよ。」

「そっなんだ。」

会話はあまり長く続かず、二人とも黙ってしまふ。少し間があくと、またアーチェから話かけた。

「あのさあ、なのは。さっきはごめん。約束破っちゃって…」

「えっ？」

「あたしさあ、昔からイタズラばかりやってて、みんなに迷惑かけっぱなしだったんだ。でも、あたしの親友が大変な事になった時に、力になりたいって思うようになったの。それから仲間と一緒に旅して、色々迷惑かけた事もあるけど、みんなの役に立ちたいって。だから、なのはに迷惑かけっぱなしじゃダメって思ったから…」

明るく、天真爛漫な姿を見せていた彼女だが、その心のうちに秘める思いを初めて知ったなのは。
すると、なのははアーチェの隣に黙って座る。

「私の方こそ、ごめんね。アーチェさんの気持ちをちゃんとわかってあげられなくて…誰かの役に立ちたい、助けてあげたい、そういう気持ちはみんな同じだよ。それに、アーチェさんのおかげでスバルやみんなが助かったの。ありがとね。」

「なのは…」

「でも、今度は勝手に無茶な事はしないでね。アーチェさんの帰りを待っている人がいるはずだから。」

「待っている人…」

とっさに、アーチェの脳裏につり目の弓使いの事を思い浮かべた途端に、顔が赤くなった。

「べっ別に、アイツの事なんて！／＼／」

「えっ？」

「ううん、何でもないよ。それよりもお腹空いちやって、もうダメ。」

二人が気が付かないうちに、すでに日が暮れ始め、空がきれいな橙色に染まっていた。結局、お昼ご飯を食べ損なってしまう、アーチエの空腹が限界に近かった。

「そうだね。でも、一旦本局に戻ってからね。」

「えええええ！そんなぁ〜！？」

愕然とするアーチエ。夕食までは、まだまだ先が長いようだ。

第9話（後書き）

【テイルズオブ後書きコーナー】

さあ始まりました！今年最初のテイルズオブ後書きコーナー！！作者の紅蓮と、

カノンノ「アシスタントのカノンノ・イアハートです！お久しぶりです、作者さん！」

おう！久しぶりだな、カノンノ。俺がいなくて寂しくなかったか？

カノンノ「いえ、そんな事ありません（キツパリ）」

（グサツ！）うっ！ヤバイ、今の一言で心が折れそう（泣）

さて、『TOW レディアントマイソロジー3』の発売まで、あと3週間も切ったな。デスティニー2とラタ組も揃ったし、まさかのヴァンも仲間入りして…

カノンノ「あと、ユグドラシルも出てくるんですよね？」

この小説を書いててまさかの登場だからビックリしたよ。ダオスとの絡みはあるのかな？

カノンノ「はぁ、発売日が待ち遠しいですね♪」

俺も早く、本編を進めて他のキャラ達との共闘を書きたいなあ。さて次回は、フェイトとルーク達Sideの話になります。

カノンノ「読者の皆さんからの感想や意見をお待ちしていますね♪」

それでは、次回もお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9941/>

Tales of Lyrical Nanoha ～次元を超えた物語～

2011年11月15日00時30分発行